

真剣で魔王に怯えなさい！！
(5/26より、
更新停止)

volcano

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて『第六天魔王』と恐れられた男がいた。

男の魂は輪廻の輪をくぐり、現世に転生した。

目次

1	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	プロローグ		
1	0												
135	116	107	84	71	58	48	32	22	14	4	1		
2	2	2	1	1	1	1	1	キャラクター設定2	キャラクター設定1	1	1	1	1
2	1	0	9	8	7	6				5	4	3	2
339	308	298	269	253	243	229	224	211	199	174	158	148	

30	29	28	27	26		〈番外編〉	キャラクター設定3	25	24	23
						第27回天神館大体育祭				
545	532	503	490	462	427		414	401	383	364

プロローグ

1582年

6月21日

京都―『本能寺』

「……これが、余（オレ）の最後、か……」

燃え盛る寺内に男が一人立っていた。辺りは既に炎が囲み、脱出は不可能。身を守るうにも、『自慢の鎧』は破壊され身を守る術が無い。

助かる道は無い。　　自分は死ぬのだ。

「……フフ……フフフ……フハハ、フハハハハハハ!!!」

男は『笑う』。業火に焼かれながら男は『笑っている』。

「これが！　これが余（オレ）の最後か！　『第六魔王』の最後か!!」

炎は勢いを増していく。『笑い声』が聞こえなくなる頃には、炎は寺を飲み込んでいた。

この日、一人の男がこの世を去った。男の体は跡形も無く消滅した。

だが、男の『魂』は消えなかった。

魂は輪廻の輪をくぐり、現世に転生した。

これは一人の男の物語。

舞台は『戦国』より400年以上先の未来。

時は『天正』から『平成』へ。

かつて、男は人々に『第六天魔王』と呼ばれていた。

男の名は

『織田信長』

1998年

4月5日

愛知県―名古屋市内―小学校

Side:—————

まだ着なれていないスーツで、私は桜が綺麗に咲いている坂道を歩いてた。

いよいよだ。今日から私は『先生』になるんだ！

彼女の名は『門脇美嘉』。彼女はこの春、夢だった『教師』になった。彼女は今、まさに幸せの絶頂だった。これから、憧れだった子供達との楽しい学校生活が始まると信じていた。

しかし、彼女の希望は叶うことはなかった。

彼女は思いもしなかったろう。

自分の教え子に『魔王』がまじっているなんて。

『入学式』も終わり、私は自分の担当するクラスで自己紹介していた。私のクラスは一年生で皆とっても返事がいい。

「今日から皆の先生になります、門脇です。皆さん、よろしくね♪」
「「よろしくおねがいします!!」」

ああ、これだ！ これを夢みてたんだ！
今日から始まるのね、私の幸せの未来！
んん、涙が出そう！

「それじゃあ、今度は皆のことを教えてもらおうかな？
出席番号順に自己紹介して
もらいます！」

名前と挨拶の簡単な自己紹介が行われる。「将来の夢はパイロット」、「好きな食べ物はカレーライス」といった可愛い自己紹介に、教室の後ろで立っている保護者の方々の顔も緩んでいる。

「はーい、ありがとう♪　じゃあ、次は…『織田信長』君の番ね♪」

一番後ろの窓際の席に座っている子が立ち上がる。

……うわ、あの子本当に小学生？

恐らく身長は学年で一番高いだろう。子供にしては整った顔はとても凛々しく、目付きは子供とは思えないくらい『とがっている』。

何というか、『風格』がある子だなあ……。

…ハツ！ いけない、何考えているの私！

この子は可愛い教え子よ！

確かに大人びているけど、まだ子供よ。見た目で判断してはいけないわ！
そうよ、ものすごくく心の優しい子かもしれない…

「余（オレ）の名は『織田信長』。『第六天』より来た『魔王』だ。」

……………ハ？

「貴様等ガキ共と戯れる気は毛頭ないが、余（オレ）を飽きさせぬよう芸の一つか二つ、

学んでおくがよい。」

私の時間が、いや『彼』を除く全ての生徒の時間が止まった。

S i d e : 織田信長

『輪廻転生』——死してあの世に還った『魂』が再び現世に甦ることを指す。

仏教など信仰していなかったが、余（オレ）の『魂』も輪廻の輪をくぐり、新たな生命として甦った。

ただ、余（オレ）の『魂』は随分『汚れ』が酷かったようだ。

輪廻の輪をくぐる際、『魂』は浄化され生前の記憶は無くなる筈なのだか、余（オレ）

は生前の記憶をもったまま現世に転生した。

余（オレ）の名は『織田信長』。かつて、この国を手中に収めた『魔王』だ。

生まれた当初は何が起こったのか分からなかった。

炎に焼かれ死んだ筈なのに、余（オレ）は人の手の中にいたのだから。

暫くして、自分が生き返ったことが分かった。

そして、戦国がとうの昔に終わっているのを知った。

森は石の壁に変わり、馬は鉄の機巧（からくり）に変わり、人間の肉体は戦をするためものでは無くなっていた。

あの戦国を生きた武将達が見れば、さぞ嘆くことだろう。

だが、余（オレ）は心を踊らせた。

何故ならば、現世（ここ）は見たこともないもので溢れていたからだ。

謎の材質、奇怪な機巧（からくり）、妖術と見間違える技術。

こんなにも『楽しい』ことはない。

こんな経験をしているのは余（オレ）くらいだろう。

余（オレ）は決めた。

余（オレ）はこの二度目の人生を思う存分楽しむと。

心行くまで『愉悦』に浸ると。

「おい！ おまえ！」

「ん？」

外の景色を見ていると話しかけられた。声のする方へ顔を向けると、三、四人のガキ共がこちらを睨んでいた。

「おまえなまいきだぞ！」

「こつちむけよ！」

「さっきの自己紹介もふざけやがって！　おまえ調子にのりすぎたぞ！」

そうだ！　そうだ！　周りのガキ共も賛同してこちらに悪態をついてくる。

喧しいな。『数』さえ多ければ勝てると思っっているのか？

いつの時代も馬鹿の頭の悪さは変わらないらしい。

…ならば教えてやろう。

余（オレ）は椅子から立ち上がり、ガキ共の方へ体を向ける。

「な、なんだよ？ やるってのか？」

「調子のりやがって！」

「イタ目にしてやるぞ！」

「なに、丁度いいと思ってな。」

余（オレ）の言葉の意味が分からんのか、ガキ共は困惑している。

「教えてやろう。余（オレ）が『魔王』たる由縁を。」

S i d e : 門脇美嘉

何が起こったの？

皆に配る教科書を取りに行っている間に？

何故か教室は『半壊』していて、何人かは怪我をしている。

そして、皆顔が強張っている。まるで『喋ったら殺される』とでも言わんばかりに。

そして、惨状の中『一人』、何事もないかのように『織田信長』は外の景色を眺めていた。

この日、私の夢は粉々に砕け散った。

2

「王手だ。」

パチッ

「うぐっ、…参りました。」

「すげえ、」

「もう二十連勝だぞ。」

「さすが『信長様』だ。」

昼休み

織田信長は『将棋』を指していた。

『入学式』の件以来、信長に逆らう者は一人もいなかった。

「(一)『1-2』は、信長を中心に動いていた。」

「つまらんな、張り合いがなさすぎる。」

「そう思うなら手加減してくださいよ。」

「手加減して『これ』なのだぞ。」
「……そうですか。」

さて、ここで『織田信長』がどのような人間か紹介しよう。

織田信長。　彼は『享楽主義者』である。

彼は『楽しい』ことを貪欲に好む。

彼の『愉悦』は、将棋や囲碁といった遊戯や、読書、会話といった一般的なことから、闘争、略奪、侵略といったことまでと幅広い。

そして……

「もう少し『やれる』奴はいないのか？」

「ん、あ！ なら『一城』ならいいかもしれないよ！」

『「一城」？ 誰だ？」

「隣のクラスのやつなんですけど、『チェス』がスゲーうまいって有名なんですよ。」

『「ちえす」？ 何だそれは？」

「将棋に似たゲームですよ。なんでもソイツ、大会で優勝したことがあるとか。」

「ほう、面白い。よし、つれてこい。」

「……へ？ 隣のクラスにいますよ、アイツ。」

「だから？ 何故わざわざ余（オレ）が出向く必要がある。『つれてこい』。」

「……は、はい。」

Side:—————

「——つうわけで、対戦してくれね？」

「……頭がおかしいのかい？ 君達。」

昼休み。教室で優雅にお茶していたら、隣のクラスの生徒達がいきなりやって来て、

『うちのボスが暇潰しにチエスがしたいから、相手をしてくれないか？』

と言ってきた。

「ゴメンだね。他をあたってくれ。」

「そういわずたのむよ！ おまえつれてこなかったら、俺たちが『ヤベエ』んだよ！」

何故か彼等は僕を必死につれていこうとしている。

そういえば聞いたことがあるな。隣のクラスの『織田信長』という奴は、入学式早々同じクラスの生徒に暴行をくわえて、今じゃクラスを牛耳っているとか。

(その際教室を半壊したとか。まあ、どうせ噂だらうげどね。)

「僕には関係ないね。それに、普通はソツチがお願いに来るものだろう。その『ボス』とやらに伝えておきたまえ、『対戦してほしいなら、そつちから挨拶してこい。』つてね。」

「……おい、わるいこと言わねえから来いって！ どうなつても知らねえぞ！」
「ハッ！ どうなるというのだい？ いいから伝えたまえ、こちらは何時でも返事を待っているよ。」

そう告げると、彼等は去っていった。

「おい、いいのかよ『雅人』。『織田信長』つてスゲエ強いらしいぞ。」
「フツ、それがどうしたというんだい。しよせんは『庶民』。僕には足元にも及ばないさ。」

そう。どんなに喧嘩が強かろうが、『庶民』が僕と勝てる筈がない。

僕、『一城雅人』は生まれついで、『勝者』だ。

家は九代続く貿易会社。

幼い頃から英才教育を習い、学問、スポーツ、何でもトップクラスだ。
なおかつ顔も美形。

まさに『天から全てをもらい受けた』のだ。

そんな僕が、何故『庶民』の相手をしなくてはならない？
がある。 馬鹿馬鹿しいにもほど

僕は飲みかけだった紅茶を飲みながら、優越感にひたっていた。

ズドツツカアアアアンツ！

教室の後ろの壁がいきなり爆発した。いや、『崩壊』した。

突然の出来事すぎて、誰も声をあげない。
何だ、何が起こった!?

壁は見事に砕け散っており、隣の教室まで貫通していた。

「随分とデカイ口をきく奴がいるではないか。」

壁の向こうから声が聞こえた。

「余程、余（オレ）を『楽しませて』くれるのであろうな？」

『一城』とやら。」

壁の中から、『ものすごく偉そうな奴』が『ものすごく嬉しそうな顔』をして現れた。

3

Side：一城雅人

あ…ありのまま 今起こった事を話そう！

『教室の後ろの壁がいきなり崩壊して、中から『ものすごく偉そうな奴』が現れた。』

な…何を言っているのか分からないと思うが、僕も何が起こったのか分からない。

いや、本当に。

「な、何だねええ君はあああ！（裏声） かか壁から出てくるなんて、ひひひ非常識だぞお!!（裏声）」

待て待て待て待て待て！ 落ち着け僕！

そもそも何で彼が『壁を壊した』と断定しているんだ!?

あり得ないだろ!?

「わざわざ廊下を通って来るより、『こちらの方』が早かるう。」

向こうも何『当然の事』みたいな空気で話しかけてくるの!?
から目線で!!

しかもスツゴイ上

「おい、アイツって。」

「ああ、『織田』だ。」

ん? クラスの皆が何か騒いでいる。友人の一人が僕に近づいてきた。

「おい、雅人。アイツが『織田信長』だよ。」

彼が?

……成る程、噂通り いかにも『自分が一番偉いんだ』と言わんばかりな奴だな。

(この際『壁』のことは置いておこう。皆も『ふれてない』し。)

「へ、へえ。君が『織田信長』君か？

ぼ、僕が『一城雅人』だが、ぼ、僕に何の用だ

い？」

「何、余（オレ）に喧嘩を売る奴など『久しぶり』でな。どんな馬鹿か見たくてな。」

「喧嘩を売った気はなかったんだかね。それで、僕をどうするつもりだい？ まさか、

ここで喧嘩でもしようというのかい？」

「どうする？ 決まっているだろう。」

「？」

「余（オレ）に喧嘩を売ってきたのだ、その『愚行』骨身に刻んでやろうと思つてな。貴様の得意な勝負で負かしてやろう……強いのだろうか？ 『チエス』が。」

……ハ、ハハハ！

まさか、僕と対戦するつもりなのか!?
『チェス』で!!

「ハハハ！ いいだろう！ 受けてたとう。だが生憎、今チェス盤は無くてね。」

『『チェス盤』？ 『将棋盤』のような物か？』

「……まさか君、チェスをしたことが無いのかい？」

「将棋のようなものなのだろう？ なら問題はない。」

「クツ、ククク！ まさか初心者が『この僕』に挑戦するとはね！」

どんな奴かと最初はビックリしたが、『ただの馬鹿』か。
……よし。

「なあ、信長君。僕に提案があるんだ。」

「ム？ 何だ？」

「チェス盤は明日には用意できる。対戦は明日のこの時間にしないか？」

「フム、いいだろう。」

「さらにだ、…僕は『弱い者イジメ』が嫌いだね。君に『ハンデ』をあげようと思う。」

「………何？」

「まあ、ハンデについては、明日教えよう。君は明日までに、少しでもチェスの『腕』を磨いておきたまえ。」

「………」

ククク、この手の奴はプライドが高いからな…これは屈辱だろう。さあ、どうでる？
織田信長。

ニタア

「「!?」」

何だ？　怒るかと思つたら、『笑つた』ぞ？

……ん？　何だ？

何で皆驚いているんだ？

「…フフフ、フハハ！　余（オレ）に『ハンデ』だと？　フフフフフ！　面白い戯れ言だ……いいだろう！　対戦は明日、お互い存分に『楽しもう』ではないか！　一城とやら！」

「ああ、僕も楽しみにしているよ。」

『楽しそう』な顔しながら、彼は去っていった。

ククク、『ハンデ』を与えたうえで、屈辱的に負かしてやる。

「だ、大丈夫かよ雅人!？」

「心配してるのかい？ 『チエス』で僕が負ける訳がないだろう。ククク、彼の悔しがる姿が目に見えよ。」

織田信長。

明日、君の『プライド』を完全にへし折ってやる

S i d e : —————

「やべえぞ。」

「先生にいったほうがいいんじゃない？」

「バカ！ そんなことしたら、こつちがやられるぞ！」

1—2 の生徒達は今、恐怖していた。

彼等はこの1ヶ月、織田信長と一緒に過ごして

彼等は知っているのだ。

織田信長の『愉悦』を。

彼等は見ってしまった。

一城雅人が『ハンデ』をやると言った時、

織田信長が『笑っている』のを。

彼等は知っているのだ。

織田信長の『一番の愉悦』を。

「まちがいねえよな。」

「ああ。」

「やべえよ。」

「あの人、『壊す』きだ。」

Side：門脇美嘉

あ……ありのまま 今起こった事を話すわ。

『教室に入ったら、『また』教室が半壊していた。』

『しかも、教室の皆は『当然の事』のように席についていた。』

「……………また、私が弁償しなきゃならないの？……………」

4

S i d e : 一城雅人

チェス盤に駒を並べて、準備を整える。

いよいよだ。あの『高慢ちき』の鼻をへし折ってやる！

「な、なあ。大丈夫なのかよ？」

「君も心配性だな。『僕』を誰だと思っているんだい？」

僕は以前、チェスの全国大会で優勝した事がある。

それも『大人の部門』でだ。

本来なら『大人の部門』に僕は出られないが、特別に出場したのだ。

そう、言うなら僕は『日本で一番、チェスが強い』のだ。

そんな僕が『昨日チェスのルールを知った素人』に負ける訳がない。

「それにしても、遅いなあ彼。もう給食は食べ終わっているだろうに。」
時計を見ながら、僕は先程カップに注いだ紅茶を口に運ぶ。

ズドツツカアアアアンツ！

いきなり先日崩壊した壁の 緊急措置として被われているビニールシートが吹き飛

んだ。

シートの下には生徒の侵入を防ぐため、木材で穴を塞いでいたのだが、それも吹き飛んでいた。

「待たせたな、一城。」

『楽しそうな笑み』をしながら、彼『織田信長』が壁から出てきた。

「き、君は普通の登場が出来ないのかい!?!」

「折角空いていた穴を防ぐ奴が悪い。お陰で『また壊す』はめになった。」

……よし、もう壁の事は気にしないでおこう。

きつとツツコンでも意味が無いから。

「ま、まあ席につきたまえ。早速始めようじゃないか？」
「そうだな、始めるとしよう。」

向かいの席に彼が座る。

さあ、いつまで『その笑み』をしていられるかな？

「さて始める前に『ハンデ』の説明をしよう。まず対戦方式についてだが、全部で五回勝負だ。つまり三回先に勝ったほうが勝ちだ。…だが君は僕に『一回』でも勝てればいい。それが君への『ハンデ』だ。」

「成程、フフフ、『一回』勝てばいいのか。」

「そうさ、さあ始めようか。僕が『白』、君が『黒』だ。」

ククク、圧倒的大差をつけて恥をかかせてや

織田信長にとって『将棋』は『戦の指揮の訓練』だった。

駒をどう動かすか？ 相手の一手をどう対処するか？

一軍を率いる『将』として、『幼い頃』より軍事訓練として学んでいたのだった。

信長にとって、

チェスは『兵士の補給が出来ない戦』に過ぎなかった。

「(こいつ、本当に昨日チェスを始めたばかりなのか!? この僕が『ナイト』を取られるなんて!?)」

「『視野』が狭いな。ほら、また一つ。」

「(な!?) 『ルーク』まで!」 ク、クソツ!!」

一城雅人はこんな苦戦をしいられるなんて、思いもしなかった。信長の一手一手は、確実に一城の陣地を侵略していった。

『ポーン』が、

『ナイト』が、

『ビショップ』が、

『ルーク』が、

『クイーン』が次々取られていく。

そして…

「(あり得ない！ こ、この僕が、この僕が!!)」

「『王手(チェック)』だ。」

「んがあ!!」

一城の『キング』の前に『ナイト』が置かれた。

逃げ場は無かった。勝負は僅か『13手』で決着した。

「あり得ない…僕が…僕が…」

「フフフ、何だ。貴様の實力は『この程度』のものなのか？」

「！ 何だと！」

一城は信長を睨み付ける。『それ』を信長は『笑み』で返す。

「フフフ、一城。貴様に『チャンス』をやろう。」

「な、何？」

信長は『実に楽しそうな笑み』をうかべながら、一城に告げた。

「残り四戦、貴様は余（オレ）に一回でも勝つことが出来れば、この勝負貴様の勝ちとしよう。」

「!？」

「余（オレ）に大分不利な条件だが気にするな、これは貴様への『ハンデ』だ。」

信長の提案。

それは先程一城が告げた『ハンデ』そのものだった。

「ああそうだ、ついでに余（オレ）は自軍の駒をいくつか減らそう。これなら『貴様』でも勝ち目が出よう？」

「ふ、ふざけやがってえ!!」

いいだろう!!

後四戦!!

全勝してやる!!」

「フフフ、では始めるとしよう。先攻はそっちだ。」

「（負かしてやる！

絶対負かしてやる!!）」

一城はかつてない程真剣な表情になっていた。

一城はチェス盤に集中していたためか気付いていなかった。

織田信長がまるで『欲しかった玩具を手に入れた子供』のように笑っているのを。

第二戦

信長は『ポーン』三騎、『ナイト』を使わず、24手目で勝利した。

第三戦

信長は『ナイト』、『ビショップ』を使わず、17手目で勝利した。

第四戦

信長は『ナイト』、『ビショップ』、『ルーク』を使わず、19手目で勝利した。

「嘘だ…嘘だ、僕が…ぼ、ぼくが…」

「どうした？ 次は貴様の番だ。早くしろ」

そして第五戦 21手目

信長は『ポーン』、『キング』以外の駒を使わず、一城の駒を次々と奪っていく。

そして…

「『王手（チェック）』だ。」

「……………」

一城の『キング』の前に『ポーン』が置かれた。
勝負は信長の『完勝（パーフェクト）』で終わった。

一城は言葉が出なかった。

勝負を見ていた生徒達も同じだった。

「……………」

「結果は『五回』だったな。フッフ、一城。」

「？」

それまでの勝ち気な表情は微塵も無い顔で、信長の方を向いた。

「『歩兵』に命（タマ）を取られるとは、貴様は随分と愚鈍な『王』なのだな。」

信長は『今までにない程の笑み』をうかべていた

「……………」

ドサツ

一城は目を白くして気絶した。

彼の『心』は完全に『壊れた』。

織田信長。彼は『享楽主義者』である。

彼の『愉悦』は遊戯から読書、会話、闘争、略奪、侵略までと幅広い。

そして…織田信長の『一番の愉悦』。

それは

『壊すこと』である。

名匠がつくった力作を

鍛えぬかれた武士の技を

高貴な生まれに生まれた者の傲慢（こころ）を

完膚なきまでに『壊すこと』が。

一流の芸術品が

長年積み上げた技が

自信にあふれた笑みが

。砕け散るのを見るのがこの上なく好きなのだ。

「1―2」の生徒達は知っていた。

信長の『一番の愉悦』を。

ゆえに彼等は一城雅人を必死に止めようとしたのだ。

彼等は以前も信長が『壊す』のを見たことがあった。

それは入学式から少したってからの事。

信長のことを生意気だと思っていた上級生達が、信長を痛めつけようと押しかけてきた。

彼等はその時見た。

『砕かれた』上級生達を

『壊された』上級生達を

信長の『愉悦にひたる笑み』を。

彼等は恐怖した。

もしかしたら、

『あの笑み』を向けられていたのは、自分達かもしれないのだから。

信長に押しかけてきた上級生達は、今だに病院のベッドで目を覚まさない。

「まあ、中々『楽しい余興』であつたぞ。一城。」

気絶した一城を見下ろしながら、

信長は『楽しそうに笑っていた』。

この日を境に、信長に喧嘩を売る生徒はいなくなつた。

『第六天魔王』は再び人々の心に、恐怖を植えつけた。

5

P r r r r r

P r r r r r

ピッ

「何だ?」

『あ、『信長君』♪

ねえねえ、今何処にいるの?』

「ム? 今……」

くらいやがれええええええ!!!

バキッ

ギヤアアアアアアアア!!!

「……今『外』にいるが。」

『ちようどよかったあ。実は『おつかい』に行つてほしいんだけど。』
「『おつかい』？」

ド、短刀（ドス）が折れやがった！

拳銃（ハジキ）持つてこい！ 撃ち殺せ！

『今日『肉じゃが』作ろうと思つているんだけど、『お肉』と『糸コンニャク』と『お醬油』が無いのよ。だから、買つてきてほしいんだ♪』

「……なぜ余（オレ）が

『お願いね♪』 プツツ

……引き受けたとは言つてないんだが……」

キンキンキンキンツ

タ、弾（タマ）が効かねえぞ！

殺せえ！

ギヤアアアアアアアア！！

弾（タマ）が跳ね返った!?

何なんだよお！ アイツはああ!!

「……ん？ ああ、もう『終わった』のか？」

「あ……あ……」

愛知県の裏社会の頂点にたつ暴力団『北沢組』。

組織の巨大さだけでなく、『腕っぷし』の強さも有名な暴力団だった。

「『暇潰し』にはなるかと思っていたんだが……『最強』が聞いて呆れる。」

織田信長がそこに現れたのはほんの一時間前だった。たった一時間で愛知県最強と恐れられた暴力団は壊滅状態に追いこまれた。

「た、助けてくれ！　い、命だけは！」

「騒ぐな、余（オレ）は『暇潰し』に来ただけだ……そうだな、一つ頼みがあるんだが。」

「！　わ、分かった！　何でも言うことを聞く!!　（か、金か？　それとも……）」

「なら今すぐ『肉』と『糸コンニャク』と『醤油』を買ってこい。」

「……ハ？」

Side : 織田信長

「ん〜♪ 美味しい♪ さすが『松阪牛』ね♪」

「グフツ ま、『松阪牛』!?」

「そうよ〜『信秀君』♪ 信長君が買ってきてくれたの♪」

「ちよ、信長いつたいこれ、いくらしたの!?!」

「知らん。買ったのは余（オレ）じゃないからな。」

「『お友達』が買ってきてくれたんだって。」

「いや、おかしいでしょ!?! 何『当然』のように流してるの『由紀』さん!」

「え? どこが?」

「どこがって、信長の友達が『松阪牛』を買ってくれたことだよ!」

「お金持ちなのね〜。」

「違うよ!?! 何かいろいろと違うよ!?!」

『第六天魔王（オレ）』にも『親』がいた。

父は一国の主だったが、『その身に余る理想』を持ちすぎ死んだ。

母は……全く覚えていない。どんな顔かも、どんな『人間』だったかも。

余（オレ）は『親』という存在に、『恩』というものを感じたことがない。

育ててくれた恩？

育ててくれたのは乳母や付き人の爺だ。

生んでくれた恩？

生んだ『だけ』だ。他には何も無い。

余（オレ）にとつて『親』は『自分を生んだ人間』、それだけの存在と認識だった。

だったのだが……

「ほら、食べないなら食べちゃうよ〜♪」

「待つて！　よく考えて！　『小学生の信長』の友達が、『松阪牛』を買ってくれて、

お金も返さなくていいって言っているんだよ!？」

「お金持ちなのね〜。」

「チツガアアアアアウツ!!

着眼点がチツガアアアアアウツ!!」

『今の親』は『前の親』と全く違う。

特に母の方が。

『前』が『あれ』だっただけに接し方がよく分からん。

そもそも、なぜこの『二人』は余（オレ）に『ここ』までしてくれるのだ？

余（オレ）から二人に何かをしたことは一度もない。それなのにだ。余（オレ）には理解出来ん。

これが『親』というものの、本来の在り方なのだろうか？

「信長君、助けて。お父さんがイジワルする。」

「してない！　してないよ！　ただ僕は着眼点を変えてほしいだけ!!」

……ただ一つだけ言える。

「そうだな、『母』もこう言っているんだ。『父』も許してやれ。」

「何でお父さん悪者になつてゐるの!?! 　いつから『そういう空気』になつたの!?!」

「よし、信長君に免じて許してあげる♪ 　だからお肉ちようだい♪ 　」

「余（オレ）も貰うぞ、余（オレ）まで巻き込んだ『罰』だ。」

「結局 肉食べたいだけかいイイイイイイ!!」

ただ一つだけ言える。

『親』としてはどうか分からんが、

『人間』としてなら、

『今の両親』は非常に『面白い』。

6

Side : |

クソツ!

あっているはず、

あっているはずなんだ……

スツ スツ スツ

……クソツ

「な なあ、どうなんだ？」

「大丈夫、だよな？」

「……お、おい、」

何で、何でこうなったんだ。

俺達は、どこで間違ったんだ。

「何時まで待たせるつもりだ。」

心臓が止まりかける。汗が体中から溢れてくる。

ゆっくりと後ろをふり返る。

そこには

『人力車』に乗っている俺達の『ボス』、『織田信長』がいた。

「それで、『どうなのだ』？」

「あ ああの、その……」

「こ これは俺達のせいじゃないっていうか……」

「むしろ俺達も被害者というか……」

「黙れ。」

「「はい……」」

「……で、余（オレ）達は……」

『迷った』のか？」

「「……はこ。」」

2003年 8月3日 京都府

織田信長は『修学旅行』で京都に訪れていた。

今日は修学旅行3日目

五人一組の班に別れて、各班自由に行動していた。

信長の班は、市内を散策していた。

……いたのだが、

「で、『此処』は何処だ？」

「……分かりません。」

「…地図を見ていたのではないのか？」

「……いや、もう『さつぱり』で、」

「……」

「「……」」

バツ

「「すいませんでしたああああ!!」

どうか、どうか命だけはああああああ!!!」

ズツダアアアアンツ!!

それはそれは綺麗な土下座をしていた。

「……ま、別に何処かに行きたかった訳でもないしな……」

信長にとって『旅行』は、『楽しい余興』に当てはまる。

なのに何故信長が、こんなにテンションが低いのかというと、京都に行き慣れているからだ。

それは『現世（今）』ではなく、『戦国（昔）』の頃のこと。

信長は『京都』が好きではない。かといって嫌いなわけでもない。

どんな華やかな都も、見慣れてしまえば只の街だ。

「まあ、何処も古臭い土産屋ばかりだったしな、いつその辺りを見て回るのも悪くない。」

「! 本当ですか!」

「や、やった! まだ『生きられる』んだ!」

「よかった…本当によかった…」

彼等は涙を流し喜んだ。

「……でも、何処に行くんですか?」

「何処でも良からう、まず『旅の資金』を調達しに市街に行くか。」

「「え?」」

どんな街にも必ずあるものがある。その一つが『銀行』である。

信長達は人力車に乗って街を移動していた。

(乗っているのは信長。後の四人は人力車を引いている。)

「ふむ、ようやくと『この辺り』が何処か分かってきたぞ。この周辺に銀行がある。」

「いや、最初マジビビったよな。」 ヒソヒソ

「ああ、そこらへんの人を襲うのかと思ったぜ。」 ヒソヒソ

「あ、彼処に『銀行』ありますよ！」

「あれ、でも何か変じゃ……」

「オラオラ！ 静かにしやがれえ！」

「俺達に近づいたら、ブツばなすぞ!!」

バンツバンツ！

「ぐわああああ！」 バタツ

「こ、小林イイイイイ!!」

「ほ、本部! 至急応援を!

我々だけでは、食い止められません!」

「何あれ? ねえ、何あれ?」

「『銀行強盗』…じゃね?」

「お おい、警察官の人射たれてるぞ!」

「やべえな、早いところずらかろう…」

ハッ!

彼等は一斉に振り返った。

そこには

Side : 銀行強盗

「へへへ、チヨロいもんだぜ！」

「オイどうしたあ！ そんなんじや俺達逃げちやうよお！」

ハハハ！ 何だ何だ何だ何だ！ 最初はどうかと思っていたが、楽勝じや

ねえか！

サツの連中なんて、ビビリ上がつて何にも出来てねえ!!

「オイ！ テメエラ！ そろそろ引き上げつぞ！」

「ハハハ！ アバヨ！ サツ共！ 捕まえられるもんなら、捕まえてみる！」

物凄い勢いで人力車が突っ込んできた。

え？

え？

Side : 銀行強盗

あ…ありのまま 今起こった事を話すぜ！

『車に乗ってトンスラッコこうとしたら、

ガキが泣きながら人力車引つ張って突進してきた。』

な…何を言っているのか分からないと思うが、俺にも何が起こったのか分からない。
…つうかマジで何なんだ!? コイツら！

「何だあ、テメエラ！ 死にてえのかあ!? ああ！」

ジャキツ

仲間の一人が、ガキ共に銃口を向けて脅しをかける。

「死にたい訳ないだろ、馬鹿あああああ!!」

「は?」

「俺達だつて、『こんなこと』になるとは思ってなかったんだよおおおおお!!」

「だいたい何『強盗』なんかしてんだよ! そんなことしたら『喰いつく』に決まってるだろおおおおお!!」

「常識考えろよおおおおお!!」

……何だあ? コイツら?

銃向けられてんのに、恐くねえのか?

「いいところで『強盗』をしてくれた。調度いい暇潰しが出来た。」

突っ込んできた人力車から、またガキが出てきやがった。
それも『スングえく偉そうな』奴が。

「オイ！　俺達のことナメてんじゃあねえぞ！」

「マジで死にてえのかあ!？」

ガンツ！

地面に向けて威嚇射撃する。

『ヒッ！』

ガキ共はビクついて地面に伏せる。

『一人』除いて。

『人力車に乗っていたガキ』は、銃口向けられてるのに『笑って』いた。

「オイ、テメエ！ さつさと地面に伏せろお！」

「2秒以内に伏せなかつたら、『ドタマ』ブチ抜くぞ！」

こんなに脅しかけてるのに、『あのガキ』はまだ伏せねえ。

それどころか『こっち』に近づいてきやがる。

「どうした？ 遠慮はいらんぞ、撃つたらどうだ？ それとも……怯えて指が動か

んのか？」

ニヤア

……ニタニタニタニタしやがって…

「そんなに死にてえんなら殺してやるぜえ!!」

ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！

この日の為に用意した『ガバメント』をブツばなす。

鉄板に穴が開く『シロモノ』だ。

顔を原型が残らねえほどグチャグチャにして…

キンキンキンッ！

は？

「フム、良い銃だ。中々の威力と早さだ。」

パラ パラ パラ

ガキの手から『弾』がこぼれ落ちた。

「なな 何が起こったんだあ!？」

「うう 撃て! 撃ちまくれえ!!」

ガンッ!ガンッ!ガンッ!ガンッ!

他の仲間も『あのガキ』狙って撃ちまくる。

キンキンキンッ!

「馬鹿の一つ覚えが、鉛弾が余（オレ）に効くわけないだろう?」

な、何なんだよおコイツは! 今度は『素手』で『弾きやがった』!

「さて……次は此方の番だな……」

背筋に寒気がはしる。

「バ、バケモンだ！」

「に、逃げるぞ！ わざわざ相手にすることなんてねえ！」

逃走用の車に急いで乗り込む。予めエンジンをかけといて良かった。

「ギヤアツ！」

グチャ

『何か』が『潰れた音』がした。

クソツ 『一人』ヤられたか！

「早くしろお！」

「お、おう！」

ブロロロオオオオオ……

Side：織田信長

「ム、しまった『コイツ』に夢中になっていた。」

ドサツ

手に持っていた『モノ』を捨てて、余（オレ）は去っていく車を見ながら考える。
どうすれば『奴等』に追い付くか、と。

「……ム、『アレ』は……」

「貴様等、いつまで地面に口付けしているつもりだ？」

カエルのように這いつくばっている馬鹿共に声をかける。

「も、もうやめましょう！　これ以上はヤバイですつて！」

「そうつすよ！　それに『アイツら』もう車で逃げちやったし、どうしようもありませんよー！」

「何を言っている。『アレ』があるではないか？」

「「え？」」

信長が指をさす方向には、

『警察官達が乗って来ていた　パトカー』があつた。

「イヤイヤイヤイヤイヤ！ 無理です！ だって俺達未成年ですよ!」

「知らん。『アレ』に乗って追跡するぞ。」

「無理ですよ！ それに警察が俺達に『パトカー』貸してくれる訳ないじゃないですか!」

「そうですよ！ 後は警察に任せて帰りましょう！ 修学旅行を楽しみましょう

!」

「……………」

アレ、説得効いた？

信長が静かになったことに、四人はそう思った。

「貴様等……」

『車に乗って追跡する』か、『今ここで地に還る』か、選択肢は『二つ』だ。」

Side：銀行強盗

「何とか逃げきったぜえ。しかし何だったんだあ、あのガキ共。」

「知るかよ、もう会いたくもねえ。」

「だな。それより『分け前』どうすんだあ？」

銀行から3km程離れた海沿いの道を俺達は走っていた。

さつきは変なガキに手こずったが、もう大丈夫だろ。

それより『分け前』をどうにかしねえとな。『一人』減っちゃったから、一人分『余っちゃった』。

「取り合えず、アジトに戻ろうぜ。取り分の変更はその時でいいだ……」

「……ん？ どうしたあ？」

「チツ、サツが来やがった。」

ふと後ろを振り返ったら、『パトカー』が見えた。

「マジでか？ アソコにいたサツは、全員怪我させたんじゃあねえのかよ？」

「『応援』だろ？ まさかこんな早く来るとはなあ。」

たく、次から次とメンドクせえ！ 近づいてきたら撃つてや……

「……なあ、何か『変』じゃね？ あの『パトカー』。」

「ああ、何かものスゲエ『蛇行』してんだけど。」

「つうか『早く』ね？ 何km出してんだ？」

「……なあ、アレ『ぶつかって』くんじゃね？ 『こつち』に。」

「ハハハ、まさか。くるわけねえだろ？」

「だよな。ハハハ！」

「ハハハハハハ!!」

ズドバアアアグオン!!

後部座席にパトカーが突っ込んできた。

あまりの出来事に全員声が出ない。

窓越しに見えるパトカーの中には、『さつき』のガキ共が乗っていた。

Side : A

「あああああああ やっちゃったあああああ!!」

全身から汗をふきだしながら、必要以上にハンドルを強く握る。

スピードの調節など出来る訳もなく、見事に突っ込んでしまった。

助手席に座ってる奴が泣き叫んでいる。ブレーキを担当している奴がガタガタ震えている。

その『結果』に満足なのか、後部座席に座っている『信長様』は、嬉しそうに『笑っている』。

「『追いついた』な。ほれ、何を呆けてる。もっと『ぶつかれ』。」

「クソツタレエエエエエエエエエエエエ!!」

どうしてだろう、涙で前が見えない。

S i d e : B

パトカーがまたトンでもないスピードで突っ込んできた。
車の後ろのトランクはモノの見事に凹んでいた。

「オイ! どうなってんだあ!?! アレさっきのガキ共じゃねえか!」

「知るかあ! それよりハンドルしっかり握れ! またぶつかってくんぞ!」

ズドバアアアン!

うおおおっ! グツ、調子にのりやがって!

ぶつかった衝撃で、車は更に凹み、『燃料』が漏れだしていた。

「クソツ、 撃てえ! 撃ち殺せええ!!」

ガンツ!ガンツ!ガンツ!

S i d e : A

「うわああ! 撃ってきた!」

眼前のフロントガラスから見える『銃』が自分に向けられているのに恐怖する。慌てて座席の下に潜ろうとすると、

「慌てるな、心配ない。」

キンキンキンッ！

いったい何が起こったのか。

銀行強盗達が撃った弾は『フロントガラスがはじき返した』。

他の皆も驚いている。このパトカーって『防弾ガラス』を使っていたのか？

そうだとすると、それを何で信長様は『知っている』んだ？

「案ずるな。この車が鉛弾で『貫通することはない』。それよりもっと『突っ込め』。」

「『防弾ガラス』なんだろう!? 『フロント』じゃなくて『タイヤ』を狙え!」

クソッ! やっぱりコイツらを仲間にするじゃあなかつた!
もつと『頭のキレル奴』を仲間にするんだつた!

「何とかしろよ テメエ!」

「ウルセエ! アホ共! 今考えてんだ黙ってる!!」

クソ! 絶対あのガキ共、殺してやる!

S i d e : A

一見するとこつちが優勢に見える。けど、体当たりするたび、このパトカーもどんどん凹んでいる。

「どうするんですかああ！　このままじゃ俺達も死んじゃいますよ!？」

涙と鼻水で顔をグチャグチャにしながら、後ろで『笑っている』信長様に助手席の奴が話しかける。

「喚くな。貴様等は黙って余（オレ）の指示に従っていればいい。……よし、『捕れた』。オイ、もつと『飛ばせ』。」

「ハ、ハイハイハイハイ!!」

ブロロオオオオンッ……

「何だあ？ アイツら体当たりしてくると思ったら、先に行きやがったぞ？」
「へ！ 恐くて逃げたんだろお！」

……本当にそうなのか？

もしかしたらアイツら、『何か』『企んで』んじや……

「ア、アレ？ 『無い』、『無い』！」

「ん？ どうした？」

「な、『無いんだ』よ。俺の『銃』が！」

S i d e : A

「よし、そのまま揺らさず飛ばせ。」

「どうするんで……つてええええええええ!! その『銃』どうしたんですか!？」

「奴等から『頂戴』した。喋りかけるな、『気が散る。』」

既に強盗達の車がミニカーに見えるこの距離で、信長様は『強盗から捕った銃』を構えた。

「『この距離』から『撃つ』つもりですか!？」

「無理ですよー!」

他の皆も同じ意見だ。

「余（オレ）を誰だと思っている。余（オレ）は『今まで』、『銃（コレ）』を外したことなど一度もない。」

信長様は、俺達の言葉なんか聞きもせず銃を発射した。

ガンツ！ガンツ！ガンツ！

S i d e : B

ガンツ！ガンツ！ガンツ！

「な、何だあ!?! 何か当たったぞ!」

「『前』からだ! アイツら、俺の『銃』を盗って『撃ってきた』んだ!」

馬鹿言うな! 銃を盗った!?! どうやって!?!

何が起こっているのかサツパリだ！

パンツ！

ガリツ！ガリリリリリツ
!!!!

「な、何の音だ？　何か聞こえつぞ！」

「タ、『タイヤ』だ！　『タイヤ』がパンクしやがったあ!!」

アイツら、本当に何なんだ！　クソツ！何でこんなことに！

「『ブレーキ』だ！　『ブレーキ』を踏め！」

「お、おう！」

ハ？『ブレーキ』？

「何か…もう、いろいろ……」

「…これ、夢…じゃ、ないよな?…」

全員呆気にとられていた……………

「ところで貴様等、『いつまで飛ばす』つもりだ?」

「「え?」」

信長達を乗せたパトカーは、スピードを緩めることなく走っていた。

「あれ!?! 止まらない!?! 止まらないんだけど!?!」

「ウソオオ!?! ブレーキ! ブレーキ踏んで!」

しかし、パトカーは止まらない。

速度が落ちぬまま、パトカーは『坂道』を下り始めた。

その先には、『ガードレール』があり、さらにその先には『崖』があった。

「ブレーキキツ！　メツチャ踏んで！　ブレーキキツ！！」

「駄目だ！　全然止まんない！」

「何でええええええ!!？」

力いっぱいブレーキを踏んでいるのに、パトカーはいつこうに止まらない。

「ム？　もしかして『コレ』か？」

まるで『落とし物でも拾った』かのようなトーンで、信長様は後部座席から『何か』を

拾い上げた。

その手には、『車体から引きちぎられたレバー』があった。
『レバー』には『コード』がいくつも絡み付いていた。

「『狙撃』の邪魔だったので、『引きちぎった』のだが…」

「「Nooooooooooooooooo!!」」

スピードが落ちぬまま、パトカーはもの凄いで速度で坂道を下り始めた。
坂を下るスピードも合わせり、パトカーはトンでもない速度で下ってゆく。

そして…

S i d e : —

「遅い、遅すぎる!」

『集合時間』をもう30分も過ぎてている! 一体何をしているんだ!?

「ちよつと『門脇先生』。オタクの生徒達どうなっているんですか!」

「何がですか? 『佐藤先生』。」

「何がって、集合時間からもう30分経っているんですよ!」

「『まだ』30分でしょ? 安心してください、私『こうなること』を予想してましたから。生徒達にも伝えてあります。」

確かに文句を言っている生徒はいない。だからといって、許されることじゃない。この学校に赴任してきて早4ヶ月。前々から思っていたが、この学校はおかしい。『一人』の生徒が優遇されすぎだ!

『織田信長』

彼がどうな生徒かよく知らないが、戻ってきたら説教を…

「ウオリヤアア!!」

ガラガラガラガラッ!

ギイイイイイイ!

な、何? え、何!?

『人力車』がもの凄いスピードでこっちに来た。

よく見ると『うちの学校の生徒』が乗っている、というか引つ張っている。

「き、君達何をして……」

「はい、皆揃ったわね。それじゃあ帰るわよ。」

「……へ？」

「なあ、お前らどこ行つた？」

「お土産買いきすぎたな。」

「ねむ、帰り寝てよつと……」

「ちよ、ちよつと……」

「あなた達、その『人力車』返しときなさい。」

「ゼエ、ゼエ、こ、『これ』貰ったんですけど…オエツ」

「ど、ゲホツ どうすればいいですか…オゲツ」

「といつてもねえ、今は無理だから後日『配送』してもらいなさい。」

「ハア、ハア、ゴメン オブって…」

「いや、無理…オロロツ」

「なかなか面白い旅であったな。あ、母の言っていた『ご当地ストラップ』とやらを買っていたなかった。」

「スイマセエンツ！ 無視しないでもらえます!? 『門脇先生』も何普通に対応し

ているんですか!?!」

「何叫んでいるんですか? 『こんなの』『普通』でしょ?」

「何処があああああああああ!?!」

『今晩は、ニュースの時間です。』

今日午後1時頃、市内の銀行に強盗が現れ、現金5000万円が盗まれました。

目撃者に事件の詳細を訪ねると、

『人力車がいきなり突っ込んできた。』、『小学生が強盗をボコボコにしていた。』

との証言がとれました。

また、この銀行強盗、車で逃走したのですが、銀行から3km離れた崖沿いの道で車が炎上しているのが発見されました。

さらに、強盗を逮捕しようと追いかけたパトカーが、崖に墜落するという事故が起きました。

次のニュースです。本日、人力車が盗まれるという事件が二件発生しました。警察は

事件の経緯を調べています。
つづいて……………」

2005年

8月14日

岐阜県―岐阜市

Side

「遠い所から御越しいただき、ありがとうございます。」

「いやいや、このような盛大なパーティーにお招きいただき、感謝の極みです。」

岐阜市にあるとある豪邸。今日、此処ではパーティーが開かれていた。

パーティーには大勢の客人が来ており、ダンスや会話で盛り上がっていた。

パーティー会場の一卓で数人の男性が会話をしていた。その中に大きく肥えた体に、大きな宝石の指輪を指にはめている男性がいる。

彼こそ、『このパーティー』を開いたら主催者であった。

「今日は『御息女』も御出席されているようで。」

「ええ、御呼びしましょう。『帰蝶』、来なさい。」

「はい、お父様。」

主催者の男が手招きすると、一人の少女が前に出た。その少女の『美しさ』に客人達は思わず息を飲む。

「(いいな帰蝶、分かっているな。)」 ヒソヒソ

「(はい。)」 ヒソヒソ

誰にも聞こえない小さな声で、親子は会話をすませた。

「本日はようこそ御越しくございました。只今ご紹介にあずかりました、『齋藤帰蝶』と申します。」

少女は綺麗な動作で御辞儀すると、『ニツコリ』と『微笑んだ』。

S i d e : 齋藤帰蝶

「ハア……」

パーティーの挨拶も一通り終わり、少女『帰蝶』は自室に戻っていた。ソファアに腰をかけると、帰蝶は深い溜め息を吐いた。

実はこのパーティー、

『彼女の結婚相手を決めるお見合いパーティー』であった。

参加した客人には、帰蝶と同じ年ぐらいの子息がいて、帰蝶はその中の誰かと結婚しなくてはならないのだ。

「(結婚…かあ…)」

帰蝶にとって今回のパーティーは不本意なものであった。しかし、父が決めたことに逆らえない彼女は嫌でも了承するしかなかった。

「私の『お願い』、結局聞いてくれなかったなあ……」

帰蝶は父に『一つだけ』頼んでいたことがあった。

それは『結婚相手は自分に決めさせて欲しい』というものだった。

しかし、彼女の父はそれを無視した。現に彼女が自分の部屋に戻つて来ているのが証拠だ。今頃彼女の父は結婚相手を勝手に決めているのだろう。

彼女の父が、それほどまでに帰蝶を結婚させたいのには理由があつた。

彼女の父は一代で会社を立ち上げ、財産を築いた実業家である。

そんな彼女の父の望みは『金持ち』になることであつた。

会社は決して無名ではないが、一流というわけでもない。彼女の父ではこれ以上会社を大きくする事は不可能であつた。

しかし、既に充分な財産を貯えているのに、彼女の父は『もっと金持ちになりたい』と願ひ考えた。

そして、彼女の父は思い至つた。

『娘を一流企業に嫁がせよう』と。

そうすれば、自分の会社は援助を受けさらに大きくなれる、自分は『もっと金持ちになれる』。

そんな身勝手な理由で、帰蝶は結婚させられるのであった。

「私…『幸せ』になれるのかな…」

せめて結婚相手は選びたかった。『自分が愛した人』と結婚したかった。

彼女はソファアーの上に置かれている『一冊の本』を手取る。

幼い頃から読んでいる愛読書であり、彼女の『憧れ』がまつた本。

タイトルは『グリム童話』。

彼女は童話が好きで、特に好きな童話が『白雪姫』である。

不幸なお姫様が、『白馬の王子様』に助けられ幸せになるお話。

彼女はこの『白馬の王子様』に憧れていた。

『いつか自分ののもとにも王子様が現れ、自分を幸せにしてくれる。』

女の子であれば、誰もが一度はする夢を彼女はいまでもしていた。むしろ年々その思いは強くなっていた。

「(本当に、『白馬の王子様』がいるのなら……)

て……何て、ね。」

私を『此処』から連れ出し

いるはずがない。そんなこと分かっている。
でも……もし、いるのなら……

「随分と陰気な顔をしているな、余程『楽しくない』事でもあったのか？」

「!？」

突然後ろから声がした。男性の声だ。

帰蝶は動揺隠しながら後ろを振り向く。

そこにいたのは、『とても綺麗な男の子』であった。

年は自分と同じくらいだろう。着なれていないのか、スーツは随分と着崩れている。

しかし、それが実に『様になっている』。
パーティーに出席していた客人とは違った『優雅さ』があつた。

その美しさに、私は見とれてしまった。

『白馬の王子様』に憧れていた。

いつか私を『此処』から連れ出してくれる『王子様』が来てくれると望んでいた。

けど、現実は違った。

私の前に現れたのは……

10

2005年

7月20日

愛知県―名古屋市―織田家

全ては信長のこの一言で始まった。

「そろそろ女が欲しい。」

それは、子供が『お菓子が欲しい』と言うのと同じぐらいの『軽さ』だったと、後に信長の父『信秀』は語った。

「……ゴメン、信長。突然過ぎてお父さん頭が困惑しているんだけど……」

「この程度の言葉も分からののか？ 相変わらず程度の低い脳をしているな。」

「いや、ちょっと辛辣すぎない!? ていうか何!? 彼女でも欲しくなったの!？」

「という事なんだよ！ 由紀さんも何か言つてやつて！」

「まゝ、お嫁さんが欲しいだなんて、信長君たら『マせている』わね〜♪」

「そこおおおお!? 違うでしょおおおお！」

「けど何で急にお嫁さんが欲しいなんて言い出したの？」

「余（オレ）も今年で14。伴侶を持つてもよい頃だと思つてな。」

「あらあら、信長君勘違いしてるのね〜♪ 結婚できるのは14歳からじゃなくて、18歳からだよ〜♪」

「そういう問題じゃないと思うよ!?」

「でもお嫁さんが欲しいのは良いけど、お目当ての女の子でもいるの？」

「いや、残念ながらおらんだ。」

「ちよつとおおお！ お父さん無視イイ!?」

「ゆえに余（オレ）は『嫁探し』の旅に出ようと思う。」

「まあ！ 旅行に行くの！ だったらお土産に『ご当地ストラップ』買ってきて欲

しいなあ〜♪」

「待つて由紀さんんんんんん！ 『ご当地ストラップ』より大事な事があるよねえ!?!」

「え〜？ あ、そうだったわ！ ご近所の皆さんのお土産も買ってきてもらわない

とね♪」

「ソコジヤナアアアアアアアアイツ!!」

「でも、信長君。『旅行費』はどうするの?」

「心配いらん、『知り合い』に金を湯水のごとく提供してくれる奴がいるのでな。」

「そう、それなら安心ね♪」

「安心出来ねエエエエエエエエ!! お金を湯水のごとく提供してくれるって、どんな人お!!」

「それで、何時から行くの？」

『明日』からだ。幸い今は夏休み、全国を回る絶好の機会だ。」

「まあ！　全国に行くの!?!　やったわ♪　これで『ご当地ストラップ』が全種類揃うわ♪」

「ちよつと待ってええええええ！　ツツコミどころが多すぎて、お父さん対処しきれないんだけどおおおおお!?!」

「だったら、のんびりしてられないわ！　旅行の準備をしなくちゃ！　お母さんも手伝ってあげるから、信長君も準備しなさい！」

「……ま、自分の事だから。仕方あるまい。」

そう言うと、二人は準備をするため居間から出ていった。

「……もしかして、僕ってイジメられている？……」

そして、現在に至る。

2005年 8月14日

プオオオオオン：

信長は新幹線に乗って移動していた。

「フウ、どこにも『良い女』はおらんのだな。」

信長は溜め息を吐きながら、窓から見える景色を眺めていた。

北海道から沖縄まで、信長はあらゆる地方を回り、『嫁』となりうる女性を探した。

信長は『かつて』、一国を治める主であった。そのため、『人を見る目』がとても養われていた。一目見れば、その人物がどんな人間か分かるほど優れているのだ。

しかし、何処へ行っても信長の目にかかる者はいなかった。

「やはり、いないものだな。『アイツ』のような女は。」

信長がポツリと言った時、車内にアナウンスが流れた。

『間もなく岐阜に到着します。お降りのお客様はお忘れ物が無いよう、お気をつけ下さいませ。』

「ム、もう着いたか。新幹線というのは実に速いものだな。」

荷物をまとめ、降りる準備をする信長。実は信長、岐阜県だけまだ行ってなかったのである。

「頼みの綱が『此処』とはな、運命じみたものを感じる。」

信長にとって岐阜県、特に岐阜市は思い入れのある地であった。

此処　　岐阜市はかつて『美濃国』と呼ばれていた。

そして、『美濃国』にはかつて『絶世の美女』とよばれた女性がいた。

その美女の名は……

「うゝむ、やはり、見つからぬな。

ム？」

信長が『嫁候補』を探して歩いていると、立派な造りの門がある豪邸を見つけた。そこには人が大勢集まっっていて、何やら催し物をしている様だった。

「オイ、此処で何をしているのだ？」

「はい？」

信長は受付らしき人物に話しかけた。

「此処では、当家的ご主人『齋藤様』が開かれたパーティーが行われております。」

「ほう……」

信長はこれまで様々な女性を見てきたが、『金持ちの女性』をまだ見たことがなかった。もしかしたら、此処に余（オレ）の求める女がいるかもしれない。信長はそう思っ

た。

「調度良い、中へ案内しろ。用ができたのでな。」

「すみません、招待状をお持ちでない方は入れません。」

「……何？」

「申し訳ありませんが、お引き取りを……」

グギヤツ

「ウゲエ！」

ドサツ

「面倒な、それでは『強行突破』するしかないではないか。手間をかけさせるな。」

信長は門をくぐり、中へ入っていった。

「成程、確かに金持ちなだけはある。『見て呉れ』だけは合格だな。」

パーティー会場には多くの人に来ており、中には信長と同じ年頃の女性もいた。

だが、信長の目にとまる女性はいなかった。信長は人を見るとき、顔だけじゃなく仕草や言葉遣い等を見聞きする。無意識に出る仕草や言葉遣いが、人間の本性を露にするからだ。

※因みに信長は今、私服ではなくスーツを着ている。(着替え室で拝借した物)

「どれも『中身』が汚いな。まあ、『金持ち』というのはそういうものかもしれないがな。」
此処でもなかったか、やはり『アイツ』のような女はもうおらんか……
信長が内心でそう思った時だった。

「……御呼びしましょう。『帰蝶』来なさい。」

「はい、お父様。」

「ム？ 『帰蝶』？」

聞き覚えのある名に、信長は話しの方向に顔を向けた。

「!？」

そこには一人の少女がいた。その少女の顔は、信長がよく知る顔であった。

「帰蝶…なのか…」

かつて自分が愛した女、生前唯一『手に入れられなかったもの』、

その顔は瓜二つであった。

「本日はようこそ御越しくございました。只今ご紹介にあずかりました、『斎藤帰蝶』と申します。」

少女の仕草、言葉遣いを信長は見逃さなかった。たった少しの動作が信長には充分な情報であった。

「(外見だけではない、『中身』も『アイツ』に似ている……)」

『輪廻転生』

自分は輪廻の輪をくぐったにも関わらず『記憶』は消えなかった。

ならば、『記憶だけ』が消え、その他全てが転生する事は決してあり得ない事ではない。
また、『自分と同じ』存在が他にいる可能性もある。

「あの女……『帰蝶の生まれ変わり』か何かか？」

もし織田信長を知る者が、今の信長を見たらさぞ驚くだろう。いつも『余裕の笑み』を絶やさないう信長が、驚愕しているのだから。

しばらくすると、少女はパーティー会場を出ていった。信長は少女を追いかけ、先回りし少女が入るであろう部屋に先に入っていった。

「ハア……」

少女が部屋に入ってくるなり、溜め息を吐いたことに信長は疑問に思った。

「(あの女、何故あんなにも草臥れているのだ?)」

少女がパーティー会場で挨拶をしている時、信長はその様を見て少女が『のり気』ではないことに気づいていた。しかし、何故あんなにまで草臥れているのか分からなかつ

た。

「私の『お願い』、結局聞いてくれなかったなあ……」

「(『お願い』?)」

少女は願いが叶わなかったことに落胆しているのか？

信長は少女の言葉に耳を傾けた。

「私……『幸せ』になれるのかな……」

「(……成程な。)」

理由までは分からないが、少女が今現在『幸せ』ではない事を信長は理解した。

「幸せでないのなら、『楽しくない』のでないのなら、あの様な陰気な顔していてもおかしくはない。」

信長は少女に興味がわきはじめていた。かつて愛した女と瓜二つな少女に、自分が考えた『可能性』を確かめるべく、

「随分と陰気な顔をしているな、余程『楽しくない』事でもあつたのか?」
「!?」

信長は少女に話しかけた。

かつて、余（オレ）は全てを手に入れた。
富を、地位を、力を、

だがたった一つ、

『手に入らなかったもの』があった。

それは素晴らしい富ではなく、絶大な地位でも、強靱な力でもなかった。

『それ』は一人の女だった。

その女は美しく、そして気高かった。

一目で余（オレ）は女が気に入った。

あの美しい存在をこの手で『壊したい』。そう思った。

だが、あの女は決して『壊れなかった』。最後まで美しく気高かった。

アイツだけは、余（オレ）のものにならなかった。

女の名は『帰蝶』。たった一つ、余（オレ）が手に入れられなかったものだ。

1
1

S i d e : 斎藤帰蝶

突然現れた男の子は、今まで会ってきた誰よりも美しかった。

綺麗な黒髪、黒曜石のような目、整った相貌。

.....

「いつまで呆けているつもりだ？」

彼が話しかけてきて、正気に戻る。

そうだ、何を見とれているんだ私は！

そもそも、彼は私の部屋に勝手に入っている不審者だ、問い質すのが自然な反応だ。

「だ、誰ですか貴方は！」

「余（オレ）か？　　余（オレ）の名は『織田信長』。『第六天』より来た『魔王』だ。」

返ってきたのは予想外の答だった。

織田信長？　　第六天魔王？

「……ふざけているのですか？」

「ふざけてなどおらんさ、これは正真正銘　　余（オレ）の本名だ。」

嘘を言っているようには見えなかった。しかし、自分のことを『魔王』と称するなんて、頭がオカシイのだろうか？

「……それで、私に何か用でもあるのですか？」

「別に、只貴様がどんな奴か確かめようと思つてな。」

まるで『物』でも見るかのような目と口調で、彼は私を見ていた。

この目を私はよく知っている。金持ちの人間が私を見る時と同じ目だ。

その目に、何より『一瞬でもこの男に見とれていた自分』に苛立ちを感じた。

「自分のことを『魔王』と称している人に、私の事なんて知って欲しくありません。今すぐ此処から出て行って下さい！」

面と向かつて私は彼に言った。

「……フフ、フフフ、フフハハハハハハハ！」

突然彼が笑いだした。

「な、何かおかしいのですか!？」

「フフフ、ここまで『似ている』と笑えてきてな。」

『似ている』? 何の事?

「確か名は『斎藤帰蝶』だったか?」

「……ええ、そうです。」

どこで知ったのだろう。少なくともパーティー会場では会わなかった筈なのに。

「そうか…帰蝶か…」

彼が私に近付いて来た。私は警戒心を高める。

「気に入ったぞ、帰蝶。『お前』余（オレ）の嫁にならんか？」

「……………え？」

S i d e : 織田信長

「自分のことを『魔王』と称している人に、私の事なんて知って欲しくありません。今すぐ此処から出て行って下さい。」

始めて『アイツ』に会ったとき、『アイツ』も同じようなことを言っていた。

『絶世の美女』が『美濃国』にしていると聞き、城にのりこんで見に行つたときだ。

「貴方が『第六天魔王』を名乗る武将ですね。私は自らを『魔王』と称している方と話すことはありません。今すぐこの場から立ち去って下さい。」

第六天魔王（オレ）に面と向かって、『アイツ』は言ってきた。

「……フフ、フフフ、フフハハハハハハハ！」

「な、何がおかしいのですか!？」

「フフフ、ここまで『似ている』と笑えてきてな。」

間違いない。

「確か名は『斎藤帰蝶』だったか？」

「……ええ、そうです。」

コイツは『アイツ』の生まれ変わりだ。

「そうか…帰蝶か…」

再びこの『美濃の地』で出会うとは、もはや『運命』としか考えられん。
ついに見つけた。余（オレ）の女を。

「気に入ったぞ、帰蝶。『お前』余（オレ）の嫁にならんか？」
「…………え？」

S i d e : 斎藤帰蝶

何を言われたのか理解するまで、数秒かかった。

「なな、何を言っているんですか!？」 私をからかっているんですか!？」

「からかっておらん。帰蝶、余（オレ）はお前が気に入った。余（オレ）の女にならんか?。」

今私求婚されているの? 突然すぎて頭が混乱している。

「充分からかっています! 初めて会ったばかりの人に求婚するなんて!。」

「そうか? 初めてだろうと、何十年付き合った仲だろうと、気に入った相手を伴侶に欲しいと思うのは至極当然であろう?。」

顔が赤くなっていく。鼓動がだんだん早くなっていく。

今まで多くの人と会ってきたから分かる。彼の目は嘘偽りのない本気の目だ。

私、どうすればいいの……

ドンドンドンッ！

突然、部屋の扉が乱暴に叩かれる。

『お嬢様！ 邸内に賊が侵入しました！ 受付の者が襲われ、現在屋敷中を散策しております！』

屋敷の警備員の声だ。私は目の前の彼を見る。

まさか、この人が？

『お嬢様？ もしや、中に族がいるのですか!?!』

「チツ、面倒な……」

そう言うと彼は部屋の窓に向かった。

「帰蝶、また後日此処に来る。その時まで『返事』を決めておけ。」

バツ

次の瞬間、彼は窓から『飛び降りた』。

「っ！ まって！ 此処、三階！」

急いで窓に駆け寄る。

しかし、彼の姿は『何処にもなかった』。

ドン！ ドン！ バキヤアツ！

「ご無事ですか!? お嬢様！」

警備員が扉を破って来た。

その後。パーティーは中止となり、私は安全のため『離れ』に移された。

これは、夢なのだろうか？ あまりの事すぎて分からなくなつた。

『余（オレ）の嫁にならんか？』

けれど、彼の言葉は不思議と心に残っていた。

彼のことを忘れられなかった。

「織田…信長…」

1
2

2005年

8月17日

岐阜県―岐阜市―斎藤家

S i d e 斎藤帰蝶

「……ハア、」

私は自室のソファア―の上で溜め息を吐く。

今朝、朝食をとっている際　突然お父様が告げてきた。

「帰蝶、お前の『婚約者』が決まった。相手はデカイ会社の御曹司だ。これでお前の、そして私の未来は安泰だ。明日その御曹司が屋敷に来る、くれぐれも機嫌を損なわせるなよ？　それと、お前は明日から向こうの家に住むことになる。心配いらん、相手は礼儀正しい少年だ。お前も気に入るだろう。」

私の結婚相手は、私の知らぬ間に勝手に決められていた。既に両家で話が付いているらしく、私の意見など聞いてもらえなかった。

「……ハア、」

もう何度溜め息をついたのだろう、数えてないけどきつと十回以上はついている。

「……ハア、」

あれから三日が経った。彼はまだ来ていない。来たとしても、何て言えばいいのだろう。

ドン　　ドン　　ドン

窓の外から太鼓の音が聞こえる。窓に顔を向けると、空はもう赤くなっていた。

「あ……今日『お祭り』だったっけ……」

毎年夏、この時期に『夏祭り』が開かれる。行ったことはないが、祭りの最後に打ち上げられる花火を部屋の窓から毎年見ている。とても綺麗な花火で、私は毎年楽しみにしている。

……楽しみにしていたことなのに、何故忘れていたのだろう。それほどまでに、私の心は沈んでいた。

「……花火、もう見れないんだなあ。」

明日から私は、結婚相手の家に住む。そう思うと、何だか寂しくなってきた。

「相変わらず陰気な顔しているな。」

「!？」

突然後ろで声がした。私はすぐに振り返る。

そこには『彼』が、『織田信長』がいた。

「……どうやって入ってきたんですか？」

「窓からだ。細かいことは気にするな。」

さも当然のように彼は言うが、私の部屋は3階だ。どうやって登ってきたんだろう。

「……本当に来たんですね。」

「言っただろう、『後日来る』と。余（オレ）は嘘は言わん。」

内心冷やかしだったんじゃないかと疑っていた。

彼が来てくれたことに、沈んでいた私の心が浮上する。

しかし、彼が来たということは『返事を聞きに来た』ということだ。

私は言葉が詰まる。結婚相手が決まってしまった今、彼の『誘い』にのることは出来ない。

分かっているのに言葉が出ない。

暫く沈黙が続いた。それを破ったのは彼だった。

「……お前、『楽しいこと』が無いのか？」

「え？」

「いつ見てもお前の顔は『しけている』。お前、『楽しい』と感じた事が一度もないのか？」

突然の質問に私は面喰らう。

『楽しいこと』が無い？

……確かにそうかも知れない。今までの人生、『楽しい』と思えたことなんて片手で数えるぐらいしかないからだ。

「……そうですね、私の人生は『楽しく』はありません。……でも、『充実』はしていると思います。」

「……………」

実際、私の人生は他人から見れば『充実』しているのだろう。家はお金持ち、結婚相手も決まっっていて、家族関係も『良好』。

『充実』はしている。『只　楽しくない』だけ……………

「調度良い。」

グイッ

「え、ちよつと?」

いきなり彼が私の手をつかんできた。そして、

「行くぞ。」

バツ

私を抱えて、窓から『飛び降りた』。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

ズツダンツ!

地面に着くまでが、ものすごく長く感じた。

「ななななな何を考えているんですか!？」

「ム? 『コツチ』の方が手っ取り早いだろう。」

さらっと彼は流したが、私の部屋は『3階』だ。そこから飛び降りる衝撃は、60kgの人が時速50kmの車で壁にぶつかるのと同じくらいの衝撃があるというのに、彼は平然としていた。

「よし、行くぞ。」

私が呆気にとられていると、彼はまた私の手を取り歩き出した。

「ま、待ってください! 行くって、何処に?」

「ム? 決まっているだろう。」

「祭りだ。」

ニヤア

『楽しそう』に彼は『笑っていた』。

13

息を潜めてジツと待つ。

獲物にスキができた瞬間、気づかれないよう静かにそして素早く『すくい上げる』。

ポチャンツ

ピチピチツ

「！ やった、『獲れた』！」

「おお、嬢ちゃん！ やつと獲れたかい、頑張ったかいがあつたなあ。ほれ、『袋』に入れてやるぜ。」

手渡された袋の中には、元気に泳ぐ『金魚』が一匹いた。その金魚を『斎藤帰蝶』は嬉しそうに見ていた。

「やっと獲れたのか？」 『これ』のコツは斜めに一気に突っ込むことだ。」

ヒヨイツ ポチャ

ヒヨイツ ポチャ

ヒヨイツ ポチャ

ヒヨイツ ポチャ

ヒヨイツ ポチャ

ヒヨイツ ポチャ……

「……ワリい兄ちゃん、そろそろ『やめてくんねえ』か？」

「何を言う？ 『破けるまで何匹獲っても良い』と言ったのはそっちだろう？」

「いや、獲りすぎだろおおおお!!」 兄ちゃんのおわん、スゲエことになってっからあ

！」

「すげえ、あのおにいちやんもう30ぴきめだ！」

「もう水槽にいるのデカイ出目金だけだぞ!？」

「あ、出目金も獲った！」

「これ全部獲るんじゃねえか？」

ギャラリーが話している内にもどんどん金魚は減っていく。そして、

「コイツで最後だ。」

ポチャンツ

最後の一匹、合計48匹もの金魚がギツシリとのったおわんを『織田信長』は持っていた。

「お上手なんですネ、金魚すくい。」

「まあな。オイ、ガキ共。この金魚はいらんからやる、好きなだけ持っていけ。」

「ほうとう!？」

「やった！」

その言葉に子供達は喜び、貰った金魚の取り合いが始まった。

「さて、次の露天に行くか　　帰蝶。」

「はい、『信長さん』。」

帰蝶は自分の獲った金魚を近くの子供にあげ、信長と一緒に次の店へと向かった。

「俺の店がああああああああああああああああああああああ!!」

既に雑踏に入ってしまった信長と帰蝶は、その悲鳴を聞くことはなかった。

〜射的〜

パンツ！

パンツ！

「すごい！ またあたった！」

「あのおにいちゃん、『てっぼう』もじょうずなんだあ！」

「フム 帰蝶、何か欲しいものでもあるか？」

「そうですね……あの腕輪とか落とせますか？」

「愚問だな。」

パンツ！

ポトツ

「ほら、獲ったぞ。」

「わあ！　ありがとうございます！」

信長に獲ってもらった腕輪を手にはめて喜ぶ帰蝶。その後も、信長は次々と景品を獲っていく。

その様を見て、店長の男は焦っていた。

「(何モンだ、あの坊主！　普通射的の銃で腕輪は獲れないだろ!?)」

「次はあれにするか。」

信長は屋台に並ぶ景品の中でも、特に目立つ『ゲーム機』に銃口を向けた。

「(！　だ、大丈夫だ。あれには『重し』が仕込んである。撃ち落とせるはずがない!)」

「あんな大きな物でも落とせるんですか?」

「当たり前だ。余(オレ)は『銃(コイツ)』で外したことなど一度もない。」

パンツ！

発射されたコルクの弾が、対象に当たる。信長は弾をただ当てるのではなく、弾を回転させながら中心からやや左側を狙って撃った。

ポトツ

「うわあ、すごい！」

「ゲームがおちた！」

「凄いですね！ 本当に外したことが無いんですね。」

「ああ。さて弾も切れたことだし……ガキ共、これ全部やるぞ。好きなものを持っていけ。」

「やったあ〜！」

「おい、ゲームぼくのだぞ！」

「おれのほうがはやかっただ！」

その言葉を待っていたと言わんばかりに、子供達は一斉に信長が獲った景品を取り合った。

「あらあら。」

「最近のガキは欲張りだな。次の露天に行くか。」

獲った景品をまた子供達にあげ、信長と帰蝶は次の露天へ向かった。二人は後ろで絶望している店長の男には気づかなかった。

く型ぬきく

パキツ　　パキツ

「よし、出来た！」

「おお、出来たかい。ふうん、『ひよこ』か。なら200円だ。」

「え？　　お金が貰えるんですか？」

「そうだよ、何だと思つてたの姉ちゃん？」

こんな遊びで金が得られることに帰蝶は驚いた。貰つた金をどうしようかと悩んでいたら、子供が型ぬきをやりたそうにしていたので、帰蝶は子供に型を買つてあげた。

「それにしても……」

帰蝶は横にいる信長を見る。

パキツ

パキツ

パキツ

パキッ

パキッ

パキッ

パキッ

パキッ

「何でも出来るんですね、貴方は。」

「そうか？ あ、今話しかけるな。」

パキッ

パキッ

「うおおお！ 兄貴、ありやあ！」

「間違いねえ！ 伝説の型、『八岐大蛇（ヤマタノオロチ）』だ！ それをあんなス

ピードで、何者なんだアイツは!？」

八つの首と尾が細かく描いてある型を、信長は器用にくりぬいていく。

「よし、出来た。」

信長は手に持っていたピンを置く。信長の手には見事な『八岐大蛇（ヤマタノオロチ）』が出来ていた。

「ええええええ!!? 兄ちゃん、それくりぬいたのかい!?!」

「ああ。ほれ、確かこの型は『2万』だったな。早く出せ。」

信じられないといった表情で店長の爺ちゃんは、信長に金を渡した。

「思わぬ収穫だったな。帰蝶、これで何か食べるとするか。」

「なら私、焼きそばが食べたいです。」

二人は露天を出て、食べ物屋台の方へ歩いていった。

その姿は、どこから見ても若い男女のカップルにしか見えなかった。

S i d e : 斎藤帰蝶

楽しい。心の底からそう言える。

多分、いや確実に、今まで一番楽しい時間を過ごしている。

家からほんの5分程離れただけで、こんなに景色は変わるなんて。

彼への警戒心はもう無かった。

彼と一緒にいると、とても楽しい。彼と一緒にいると、私は『幸せ』でいられる。

私は、どんどん彼に惹かれていった。

ドンツ！

ドドンツ！

祭りも終盤に近づいてきた。夏の夜空を色鮮やかな花火が彩った。

「綺麗……」

帰蝶は、花火の美しさに見とれていた。毎年見ていたものと同じなのに、今日の花火は見たことがないぐらい美しかった。同じ花火でも、近くで見るだけでこんなにも違うものなのか。

「ああ、確かに……美しい。」

帰蝶の隣にいる信長も、花火を見ながら呟いた。

「綺麗ですよね、特に大きいものは。」

「そうだな、デカければデカい程……」

『散り様』が美しい。」

信長の言葉に、帰蝶は首をかしげる。

『散り様』？」

「ああ、そうだ。」

あの花火は、たった一回夜空を彩るために散っていく。それもほんの一瞬の間しか開花せんというのに。

ただその一瞬のためだけに己が身を燃やし尽くし、後は溶けるよう

に消え失せてゆく……………

その在り方が、『美しい』。」

芸術品を鑑賞するかのようには、信長は花火を見ていた。

「……………花火の『散り様』が好きだなんて、『変な方』ですな貴方は。」

「……………フ、フフハハハハハハハハ！　　そうだな！　　お前の言うとおり、余（オレ）は

『変』なのだろうな

フハハハハハハハハハハハ！！」

帰蝶の言葉に信長は『笑う』。『楽しそうに』、『おかしそうに』。

それを見た帰蝶も、つられて笑った。

「フフフフ……………『笑える』ではないか。」

「え？」

「気づいてなかったのか？　露天にいる時も、飯を食べている時も、今花火を見ている時も……お前は『笑っていた』。」

「どうだ、『楽しい』だろう？　外は。」

帰蝶は信長に言われて、自分の顔を触る。いつもカチカチに固くなっていた表情筋が柔らかくなっていた。

「……はい、とても『楽しい』です。」

笑いながら、帰蝶は信長に返事をした。

14

S i d e : 斎藤帰蝶

「今日はどうしても楽しかったです。ありがとうございます。」

「ム? 何がだ?」

お祭りが終わって、私は帰路につきながら彼と会話をしていた。

「お祭りに連れていってくれた事です。今日は…今までで一番楽しい時間を過ごせましたから。」

「『一番』? 何を言っているのだ、お前は。」

「?」

「余（オレ）にとって『あれ』は只の余興に過ぎん。余（オレ）は『あれ』よりもつと面白いものを知っている。余（オレ）といれば、それを味わうことが出来るぞ？」

「え……」

一瞬、彼が何を言ったのか分からなかった。彼は私の方に体を向け、私の目を見て話した。

「……『返事』をまだ聞いておらんだな…帰蝶よ、心は決まったか？」

「…あ、あの…その……」

言葉が出ない。私には既に既婚者がいる、彼とは一緒にいられない。

分かっているのに話せない。彼にその事を話したくない。言ってしまったら、彼が何処かに去ってしまいそうで。

離れたくない、そんな気持ち私が私の心を揺らがせる。

「帰蝶!!」

突然、私を呼ぶ声が聞こえた。それはよく知っている声、私は声の方へ顔を向ける。
そこには、

「! お父、様…」

道の先にはお父様がいた。お父様の他にも黒服を来た人達が大勢いた。外灯で照らされたお父様の顔は怒りで顔が赤くなっていた。

「いったい何処をほつつき歩いてた!? 婚約相手が来ているというのに勝手に出歩きおつて、よくも私に恥をかかせてくれたな!!」

「あ……」

お父様の側には、私と近い年くらいの男性がいた。あれが私の婚約者なのだろうか、来るのは明日と聞いていた、今日来るなんて思いもしなかった。私が勝手にお祭りに行き、婚約相手を待たせた事にお父様は怒っていた。お父様の怒声が私の体を震えさせる。

「『婚約相手』?」

「!」

隣にいる信長さんが眉をひそめている。

婚約相手がいるとこを知られた。自分から言おうと思っていたのに、よりにもよつてこんな形で。

嫌われた、きっと彼は私を軽蔑している。

「……帰蝶、あれがお前の父親か？」

「……はい……」

蚊の鳴くような声で私は返事する。彼の顔が見れない。私は涙が出そうになる。

「……全く似とらんな、よもや『豚』から人間が生まれるとはな。」

彼が言った言葉は予想外のものだった。

「ん？ 帰蝶！」

隣の男は誰だ!?

まさか、そいつと一緒に出掛けていたのでは

ないだろうな!？」

「貴様が帰蝶の父親か。先程から煩く叫びおつて、豚なのは外見だけではないらしいな。」

あろう事が彼はお父様を馬鹿にし始めた。さすがにこれは予想してなかった。私は目が点になる。

「な、何だお前は!? 何処のどいつだ、名を名乗れ!」

「余（オレ）の名は『織田信長』。貴様の娘は余（オレ）が貰うぞ、豚が育てるより遙かに良からう。」

さらに私は驚かされる。彼はまだ私を好いてくれている……こんな私をまだ……震えていた体が楽になった気がした。

「ふ、ふざけた事をぬかしおつて! この若造があああ!!」

「まあまあ、落ち着いてください。あまり怒ると体に良くありませんよ。」

怒るお父様を婚約相手と思われる人が落ち着かせる。

「安心して下さい。貴方の御息女は、あの男にたぶらかされただけです。彼女に罪はありません。」

婚約相手は私達の方に近づいてきた。よく見えなかった顔も見える距離まで近づいてきた。

「君かい？　僕の婚約者（フィアンセ）を連れ去つたのは？　確かに彼女は美しく、

連れ去りたくもなるだろう。だが、『立場』をわきまえたまえ。彼女に触れていいのは『高貴』な生まれの者だけだ、君のような『庶民』が触れていいものじゃないのだよ。」

まるでお金持ち以外は人と思わないような口調だった。私は婚約相手と会うのはこれが初めてだけど、彼が私の嫌いな人間という事が今のでよく分かった。お金を持つているかどうかで人を判別する…最も最低な行為だ。

「そう、この僕！ 『一城雅人』の様な存在じゃないとね！」

彼の動きが突然止まった。その視線は私ではなく、隣にいる信長さんに向けられていた。

アレ、アノカオドコカデ…マテヨ、アレハ…アイツハ…………

「おおおおおオオオオオおおおオオオオオ織田ノおブ長ああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

いきなり彼は叫びだした。顔から滝のような汗を出しながら。

「誰だ貴様は？」

「ヘナぶしっ！」

彼はTVで見るお笑い芸人のようにズッコケた。

「きききききき貴様あああああ！　この僕を覚えていないのかあああ!？」
「知るか。貴様など見たことも無い。」

信長さんはしれつと答えた。あの様子を見ると、向こうは信長さんの事を知っている
ようだけど。

「んがあ！　　ば、馬鹿にしやがってえ……フフフ、だが強気でいられるのもこれまでだ
！」

彼が指をならずと、控えていた黒服の人達が前に現れた。全員手に武器を持っていた。

「ハハハ！　　どうだ、この戦力差は！　　今こそあの時の屈辱をはらす時だ！」

相手の中には銃を持っている人までいた。

「に、逃げて下さい！　あんな武器を持った人達に、勝てる筈ありません！」
「……」

私は信長さんに逃げるよう説得する。彼には傷ついて欲しくなかったから…

「フウ、面倒な。『場所を変える』ぞ、帰蝶。」

ガシッ

彼は『笑い』ながら答えた。

「帰蝶、お前は余（オレ）の事を何も知らんだろう…お前は知らねばならん、『織田信長（オレ）』が何者なのかをな。」

彼の言葉に私はハツとした。

私は彼の事をよく知らない。彼の名前と、彼が少し私の強い人だというくらいしか知らない。

走る彼を見て、私は彼の事を考えていた。

暫く走ると、廃工場を見つけ彼はそこに入っていた。婚約相手達もついてきて、唯一の出入口を封鎖された。

「ハア、ハア、もう逃げられんぞ織田信長あ！」

武器を持った人達が前に出てくる。よく見ると、婚約相手の近くにお父様もいた。

「やっと、やっと貴様を地に伏せさせる事が出来る！　この時を七年待った！」

先程までとは違い婚約相手は嬉しそうに笑っている。

「ククク、心優しい僕は君にチャンスをやろう。彼女を此方に渡し、土下座して許しを請えば助けてやるぞ？」

「…信長さん……」

私は彼を見る。彼は私を下ろして、近くの物陰に隠してくれた。

「……帰蝶。初めてお前と会った時、あの時教えた余（オレ）の渾名を覚えているか？」

唐突に彼が私に聞いてきた。

それはよく覚えていた。彼が自己紹介の時に言った渾名：何故自分をそんなふうにするのか分からなかった。

「帰蝶、見ておくがいい……『織田信長（オレ）』が何者なのかを……」

「オイ君、何をゴチャゴチャ言ってる……」

「見せてやろう。『魔王』の『魔王』たる由縁の力を、『第六天魔王』の力を！」

彼の声が廃工場に響き渡る。

「顕現せよ！」

突如、彼から『火』が吹き出す。いや、『火』じゃない。『火』と見間違えたのは、『ソレ』が赤い色をしていたからだ。『赤い何か』は彼の体からどんどん吹き出す。その色は次第に濃くなり、『火』の様に赤かった『ソレ』は『血』の様に赤くなっていた。

……、
■
■
……

獣のうなり声のような低く、くぐもった声が聞こえた。

瞬間、彼の体から出ていた『赤い何か』が形を作っていく。最初は何か分からなかつ

た、形が出来ていくにつれ、うなり声はますます大きくなった。そして、



『ソレ』はこの世のものとは思えない叫び声をあげた。

『ソレ』は『骸骨』だった。どこか透き通った半透明の『赤い骸骨』。

「これが余（オレ）の力、『魔王』の由縁の力……『須佐能乎（スサノオ）』だ。」

S i d e : 一城雅人

「撃てえ！　撃ち殺せええ！」

「何なんだよお、何なんだよアレはあ！」

「化物！　化物おおおお！」

部下の慌てふためく声が聞こえる。当然だろう、『あんなもの』を目の前にしては。僕は不思議と落ち着いていた：いや、動けなかった：体が石のように硬くなって、動けなかった。

バンッ！　バンッ！　バンッ！

部下達が持っている銃を『アレ』に目掛けて乱射する。だが、

キンキンキンッ!

弾は全てはじかれていた。向こうは何もしていない。只立っているだけなのに。

そして、『アレ』が手を此方に振りかぶってきた。



ブンッ!

ズツガアアアアアアアンツ!

「ギャアアアアアアアアア!!」

「足が、足があああああ!!」

「助けて! 助けて、誰かああああああ!!」

「どうした？　後は貴様だけだぞ？」

声の方へ顔を向ける。

そこには『魔王』がいた。『赤い骸骨』を身に包む『魔王』が……
僕は話せなかった。声が出ないんだ、足が動かない、頭が「此処から逃げろ」と通告してくる。

分かっている。逃げなくては、『アレ』から離れなくては。

それでも、僕は動けなかった。

ふと目の前に『赤い手』が見えた。

それを最後に僕の意識は途切れた。

S i d e : 齋藤帰蝶

きつと私は彼に『恋』をしていたのだろう。

初めて自分を好いてくれた人、外へ連れ出してくれた人、私を笑顔にしてくれた人、私は彼を『白馬の王子様』だと思っていた。

だから私は目の前にいるのが誰か分からなかった。

滝のように鮮血を浴び、玩具で遊ぶ子供のように純粹で、歪んだ笑みをしている彼が誰なのか。

私の目に映る彼は、『白馬の王子様』などではなかった。

気づけば銃声も叫び声も聞こえなくなっていた。風の音が恐ろしいほど鮮明に聞こ

えた。

「これが余（オレ）だ…帰蝶。」

彼はこの惨状を気にもせず、私に話しかけてきた。

「これが余（オレ）だ。破壊を、恐怖を、地獄を生み出すのが余（オレ）だ。幾千もの亡骸が積み重なった血の海に立つのが『第六天魔王（オレ）』だ。」

普通ならここで泣き叫ぶのだろうか…それとも気絶するのだろうか…
私は何故か、彼に恐怖を感じなかった。

「改めて問おう、斎藤帰蝶よ……………」

『白馬の王子様』に憧れていた。

でも、『王子様』は私の前には現れなかった。

私の前に現れたのは、

『真つ赤な骸骨』を携えた『魔王』だった。

そして………

「余（オレ）のもとへ来るか？」

私は『魔王』を『愛』してしまった。

2008年

3月16日

愛知県―名古屋市―私立高校

冬の寒さも終わりを迎えた早春の季節。名古屋市にある私立高校の屋上で、織田信長はカッブ酒を飲みながら夕陽を見ていた。

「……暇だ、やはり『コイツら』では歯ごたえがない。」

そう愚痴る信長の後ろには、他校の制服を着た生徒が数人倒れていた。

「此処にいたんですか、信長さん。」

屋上の入口から自分を呼ぶ声が聞こえ、信長は振り返った。そこには、『織田帰蝶』が少し怒った顔をして立っていた。

「探しましたよ。放課後、教室に来てくださって言ったじゃないですか。」
「そうだったか？　忘れていた。」

ハアッと溜め息を吐きながら、帰蝶は信長に近づいていく。途中、数人の生徒達が見ているのを帰蝶は見た。

「……『また』喧嘩したのですか？」

「今回は余（オレ）からしかけとらんぞ、コイツらが勝手に来ただけだ。」
「でも、喧嘩したのでしょうか？」

帰蝶は信長を目をつり上げて見る。彼女は信長の『嗜好』を知っているが、意味のない暴力をあまりしてほしくなかった。

「……それで、何故余（オレ）を探していたのだ？」

「また聞いてなかったのですか？　これから教室に行くんですよ。」

「何故だ？」

「『皆』に頼まれたんです。貴方を連れてくるよう……」

「……まあいい、暇を持て余していたところだ。」

「それは良かったです。でもその前に……」

バシッ

「お酒を飲んでいいのは二十歳からです。これは没収しますよ。」

「……『カタイ』な、お前は。」

文句を言いながらも、信長は帰蝶と共に屋上を後にした。

『齋藤帰蝶』が織田家に来て、『織田帰蝶』になってから三年が過ぎた。

信長と帰蝶は近所の私立高校に入学していた。そこは地元でも有名な『不良校』で、悪い噂が絶えなかった。

しかし、信長は「そっちの方が面白い」と言い、帰蝶と共に入学した。

入学当初、不良達は信長の高慢な態度が気に入らず、集団で信長に襲いかかった。

結果は信長の圧勝。その後も不良達は信長を襲ったが結果は同じ。いつしか信長は校内全ての不良を倒し、校内トップにたった。

その後も「暇潰し」と他校の不良を制圧して、今では不良達の間で『織田信長』の名を知らない者はいなかった。

「ほら、急いでください。皆さん待っているんですよ?」

「『あの馬鹿共』…… いったい何だというのだ?」

帰蝶が向かった先は、信長と帰蝶の教室だった。中には誰かいるらしく、灯りがついて
いる。

「さあ、開けてください。」

扉を開けるよう催促する帰蝶。信長は教室の扉を開けた。すると……

「「信長さん!! 今までお世話になりましたあ!!」」

「……ハ？」

そこには、信長のクラスメイトであり『舎弟』でもある不良達がいた。見ると全員涙を流していて、教室は折り紙や垂れ幕で彩られていた。

「信長さん！ 『転校』するって本当ですかあ!!？」

「自分ッ！ 寂しいっす!! クウッ！」

「信長さん！ 俺達、アナタに教わった事、忘れませんッ!!」

男達の涙と鼻水でグシャグシャになった顔を見て、信長はドン引きしていた。

「……帰蝶、何だこれは？」

「分かりませんか？」

『お別れ会』ですよ、私達の。」

信長と帰蝶の『転校』が決まったのは一ヶ月前だ。

信長の噂を聞いた『とある学園』の学長が、是非とも信長に来てほしいと頼んできたのだ。そこは全国でも珍しい『武術』を取り入れた学校で、信長も興味をもった。そして、信長が行くならと帰蝶も転校することになったのだった。

「『姉さん』まで行つちまうんですね!?!　クウツ、ウチの学校の『華』がなくなつちまうぜー!」

「しかたねえよ、『姉さん』は信長さんの『嫁さん』なんだ。一緒に行くのは当然だ!」
「でも、でもよおおおおおお!!」

「信長さん！ 今日楽しんでつてください！ 俺達、精一杯ガンバります!!」

「一番、後藤！ 『翼をください』を歌います!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「……『相変わらず』何なのだ、コイツらは?」

「皆さん寂しいんですよ、私達がいなくなるのが。」

「……」だけの話、信長は彼等が苦手だった。

『魔王』と恐れられてきた信長は、怯えられたり怖がられたりするの慣れているが、彼等のように『慕われる』のは経験したことがなかった。

そのため、信長は彼等のテンションについていけないのだ。

「暇だったのでしょう? なら、『こういうのも』たまには良いのでは?」

「……そうだな、『たまには』な。」

そう言いながら、信長は用意されていたジュースを紙コップに注ぎ、口に運んだ。

「ごうのお、大おお空あにあにいいい！ つうばあつすああを、ひろおおおげつ！
とうおんでえ！ ゆうきいたああいいい、よおおおおおおおお!!」

「嬉しい。」

バキッ

「ブベはあ！ 」

その後も信長と帰蝶の『お別れ会』は夜まで続いた。

2008年 4月9日

プオオオオオオオン……

信長と帰蝶は新幹線に乗り、転校先に向かっていった。

「どんな所何でしようね。『武術』を取り入れた学校って。」
「さあな、『武器』の所持も許可しているところを見ると、かなり『入れ込んで』の
だろうな。」

信長は転校先のパンフレットを見ていた。

全国でも珍しい『武術』を取り入れた学校、当然そこに通うのは『武士』を名乗る者

達ばかりだ。

さらに嬉しいことに、そこには『決闘』というシステムがあった。許可がおりれば合法的に闘うことが出来るシステムに信長は口角をつり上げた。

『武士道』を志す者達が集まる学園に

『破壊』を嗜好とする『魔王』が現れた時

『彼等』の運命は大きく変わる。

そして、『魔王』自身の運命も……………

「何処まで余（オレ）の心を踊らせてくれるかな……『天神館』とやら。」

キヤラクター設定1

織田信長

イメージCV：森川智之（友人案）

身長190cm

血液型 O型

誕生日 1991年 5月12日 おうし座

一人称 余（オレ）

渾名 『第六天魔王』、信長さん、信長君

武器 『須佐能乎（スサノオ）』

職業 天神館 3―7 大将 （原作開始時）

家庭 父、母、嫁

好きなもの 『楽しい』こと

趣味 『愉悦』めぐり

特技 三日間飲み続けても酔わない

大切なもの 家族（本人は自覚していない）

苦手なもの 母のノリ、舎弟のテンション、苦い食べ物

尊敬する人 なし

・戦国時代、『第六天魔王』と恐れられた『織田信長』の魂が記憶をもったまま転生した存在。

・黒のセミロング（髪を全部頭の後ろでまとめている。が、綺麗にまとめないので所々髪が出ていて、前髪が数束垂れている。）、黒曜石のように黒い虹彩をした切れ長のつり目、顔立ちはかなり整っている。

・性格は我が強い。基本『俺様』。

・『享楽主義者』。『楽しい』ことを貪欲に好む。一番の愉悦は『壊す』こと。

・家族関係は良好。しかし、母のノリにはついていけない。

・一時期勉強にハマっていて、全国模試で一位をとったことがある。

・基本二人称は『貴様』。興味をもった人間にのみ『お前』と言う。

『須佐能乎（スサノオ）』

織田信長が戦国時代から持っている能力。『氣』とは違う高密度のエネルギー体。

信長はこの力を纏って、徒手空拳で戦う。（武術を習ったことがないのでゴロツキがやる喧嘩闘方に近い腕前。）

信長はこの力を段階的に使い分けることが可能。

第一段階

体に薄い『赤い炎のようなオーラ』を纏う。よく見ないとオーラに気づかない。弾丸を弾いたり、壁を壊すことが出来る。このオーラは物や人間に纏わせることもできる。（例：車に纏わせ弾丸を弾く。）

第二段階

視認できるほどオーラの色が濃くなる。パワー、スピード、耐久力がはね上がる。そこそこ強い相手にはこの段階で戦う。

第三段階

オーラが血のように赤くなる。第二段階よりパワー、スピード、耐久力が増す。この段階で『壁を越えた実力者』と互角に戦える。

第四段階

『赤い骸骨』が出現する。この骸骨は信長の意思で自由に動く。パワー、スピード、耐久力が第三段階より増す上に手数が増える。あらゆる万物を砕いて弾く最強の『盾』にして『矛』。骸骨の内側に入れば核兵器でも信長に傷を負わすことは出来ない。

第五段階

???

元ネタ：NARUTOの『須佐能乎（スサノオ）』

キャラ作りに一番悩んだキャラ。特に性格をどうするかで三週間悩みました。実は一番書きにくいキャラ。

モデルは戦国時代に実在した武将『織田信長』。

もつと破天荒に、もつと『魔王』らしくを目標にこれからも頑張つて書いていこうと

おもいます。

織田帰蝶（旧名：齋藤帰蝶）

イメージＣＶ：桑島法子（友人案）

身長160cm

スリーサイズ

92

58

84

血液型 A型

誕生日 1991年 9月1日 おとめ座

一人称 私

渾名 『織田の奥方』、帰蝶、帰蝶ちゃん、姉さん

職業 天神館 3―7 (原作開始時)

家庭 義父、義母、夫

好きなもの 白玉、餡蜜

趣味 料理(プロレベル)

特技 どれだけ正座しても足が痺れない

大切なもの 家族

苦手なもの 貝類、他人の事を考えない人

尊敬する人 信秀、由紀

・ 織田信長の伴侶。まだ結婚出来ないため戸籍上は養子。

・ 青みがかった黒の長髪、瑠璃色の虹彩をした切れ長の目、顔立ちはかなり整って

いる。綺麗系の美人。

・ 性格はまっすぐ。自分の意見をハッキリ言うタイプ。

・義父母との関係はかなり良好。義母：由紀とは本当の親子のように仲が良く、義父：信秀には「よくアレと結婚してくれた。」と涙ぐんで感謝されている。

・信長との関係は、一見すると信長の亭主関白に見えるが、帰蝶は信長に自分の意見や主張をハッキリ言う。

・信長の嗜好を知っているうえで愛している。

・信長を叱れる数少ない人物。(もう一人は由紀)

・養子になる際、色々と手続き等が必要なのだが、信長の『知り合い』が全部解決してくれた。(詳しくはキャラクター設定2を参照)

戦国のメデイアっていっぱいあるけど、帰蝶↓信長に心酔しているって設定、よく見かけますよね？

「愛しているから全てを受け入れる」んじゃないくて「愛しているからこそマトモになつてほしい」という感じのキャラが作りたくて、帰蝶ができました。

モデルは『大和撫子』。

信長を愛しているからこそ、信長に真剣に怒る。そんな描写を書いていきたいです。

織田信秀

イメージCV：金丸淳一（友人案）

身長178cm

血液型 A型

誕生日 1967年 10月23日

さそり座

一人称 僕

渾名 父、お義父さん、信秀君

職業 サラリーマン

家庭 妻、息子、息子の嫁

好きなもの 穏やかな休日（ほぼ無い）

趣味 家でのんびりDVD鑑賞（ほぼ出来ない）

特技 自分の胃の健康状態が分かる

大切なもの 家族

苦手なもの 健康診断

尊敬する人 世の中の働くお父さん

・織田信長の父親。

・黒の短髪、少し黒が濃いめの虹彩をした目、そこそこの容姿。

・性格は気弱。つねに信長に気苦労している。

・帰蝶が来てくれたおかげで、信長の破天荒が少し落ち着いたので感謝している。

- ・妻：由紀とは学生時代からの恋愛結婚。
- ・健康診断で毎回胃がヤバイと通告されている。
- ・何だかんだいって、信長のことは大切に思っている。

信秀も設定に苦労したキャラ。一番書きやすいキャラ。

モデルは漫画：銀魂の『志村新八』。

多分暫くは出てこない。

織田由紀

イメージＣＶ：井上喜久子（友人案）

身長162cm

スリーサイズ

83

59

85

血液型 O型

誕生日

1968年

6月29日

かに座

一人称 私

渾名 母、お義母さん、由紀さん

職業 専業主婦

家庭 夫、息子、息子の嫁

好きなもの 美味しい食べ物

趣味 ご当地巡り

特技 人差し指と小指がくつつく

大切なもの 家族

苦手なもの オバケ、虫、辛い食べ物

尊敬する人 なし

・織田信長の母親。

・茶色のセミシヨート（ちよつとカールしている）、茶色の虹彩をした垂れ目、顔立ちは整っている。可愛い系の美人。

・性格はおっとり。かなりズレている。

・信長のある意味天敵。（どう対処したらいいか分からないから）

・帰蝶のことを娘のように可愛いがっている。姉妹と間違えられることもしばしば。

・信秀との仲は良好。実は由紀のほうから告白している。

・信長のことはヤンチャな子だと思っている。

信長の母親なんだから普通じゃない。信長なみに破天荒か、かなりズレているか、結果的に足して二で割ったようなキャラになりました。

モデルは漫画：らき☆すたの『高良ゆかり』。

多分信秀といっしょで暫くは出てこない。

キャラクター設定2

一城雅人

・かませ

何故か作者の友人が選んだ『真剣で魔王に怯えなさい!!』人気NO.1キャラ。理由は「ダサイから」だそうです。

帰蝶の父親

・モブ

帰蝶の父親という結構重要ポジションでありながら、話した回数が二桁にも満たない

キャラ。

信長の取りまき四人

- ・ 修学旅行で信長の班にいた四人。
- ・ 実は入学式の時、信長に喧嘩をふっかけてきた四人。彼等は小学六年間信長と同じクラス。

名前すら決まっていなキャラ。多分二度と登場しない。

門脇美嘉

- ・ 信長の小学時代の担任。
- ・ 教師になってから六年間信長の担任をつとめた。
- ・ 信長が卒業後、違う小学校に転任。「あの織田信長に比べたら」という精神のもと、学校の悪ガキを肅正。
- ・ 信長を受け持ちながら、クラスを崩壊させることなくまとめた手腕を活かして、学校の児童問題を次々と解決。教員界では有名な人となる。

信長と関わって人生が変わった人。入学時はキラキラした目をしていたが、修学旅行時には死んだ魚のような目をしている。

北沢組

・五話で信長が『暇潰し』と襲撃した暴力団。裏社会では名が知れた存在だが、信長は一時間で潰した。

- ・本編で出てきた「金を湯水のごとく提供」してくれた『知り合い』。
- ・帰蝶が織田家に養子になる際も、色々と面倒ごとをおさめてくれた人達。

本編で名前すら上がらなかったわりに、大活躍な人達。

信長は北沢組のような暴力団の知り合いを全国に持っています。

信長の舎弟

- ・名古屋の私立高校で、信長に付き従っていた不良達。
- ・高校入学時にクラス全員が信長にボコボコにされている。
- ・信長の強さに憧れ、信長を尊敬している。

・ 帰蝶の注意もあって、彼等は不良のくせに礼儀正しく、人に親切。

例：眼鏡をかけた優等生

「道を聞きたいんですけど。」↓「知りません。」↓スタスタ

信長の舎弟

「道を聞きたいんですけど。」↓「おう、いいぜ。何処行きたいんだ？」

こんな感じ。

・ 信長と帰蝶が転校した後も二人を敬い続け、帰蝶の教えに従い礼儀正しく生きていく。

ト。一回きりのモブなだけで、帰蝶の父親より目立っている。ちなみに全員リーゼン

16

2008年

4月9日

福岡県―『天神館』

『天神館』

個性を重んじる校則、ユニークな授業が特徴の九州を代表する学校である。

此処 天神館は全国でも珍しい『武術』をカリキュラムに取り入れた学校で、『弱肉強食』を教訓に日々生徒達は切磋琢磨し、各分野で好成績を残している。

そんな天神館の館長をつとめている『鍋島正』は、館長室で一人もの思いにふけていた。

Side: 鍋島正

「桜の匂いがするな…春の季節だ。」

窓から香ってくる校内の桜の匂いを嗅ぎながら、俺は手元の資料を見る。

「今年も良い『粒』がそろっているなあ…いや、そろい『過ぎ』か？」

今年も天神館（ここ）にはイキのいい奴等が入ってきた。特に今年は『当たり』の年だ。飛び抜けていいのが『十人』も入ってきやがった。

だが……

「全く、今の若え連中は急ぎすぎてるツつうのが分かんねえのかねえ。」

先日、件の十人の一人が「俺を『大将』にしてくれ」と頼んできやがった。

天神館にはある『伝統』がある。

毎年春のこの時期、三年生と教師達が天神館の代表を決める『将選挙』という行事がある。

この『将選挙』で選ばれた者は全生徒の頂点にたち、学校を代表する優れた者として『大将』の称号を与えられる。

そして、この『将選挙』に選ばれるのは『二年生』のみという規則がある。しかし、件の十人の一人は、一年生でありながら「自分こそ『大将』に相応しい」と豪語し、選挙に出馬させてくれと頼んできやがった。

普通なら許可出来ねえんだが、今年の二年生で選挙に出たがる奴が一人もいないッてえのが問題だった。出馬したがっている一年生は『実力』も申し分ない。教師達の中には、『大将』にしているんじゃないかと言う奴も現れた。

大切な伝統だけあって、何とかならねえもんかアレコレしていたら……

「まあ、調度良さそうなのが見つかって良かったがな……」

手元の資料を見ながら机の置かれた茶を啜り、俺は一息ついていた。

バンツ！

「館長！　　一体どういふことなんですか!？」

生徒が一人突然部屋に入ってきた。

「オイオイ…：目上の人の部屋に入るときは、ノックして入るツて習わなかったのか？」
「何故ですか館長！　　どうして俺が『天神館の大将』になれないんですか!？」

質問を質問で返しやがった、まったく最近の若い連中は……
入ってきたのは件の一年生『石田三郎』だった。何処で聞いたのか、もう『大将の件』を知っていやがる。

「何故ツてオメエ、入学案内にも書いてあつたらうが？　　『大将になれんのは二年生』
だつて……」

「しかし、今の二年生で『大将』になりたい者は一人もいないではありませんか！　　な
ら、出世街道を歩く俺がなつても何も問題はないでしょう!？」

「……まあな。確かに今の二年生でやりたがっている奴はいねえ……」
「ならば……」

「だがな、石田。そいつは『昨日』までの話だ。」

そう、それは昨日まで……問題は解決したんだ。

「今日、二年生に転入してくる奴がいる。ソイツこそが新しい『天神館の大将』だ。」
「な!?!」

石田の顔は驚愕に満ちた顔をしていた。まさか『他所の学校』から『大将』が選ばれるとは夢にも思わなかっただろう。

「『大将』はもう決まってるんだよ、悪いが来年まで待つてくれやあ。」
「な、ならば……」

石田が何かを言いかけた時、グラウンドがざわついているのが聞こえた。部屋の窓か

ら外を見てみると……

「ああ？　何だあ、ありや？」

グラウンドに突如『真つ黒のリムジン』が入ってきた。それも二台。リムジンがグラウンドのど真ん中に停車すると、中からどう見ても『カタギ』じゃねえ連中が出てきやがった。

「天神館！　到着しましたっ！　『信長さん』！」

「『到着しました!!』」

連中は軍隊顔負けのきびきびした動作で一礼していた。暫くして、リムジンから男が一人降りてきた。

黒の髪を束ねた長身のソイツは、天神館（うち）の制服を着ていた。周りにいた生徒

達は降りてきた男に釘付けになっていた。特に女子が。

男の顔が見えた。それはよく知っている顔だった。何せつい二分前まで資料で見
ていた顔だ。

「な、何だあいつは!？」

石田はいつの間にか俺の隣に来て、窓の外を見ていた。

「……石田、紹介するぜ。」

隣で驚愕している石田に俺は告げた。

「アイツが新しい『天神館の大将』、『織田信長』だ。」

時間は少し遡る。

2008年 4月9日

福岡県—福岡駅

「やっと着いたか、体が重くて気怠いな。」

「大阪を過ぎたあたりから、ずっと寝ていらしたからですよ。」

駅に降りて体を伸ばしす。バキバキと体が鳴る……ずっと座りっぱなしだったからだ。

織田信長と織田帰蝶は今日から転入する学校に行くため、福岡県に来ていた。

「ところで、これからどうします？ 此処からだと天神館はかなり遠いですよ？」

「心配いらん、手は打ってある。」

帰蝶が言うとおりに、福岡駅（ここ）から天神館まではかなりの距離があった。車で行くにしても、今は朝の7時。タクシーは全て出払っていて、バスも既に発車した後だった。

た。

しかし、心配している帰蝶とは逆に信長は平然としていた。そして暫くすると……

キイイイイイイイツ!!

二人の前に黒のリムジンが物凄いドリフトしながら停車してきた。帰蝶は突然現れたリムジンに驚き、信長の後ろに隠れた。

すると、リムジンから強面の男達が出てきて……

「お迎えに参りましたっ！ 『信長さん』！」

「「参りました!!」」

信長に畏まって一礼した。その一連の動作に帰蝶は面食らう。

「ご苦労、天神館まで連れていけ。後、荷物を寮に運んでおけ。」

「了解しましたっ！ 此方へどうぞ！」

「行くぞ帰蝶。」

「ちよ、ちよつと待つてください！」

帰蝶は困惑しながら信長の後を追い、リムジンに乗った。中はとても広く、何故か置かれてある机の上にはシャンパンがあつた。

「誰ですか、この人達？」

「只の『知り合い』だ、此処に来る前に迎えに来るよう『頼んで』おいたのだ。」

サラリと信長は言った。帰蝶は今度は呆れた表情をして信長を見た。

「……『北沢組』の人達以外にもいたんですね、『知り合い』。」

「ああ、昔全国を回ったからな…至る所にいるぞ。」

夫の新しい事実を知って、帰蝶はまた一つ『悩み』ができたと頭をかかえた。

暫くして、リムジンが学校のグラウンドに入っていった。どうやら此処が天神館のようだ。

「天神館！ 到着しましたっ！ 信長さん！」

「到着しました！」

車のドアが開かれ、『知り合い』は全員一礼していた。信長は開かれたドアからゆつくりと降りる。

「さて、現世（こよい）の武士（もののふ）は何処まで余（オレ）を享受させてくれるのだろうか……」

グラウンドに降りた信長はその『気配』に関心した。

「ほう……『これ』は……」

懐かしい気配がする。

戦国（昔）、よく感じた気配だ。

剣を、槍を、弓を、拳を誇りとし重んじる者達の気配。

そう、これは……『武士（もののふ）の気配』。

「フッフ、思った以上に『楽しい』そうだ……天神館。」

懐かしい気配に浸りながら、織田信長は『笑った』。

S i d e : —————

「ねえねえ、あの人誰!? スゴクカッコいい!」

「本当だ! 背、高い!」

グラウンドに現れたイケメンに、クラスの女子達は興奮している。

「ねえ『燕』！ あの人ちよくヤバくない!？」

友達の一人が話しかけてきた。私はグラウンドにいるイケメンを見る……

「ん、どうかな？ 私はタイプじゃないなあ。」

「うそ〜！ 私どストライクだよ！ 告ろうかな、彼氏いないし!！」

顔を赤らめている友達を放置して、私はグラウンドの男を『観察』する

「(……只者じゃなさそう……見た感じ一年生じゃない、転入生?)」

男から感じる『気配』に私は顔を引き締める。

何だろう、この感じ……あの人から感じる『気配』は天神館(ここ)に多くいる武人の気配(それ)とは違う……

「……………何だか天神館（ここ）、荒れそうだね……………」

私、『松永燕』の直感がそう告げていた……………」

「よく来たな、天神館はお前達を歓迎するぜ。」

天神館の館長 鍋島正は眼前の二人に言笑した。一人は淑やかに振る舞い、もう一人はこれでもか、という程えらそうな態度をしていた。(頬杖をつきながら足を組み、片足をテーブルにのせている。)

「そいつはご苦労、褒美でもとらそうか?」

「の、信長さん! 失礼ですよ!」

「ハハハ! 噂どおりの奴らしいな! 『選んだ』かいがあつたぜ!」

鍋島正は織田信長の態度に、怒るどころか豪快に笑いながら受け入れた。

「噂は九州(ここ)までとどいているぜ、中部・関西の暴走族を僅か一年で掌握、『普通』は出来ねえ…一体どうやったんだ?」

「何もしとらんさ、暇潰しに遊んでいたら後ろをついてくる連中が勝手に増えたただだ。」

「ハハハ！ 暴走族とは言え、膨大な数の人間を一つにまとめるツてえのは並大抵の人間に出来る事じゃねえ：その年でたいしたもんだ。」

もう一つ噂があんだけどな、鍋島はそう思いながらもそれを口にする事はなかった。

「そんじゃ頼むぜ、お前が今日から天神館の『大将』だ。」

ニヤリと鍋島は笑い、信長に大将の座を託した。

「何だ大将（それ）は？」

「…………え…………」

館長室が静寂に包まれた。

「帰蝶、大将とは何の事だ？」

「…………聞いていなかったのですか？　名古屋の学校で説明されたじゃないですか。」

「知らん。此処に武士（もののふ）がいるとは聞いたがな。」

「…貴方つて興味がない事には、本当に無頓着ですね…」

「で？　大将とは一体何だ？」

「大将とは、天神館で最強の武士が得られる称号だ。」

呆けている鍋島の代わりに、鍋島の後ろにいた石田三郎が信長の質問に答えた。

「…………この部屋に入った時から疑問だったのだが…誰だ貴様は？」

「俺は石田三郎。出世街道を歩むエリートだ。」

ほう、と信長は石田を見て『少し笑う』。石田は信長の側に近づき、苛立ちを隠せないのか眉を吊り上げ信長に大将について語った。

「大将になれるのは俺のような選ばれたエリートだけだ……断じて貴様のようなフザケタ奴がなっていないものではない！」

バンッ！

館長室にある信長が足をのせている机に、石田は手を勢いよく叩きつけた。その手には学生が制服に付けている『ワッペン』があった。

「俺と決闘しろ！　俺のほうが大將に相応しいことを証明してやる！」

生徒同士が自分のワッペンを重ね合わせる、天神館の校則ではそれは決闘の合図となっている。大将の事は知らなかった信長だが、そのシステムは知っていた。

「……フフフ、早速楽しませてくれるではないか……」

「信長さん……」

「いいだろう、小僧。その決闘、受けてたつ。」

信長は自分の制服に付けられたワッペンを石田のワッペンに重ねる。

「館長、決闘の準備をお願いします……」

今だ呆けている鍋島にむかい、石田は静かに言った。

「……全く、お前等だけで話進めてんじやねえよ。」

ガシガシと頭をかき、ヤレヤレといった表情で鍋島は決闘する二人を見る。

「いいだろう、決闘を許可する。今から30分後にグラウンドで決闘を行う。二人共十分体をならしておけ。」

「覚悟しておけ、武士の尊厳にかけて貴様を叩きのめす！」

「それは怖い。お手柔らかに頼む。」

鼻から息をもらしながら 信長は答える。その態度に石田はさらに眉を吊り上げながら部屋を退室した。

「さっそく問題起こしやがって…ま、大将に相応しいかどうかは俺も知りてえ。百聞は一見にしかず、実際お前がどれ程の実力か見させてもらうぜ。」

「フフフ、期待に答えられるよう努力しよう。」

そう告げ、信長と帰蝶は館長室を後にした。鍋島は机の中から葉巻を取り出し、紫煙を口にふくんだ。

「さて、見せてもらうぜ……裏社会で知らぬ者無しと言われてる実力を……」

館長室を後にした信長と帰蝶は、そのままグラウンドに向かっていた。

「…楽しそうですね。」

「楽しいさ、楽しくて楽しみでしょうがない。あの小僧、名古屋（むこう）の連中とは比べ物にならないほど強い…久しぶりに楽しく闘えそうだ。」

口角を吊り上げ、ニヤリと信長は『笑っている』。そんな信長を見て、帰蝶は信長に交渉をもちかける。

「信長さん…私と約束してくれませんか？」

「ム？」

「今回の決闘………」

30分後、グラウンドには大勢の生徒が観戦に来ていた。一年生でありながら校内最強と噂されている石田三郎。その対戦相手は今朝グラウンドにリムジンで現れた謎のイケメンである。殆どの生徒が興味半分で観戦しているが、中には真剣な表情で見ている者もいた。

「待たせたな……さて、決闘前に聞いてやる。大将の座を辞退するなら、俺も手荒なことはせん。どうする?」

「大将の座とやらには未練も何も無いが、勝負せず負けを認める理由が余（オレ）にはないな……むしろ貴様の方こそよいのか? 大勢の前で醜態をさらすことになるのだぞ。」

「……五体満足でいられると思うなよ……」

「ではこれより！ 決闘を執り行う！ 両者前へ！」

審判の声グラウンドに響く。決闘場の中心に二人が向かい合う。

「天神館 1—1、石田三郎！」

「……織田信長だ……」

「では！ お互い構え………」

決闘の幕が

「始めッ!!」

今上がった。

石田三郎

彼の家は代々続く『武士』の家系で、武に生きる者なら一度は聞いたことがある有名な家である。彼は自分の家を誇りに思い、家の名に恥じぬよう幼い頃より英才教育を受けてきた。彼が天神館に入学したのは、自身の名を上げ出世の道を進むためであった。その為には『大将の座』は絶対に手に入れなければならないかった。

(大将になるのは自分のようなエリートでなければならない、断じてあんな低レベルの不良共を従えていたアイツではない！)

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

帯刀していたレブリカの日本刀を抜刀して、織田信長に向かい斬りかかる。それは達人の域に達した一撃であり、常人なら避けるどころか見ることも不可能な一撃だった。

キンツ!

「な……」

石田の剣はアツサリと織田信長に受け止められた。否、正確には『織田信長の体から放出している赤いオーラ』が受け止めていた。織田信長は開始前と変わらず腕を組んで立っていた。

「ほう……さすがに『こゝ』までは出させるか……大したものだ。」

顔だけ動かし、織田信長は石田を見る。

「武士（もののふ）を名乗るだけはある……だが後一味足りん……それでは余（オレ）に届かんぞぞ?」

「くっ!」

石田は織田信長への認識を改め、警戒を強めた。自分の剣は簡単に受け止められるものではない。あの『赤いオーラ』が何なのか分からないが、もしかしたら自分と同じ子相伝の秘伝の技なのかもしれない。

だが……

「貴様がどんな技を使おうが関係ない、低レベルな不良共を束ねて満足しているような貴様に『大将の座』は相応しくない！」

「フッフ、なら証明したらどうだ。自分こそが上に立つ者に相応しいと……自称エリート？」

石田を馬鹿にしているかのように織田信長は『笑う』。もともと沸点の低い石田の堪忍袋はついに切れた。

「キサマアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

先程よりもスピードが増した剣撃が織田信長を襲う。

「フフフ…現世（いま）の武士（もののふ）も中々やるではないか……」

織田信長は先程と変わらず腕を組みながら、石田の猛攻を受け流していた。

人が全力を出して動けるのは5分が限界とされている。

30分後、石田の猛攻は衰えていた。肩で息をして、今にも倒れそうな石田だが、対する織田信長は開始した時と変わらず、不敵な笑みをうかべていた。

「どうした？　もう終わりか？」

「はあ、はあ、ぐうっ！　なめ、るなあ！」

全身から汗をながし、手足は震えているにもかかわらず石田は刀を強く握った。

「これだけは……あまり使いたくなかったが……」

「ム？」

「これで終わりだあああああああああああああ!!」

『光龍覚醒』で強化された脚力で地面を蹴る。全神経を注いだ剣撃が織田信長にふり下ろされた。

ガギンツ!

「……………え……………」

石田の耳に入ってきたのは切り伏せる音ではなく、刀の碎ける音だった。

刀に集中していた気が拡散する。その衝動で石田の意識が薄れていく。

石田が最後に見たのは、開始前から何一つ変わっていない：腕を組み不敵に笑う織田信長だった。

只、その身に纏う『赤いオーラ』は『血のように』濃くなっていた。

ドサッ

石田の意識はそこで途切れた。

「勝者っ！ 織田信長!!」

審判の宣言から暫くして、観戦していた生徒達から喝采が上がった。

S i d e : 織田帰蝶

「よかった……『約束』、ちゃんと守ってくれた。」

生徒達が喝采を上げている中、織田帰蝶はホッと安堵の息をもらした。

…

……

……

「信長さん、私と『約束』してくれませんか？」

「ム？」

「今回の決闘……『相手の人には一切攻撃しない』と。」

「……どういう事だ……」

「貴方が闘って、相手の方が無事だった事が一度でもありましたか？　私は、貴方に無

意味な暴力をしてほしくありません。」

「……可笑しな事を言うものだ、攻撃せずしてどう勝負しろというのだ？　お前は余

(オレ)に負けてほしいのか？」

「そうは言ってません……それに、貴方なら『攻撃しなくとも』勝てるでしょう？」

「……フフフ、フフハハハ！　随分『信頼』されているものだ……いいだろう、手を出さ

ずとも勝てる」と証明してみせよう。」

……

……
……

「……でも、あの人が約束を守ってくれたのは偶々だ……」

そう、織田信長が帰蝶との約束を守ったのは、今日偶々織田信長の機嫌が良かったからだ。

楽しみにしていた学校に転入して、転入早々決闘を申し込まれた。これであの人の機嫌が良くなる筈がない、帰蝶は確信していた。

「今後、また決闘を申し込まれるかもしれない……その時は私が『止めなくちゃ』……」

帰蝶は顔を引き締め、改めて心に誓う。

「私があの人を『正しく』してみせる……」

Side : —

「馬鹿な……石田さんが、負けた!？」

天神館の1—1教室、そこで九人の生徒達が決闘の結果に驚愕していた。

「な、何者なのだ!？ あの男は!？」

「データには無い男だ……ゴホッ、あの男が使っていたあの技も見たことないものだった……」

「でもエライイケメンやなく。石田もそうやけど、アツチの方が色気があるは。」

「……………」

「……………」

「おや、『毛利』に『龍造寺』。今日はやけに大人しいな?」

「そおいやそうだなあ、どおしたんだあ? いつもはウルセエのに。」

「……美しい……」

「は？」

「美しい……あの男の側にいるあの女性、実に美しい！」

「珍しく意見が合うな、俺もそう思うぜ。」

「……いつになく真剣な顔していると思つたら、そんな事か……」

「そんな事だと！ お前等アレ見て何にも感じないのか!？」

「いや、それがし女子には興味がないゆえ……」

「見ろよ、あの流れるような黒髪、深く綺麗な海のような瞳、自己主張するバスト！
今まで多くのモデルや芸能人と会ってきたが、トップクラスの美人だぞ！」

「その通り！ ああ、なんと可憐なんだ……私のものにしたい！」

「いや、二人共。見た感じあの女の人、あの男の彼女みたいだぞ？」

「フツ、俺の好みは『彼氏もちの女』。むせかえるような恋の匂いにするぜ！」

「いや、あの美女は私のものだ。私がいただくぞ。」

「……どうなつても知らないぞ……」

S i d e : 松永燕

クラスの皆が喝采を上げている中、私は真剣な表情で彼を見る。

「(開始してから一歩も動いてなかった……あの一年生の子は弱くない、一体何者なの……)」

彼女は決闘の様子を事細かく観察していた。彼女が特に観察していたのは、織田信長から出ていた『赤いオーラ』だった。

「(あんな技、私は知らない……気じゃない、それ以上の何か……)」
「燕どうしたの? 難しい顔して。」

「ん? 何でもないよん♪ ちよつと考え事してただけ♪」

友人から声をかけられ、彼女はいつものように明るく笑った。

「今は情報が少なすぎる……もっと彼の情報が必要だ。」

織田信長、か……」

窓からグラウンドを見下ろしながら、彼女は呟いた。

S i d e : 鍋島正

「あれが、アイツの実力か……」

葉巻を口にくわえ、紫煙をふくみながら鍋島正は決闘を見ていた。

「どうやら『噂』は本当だったらしいな……」

織田信長の噂。それは中部・関西地方の暴走族を掌握したという事だけではなかった。もう一つ、噂があった。

日本全国にいる有名暴力団を牛耳り、裏で操っている。という噂があった。

最初にこの噂を聞いた時、鍋島正は信じなかった。暴走族と暴力団は違う。前者は力で屈服させるところができるが、後者はそうはいかない。数々の修羅場をくぐってきた集まりだ、力だけでは従えることは出来ない。

しかし今、鍋島正はその噂を信じたことにした。今の決闘から織田信長がかなりの実力者だと分かった以上に、鍋島正は織田信長から漂う『何か』を感じとった。

「アイツ、何かニオウぜ…確証はねえが、何か……」

再び紫煙を口にふくみ、鍋島正は椅子に腰かける。

「もしかしたら、アイツが一番『厄介』なのかもな……」

その眩きは、紫煙とともに吐き出された。

「……『保険』をかけとくか……」

持っていた葉巻を灰皿にこすり、鍋島正は織田信長を館長室に呼んだ。

Side 2 | 7

「ええ、今日から転入生が入る事になった。皆知っていると思うが、今朝決闘をしていた者だ。入ってきなさい。」

ガラガラガラ

二人の生徒が教卓の前まで歩いてきた。一人は全員がよく知るイケメン、もう一人は

目も眩む美女だった。

「余（オレ）の名は織田信長、『第六天』より来た『魔王』だ。」
「織田帰蝶です。『主人』と一緒に今日からお世話になります。」

ツツコミどころが多すぎる自己紹介に生徒達が困惑する中、一人の女生徒が心の中で
眩いた。

「（うちのクラスなの…）」

彼女、松永燕の心の眩きは、実はクラスの全員がしていた。

S i d e : 天神館

2—7

キーン、コーン、カーン、コーン……

「じゃあ、今日はここまで。」

午前の授業終了の合図がなり、静かだった教室は途端に騒がしくなった。

「(思ってたより難しいなあ、天神館(ここ)の授業……)」

教科書を片付けながら、帰蝶は先程の授業内容を思い返していた。天神館の学力レベルは全国的にも高い位置にある。子供の頃から英才教育を受けていた帰蝶も、授業内容の質の高さに驚いていた。

「帰蝶ちゃん♪」

「え？」

自分を呼ぶ声を聞き、帰蝶は振り向く。そこにはクラスメイトの松永燕がいた。

「さっきの英語の授業、凄かったね！ 英語ペラペラだったけど、もしかして帰国子女つてやつ？」

「違いますよ、子供の頃から英会話を習ってますから。松永さんも、難しい英文の訳問題すらすら解いていたじゃないですか。」

「いやあ、予習してきただけだよ。それと、私のことは燕でいいよん♪」
「分かりました、燕さん♪」

松永燕は天神館でできた帰蝶の数少ない友人だ。

『織田信長の妻』、その肩書きは人を遠ざけるには十分な要素になっていた。クラスでも、帰蝶と親しく話しているのは松永燕だけである。

「そういえば帰蝶ちゃん、今日は旦那さんはどうしたの？」

松永燕が帰蝶に質問した。今日、織田信長は学校に来ていなかった。

「……あの人は今日、『知り合い』の人と一緒に『雑草刈り』に行くと言っていました。」

帰蝶が視線を落とし、溜め息混じりに答えた。

「(『雑草刈り』?) そっかあ、なら今日はお昼一緒に食べない?」

松永燕の提案に帰蝶は顔を綻ばせる。

「本当ですか! 私同年台の女友達とお昼を一緒に食べるの初めてです!」

「そうなんだ? フフ、ならとびつきり楽しい初めてにしてあげるよん♪
帰蝶
ちゃん、今日はお弁当?」

「いえ、今日は学食にしようかと。でも、食堂が何処か分からなくて…」

「なら私が案内してあげるよ。私も学食だし♪」

「はい♪ お願いします。」

天神館の食堂はとても広い。一般のファミリーストランの三倍程の広さをほこる食堂には、多くの生徒が埋め尽くしていた。

「広いですねえ……」

「帰蝶ちゃん、あそこで食券売つてあるから買つてきてくれる？ 私、席とっておくか

ら♪」

「いいですよ、燕さん何にします？」

「私、A定食ね♪」

「分かりました♪」

「……どれで買うんだろう……」

広い食堂にはそれだけ多くの人が入る。それに合わせて食券販売機も通常より大きく、多く設置されてある。食券を買う事自体経験のない帰蝶は、どうすればいいのか分

からず戸惑っていた。

「A定食ってどれだろう……」

「どうしたんだい、シニヨリーナ？」

突然かけられた声に驚きながら、帰蝶は声のする方へ振り向く。そこには薔薇を持ったホストの用な格好をした男子生徒がいた。

「あ、あの……私に言ったのですか？」

「そうだよシニヨリーナ、俺の目には君しか写っていないんだから。」

微笑みながら男子生徒は帰蝶の問いに答えた。

ゾクッ

言い知れぬ悪寒が帰蝶の背筋をつたった。

「そ、それで、私に何か用でも？」

「そうだな……こうして君と会話することかな。」

「(何を言っているのこの人……)」

突然現れた男子生徒に帰蝶は吃驚していた。会ったこともない人に、こんなに馴れ馴れしく話しかけられたのは初めてだったからである。

「あ、あの……私、食券を買わないといけないので……えっと、A定食は……」

「それならこつちだよ、シニヨリーナ。」

ピッ

男子生徒は帰蝶の手をつかみ、自分の手と重ねて食券販売機のボタンを押した。

「！ て、手！ な、何を!？」

掴まれた手を振りほどき、帰蝶は男子生徒から距離をおく。

「まあまあ、ウインクでも見て落ち着いて。」

そう言うと男子生徒は帰蝶にウインクをした。その瞬間、周りにいた女子生徒達が叫声をあげる。全員顔を赤らめている。

対してウインクをされた帰蝶は、先程よりも冷たい悪寒を感じていた。

「落ち着けません！ さつきから何なんですか！」

「気持ち分かる。胸がドキドキときめいているんだろう。そう……君は今恋している。」

「してません！ ドキドキというより、ゾクゾクします！ それに私には夫がいま
す！」

「ああ、聞いているよ。でもそんな事俺には関係ないね。彼氏もちの女だろうと、人妻だろうと、良い女が一人でいたら口説くのが、ハンサムに生まれた者の運命（さだめ）なんだ。」

「（本当に何を言っているのこの人!?!）」

会話が成り立たない相手に、帰蝶は戸惑っていた。

「フツ…見境なく女性を口説くとは、相変わらず下品な奴だな『龍造寺』。」

どうしたらいいか分からず戸惑っていた帰蝶の前に、また男子生徒が一人現れた。肩までかかる長髪をして、何故かシャツの下を来ていない男子生徒だった。

「その美しき淑女よ。その色魔から離れたほうがいい。そいつは女なら見境なく口説く奴だ。そして…私のもとへ来たまえ。麗しき乙女よ。」

「オイオイ、先に声をかけたのは俺だけ『毛利』。いきなり割り込んでくるお前のほうがよっぽと下品だぜ。」

「フツ…私は只美しいものが好きなだけだ。もつとも、一番美しいのは私だがな。」

「(この人も何を言っているのか分からない！ 何なのこの人達!?)」

この場を離れようにも、後ろは食券販売機があり、前方には正体不明の謎の男子生徒が二人、周りはいつの間にか、多くの女子生徒で囲まれていた。

「(どうしよう…逃げられない…)」

「さあ、淑女よ。私のもとへ来たまえ。」

「こんな自己中野郎の言うことなんざ無視したほうがいいぜ。こいつより俺と一緒にお茶でもしないか？」

「(誰か助けて!)」

迫りくる二人に恐怖しながら、帰蝶は心の中で助けを呼んだ。

「ほう、何やら面白い事になっているではないか。」

立ち尽くしている帰蝶に助け船が出る。ふいに聞こえた声に、その場にいた生徒達が振り向く。

「信長さん!?!」

「フフフ、お前が戸惑っているところは久しぶりに見るな、帰蝶。」

そこには織田信長が、面白い催しでも見ているかのように笑っていた。

「何故学校に!?! 今日確か…」

「『雑草刈り』が予想以上につまらなくてな。早々に終わらせて来たのだ…:…それより、貴様等。余（オレ）の伴侶に手を出そうとは…:…自殺志願者にとらえてよいのか?」

織田信長が二人のもとへ近づいていく。周りにいた女子生徒達はモーゼの海割りのように割れた。

「フツ…お前が織田信長か。噂通りの男のようだな。」

「自殺志願者つて…随分ユニークなジョークだな。」

織田信長に対して、二人は嘲笑で返した。

「しかし、そちらから来てくれるとは…:…呼びにいく手間が省けた。」

「そうだな…『作戦』に変わりはない。」

「ム？」

二人は織田信長に向かい合い、お互いのワッペンを前に出した。

「どうだい、大将？ あんたの嫁を賭けて俺達と決闘しないか？」

「は!？」

「……………ほう……」

帰蝶が驚愕して、ニヤリと織田信長が『笑う』。

「もともとそのつもりだったんだ。どうだい？ この勝負、乗るか？」

「面白いではないか。」

「の、信長さん!？」

いつの間にか自分が賭けの対称になっていることに、帰蝶は慌てる。決闘を止めに入ろうとした時……

「いいだろう。その決闘受けてたつ。」

既に織田信長が決闘を承認した後だった。

「信長さん！ 勝手に私を賭けしないでください！」

「何だ帰蝶？ おまは余（オレ）が負けると思っているのか？」

その問いに帰蝶は言葉をつまらせる。見た感じ、目の前の二人は強そうに見えない。信長が負ける事はないだろう。しかし決闘するということは、また信長が人を傷つけるという事。いくら会話の成り立たない変な二人だとしても、信長に人を傷つけてほしくない。

帰蝶は決闘を止めるよう催促しようとする。

「と言っても、俺達がやる決闘は普通の決闘じゃないぜ？」

「何？」

その言葉に帰蝶と信長の動きが止まる。

「なあ大将…あんだ、『ダンス』は出来るかい？」

「『ダンス』？」

「そう、私達がやる決闘の内容は『ダンス勝負』だ。ルールは簡単、お互いに一曲ずつ踊りどちらが美しかったか競うというものだ。」

決闘内容に帰蝶は考え込む。確かにこのルールなら信長が人を傷つける事はない。しかし信長がダンスが出来るとは思えないし、しているところなど見たこともない。

「どうする大将？ つつても、決闘はもう承認されてるけどな。」

「……………」

信長が沈黙する。帰蝶は固唾を飲み、信長の答えを待つ。

そして……

「いいだろう、承認した。」

「信長さん！」

「OK！ 勝負は明日の放課後、体育館でだ。踊る曲は自由、こっちは俺と毛利の二人、そっちはあんた一人、何か質問はあるかい？」

「無いな。それでいい。」

「フフフ、明日までに別れを済ましておくんだな。」

決闘の日時を伝え、二人は食堂から去っていった。それを確認してから、帰蝶は信長に言い寄った。

「だ、大丈夫なんですか!？」 信長さんがダンスをしているところなんて、見たことないですよ!？」

「ム？ 『舞踊』 だろう、何とかなる。」

「何とかって！ 貴方が負けたら、私あの変な二人に何をされるか分からないんですよ!？」

「心配するな。お前は堂々としていればいい。」

「……いつも、勝手に決めて……私の事も考えてくださいよ……」

「何か言ったか？」

「何も！」

決闘の承認がおこなわれ、食堂内は盛り上がっていた。

「まくた決闘するんだ、彼。本当……騒ぎを起こす人だね。」

一連の様子を見ていた松永燕は、織田信長を見ながら呟いた。

翌日、体育館には多くの生徒達で賑わいでいた。その大半は女子生徒で、全員活気だっていた。

「凄い活気ですね、何でこんなに賑わいでいるんでしょう？」

「あれ？ 帰蝶ちゃん知らないの？」

体育館のステージ近くで帰蝶は松永燕と一緒にいた。

「帰蝶ちゃんの旦那さんが対戦する二人、女子生徒の間で人気なんだよ。それに、対戦相手の一人『龍造寺隆正』は人気ユニットの『エグゾエル』のメンバーだしね。」

「……大丈夫なんでしょうか、信長さん。」

「敵も考えたよね、『エグゾエル』はダンスで有名な人気ユニット……得意分野で勝負を仕掛けてくるなんて。旦那さんはダンス出来るの？」

「……私はあの方がダンスをしているところなんて、見たことはありません。」

二人が話していると、急に観客の女子生徒達が叫声をあげた。体育館のステージの上に、織田信長の対戦相手の『龍造寺隆正』と『毛利元親』が現れたからだ。二人共制服姿ではなく、ダンスを踊る舞台衣裳に着替えていた。

「待たせたねレディー達！」

「さあ、これから華麗なるダンスをご覧にいれよう。」

女子生徒達がさらに叫声をあげる。もはや此処はアイドルのコンサート会場となっていた。二人はマイクを持ちながら帰蝶の方に体を向ける。

「さあ、シニヨリーナ。俺と初めて行くデート先は決まったかい？」

「既にスケジュールは決めてある。楽しみにしておけ。」

相変わらず変な二人だと帰蝶は内心想った。

「シニヨリーナ、君の旦那は何処だい？　もうすぐ時間だけど。」

「あの人なら『道具を取ってくる』って、さつき出掛けましたけど…」

「フツ…まさか逃げたのではあるまいな？」

「それはないですよ。あの人人が逃げるなんて、あり得ません。」

バンツ！

暫くして、体育館の入り口が開く音がして全員が入り口を見た。

「待たせたな。」

そこには少し大きな箱を持った織田信長がいた。信長はそのままステージまで登り、龍造寺と毛利に向かい合った。

「遅かったじゃないか。逃げたのかと思つたぜ。」

「何故余（オレ）が逃げねばならん？ そんな必要など無いだろう。」

「フツ…嫁を奪われるのを公然の前で晒したくないから…と、私は考えていたが。」

「ほう…笑える冗談だ。貴様等ごときが余（オレ）に勝つつもりか？」

「こつちはもうデートプランも考えてあるんだよ。さて、役者も揃つたし始めるか？」

「そうだな…：：：審判、合図をしろ。」

「…：：：何故わたしがこんな事を…：：：」

審判と呼ばれた生徒がステージ前に立ち、決闘開始を告げた。

「これより！ 1—1 『龍造寺隆正』と同じく1—1 『毛利元親』と、2—7 『織田信

長』の決闘を行う！　審判は――『尼子晴』が務める！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

会場内の生徒達が一斉に声を上げる。

「決闘の対決方法はダンス対決！　ルールは双方が一曲ずつ踊り、会場内にいる全生徒の投票で決める！　皆は良いとおもった方に票を入れてくれ！　投票数が多い方を勝ちとする！　そして龍造寺、毛利ペアが勝った場合、2―7『織田帰蝶』は二人と交際することになる！　双方、何か異論はあるか！」

「無い。」

「無いな。」

「ではこれより決闘を開始する！　先攻は龍造寺、毛利ペア！」

「足引つ張んなよ、毛利。俺がワザワザ教えてやったんだからな。」

「この私にそんな口をきくか。そもそもこの作戦を考えたのは私だぞ？　立場は私の方が上だ。」

「ほらその二人！ 喧嘩しない！」

「全く、これだから下品な奴は嫌いなんだ。言っておくが、最初にデートするのは私だぞ。」

「はあ!? 俺が先だろ！ 先にあの娘口説いたの俺だぞ！」

「作戦を考えた私に決まっているだろう。それに便乗したお前に文句を言う権利はない。」

「あるね！ ダンスをお前に教えたのは俺だ！ イコール俺がいなかったらお前は勝負出来なかったんだ！ 俺が先だ！」

「私だ！」

「俺だ！」

「いい加減にしろ！ 二人共！ 始まらないだろうが！」

仲間割れしている二人を、審判の尼子晴が我慢出来ずに怒鳴った。

「…チームワークが悪いですね、あの二人。」

「聞いた話だと喧嘩仲間らしいからね、あの二人。それより帰蝶ちゃん、彼何持ってきたんだろう？」

「

「さあ……私は何も教えて貰ってませんから……」

ステージ近くにいる帰蝶と松永燕は、信長の持っている大きな箱に注目していた。一体あれをどうするのだろうか。そう思っていると、信長がステージから降りてきて帰蝶達の方へ歩いてきた。

「信長さん、大丈夫なんですか？」

「心配はいらんと言った筈だが？　お前はそこで只見ていればいい。」

「その箱……何なんですか？」

「ム？　『衣装』だ、時間がないから着替えてくるぞ。」

そう言い、信長はステージの裏へ入っていった。

「衣装だって……何だろうね？」

「さあ……自信が{o}ありのようでしたけど……」

暫くして、龍造寺、毛利ペアのダンスが始まった。

二人の踊った曲は、龍造寺が所属しているダンスユニット『エグゾエル』の曲であった。アップテンポの激しい曲に合わせ、二人はキレのいい動きで踊る。

「キヤアアアアアアア！　　龍造寺君、素敵イイイイイ!!」

「毛利君もカツコイイイイイ!!」

二人が踊る度に、観客の女子生徒達から黄色い声援が飛ぶ。時折龍造寺は、観客に向かってウインクや投げキスをした。体育館は女子生徒の叫声で満たされていた。

「(この勝負、龍造寺・毛利ペアはすごく有利だ。彼が勝つには、この観客全員を奪わないといけない。)」

松永燕はステージ上で踊る二人を見ながら、状況を観察していた。

「（此処にいる女子生徒の殆どが龍造寺君のファンだね……多分何人かはサクラも混じっている。この勝負、圧倒的に織田信長（かれ）が不利だ。」

曲が終わり、会場内が拍手と叫声で満たされる。

「フツ…勝ったな。この流れを変える事など不可能だ。」

毛利元親は勝利を確信した。会場内の生徒全員が味方についていると言ってもおかしくない今、お出し信長に勝ち目は無い。そう確信していた。

「……不味いね、この空気。流れがあっちのものだ。」

「……信長さん……」

ステージ近くにいる帰蝶は信長を心配していた。ステージの幕が下がり、龍造寺と毛利の二人が帰蝶達の方へ歩いてきた。

「どうだったかな、シニョリーナ。俺のダンスは？　惚れちゃってもいいんだぜ？」

それは必然な事なんだから。」

「分かるぞ、淑女よ。私の華麗な踊りに心を奪われてしまったのだろうか？」

「……惚れてもいないし、心を奪われてもいません。それに、まだ勝負はついてませんよ。」

「もうついているさ。この状況で、君の旦那が勝てる可能性は限りなく0だけ？」

「その通り、全て私の作戦通り。流石華麗なる私が考えた完璧な作戦。」

その言葉に帰蝶は言い返せなかった。確かにこの状況では、こちらの勝ち目は限りなく0に近い。でも、0じゃない。

「私は……あの人を信じる！」

「では次は後攻！　織田信長の番である！」

審判の声か体育館に響く。ステージの幕が上がり、会場から拍手が鳴る。

瞬間、拍手が鳴り止み会場内が静寂する。誰も声一つあげない。帰蝶も、松永燕も、対戦相手である龍造寺と毛利も。

ステージにいた織田信長は、いつもとは全く違う格好をしていた。

黒を基調とした金の刺繍が施された着物、手には扇子を持ち、いつもは頭の後ろで無造作に纏められた髪は下ろしていて、顔は目元や口元にうっすら化粧がされてある。

『日本舞踊』

今の織田信長の姿はまさにそれであった。

曲が流れる。先程のアップテンポの激しい曲ではなく、琴や三味線が奏でるやわらかな音色が会場に流れる。それに合わせ、織田信長はゆったりと踊る。

美しく、優雅に、まるで小川のように滑らかな動きは、見る者を魅了させた。

誰一人声をあげない。先程は叫声してきた女子生徒達は、織田信長の踊りに見惚れていた。対戦相手である龍造寺と毛利も、織田信長の舞の美しさに言葉が出なかつた。松永燕は全く予想だにしていけない事態にただ呆然としていた。

しかし、今この場で誰よりも驚いているのは、織田信長の妻である帰蝶であつた。

初めて知つた夫の意外な一面。いつもとは違う凛とした表情が、帰蝶の胸をおどらせた。

「美しい…」

対戦相手の毛利がポツリと呟いた。無言で龍造寺も頷く。

勝負が決した瞬間だつた。

勝負は圧倒的大差をつけて、織田信長が勝利した。

会場に来ていた女子生徒のほとんどが信長に投票したためだ。中には龍造寺と毛利に入れる予定だったサクラも、信長に入れていた。

「日本舞踊が出来るなんて、知りませんでした。」

「別に言う必要はないだろう？ あんなもの、滅多にやらんしな。」

決闘が終わり、帰宅する信長と帰蝶。

「でも……『あれ』は少し気の毒でした。」

「負けたのだから『あれ』ぐらい当然の罰だ。」

決闘後、信長は対戦相手の龍造寺と毛利の髪をバリカンで丸坊主にした。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『もう…駄目だ…美しくなかったら、生きていけない…』

まるで世界が終わりを迎えるとも言わんばかりに二人は落ち込んでいた。気持ち悪い二人と思っていた帰蝶も、流石に気の毒になった。

「でも何処で習ったのですか？ あんな本格的な日本舞踊を。」

『『昔』に暇潰しにやっていただけだ。三日で飽きたがな。』

しれっと信長は答えた。その返答に帰蝶は首を傾げる。

「(あんな本格的な日本舞踊、習うにはかなり名の通った名家に行かないと出来ない。でも、愛知県にそんな名家は無かった筈…それに、覚えるのにしたって何年も練習しなくちゃならない…)」

帰蝶は横を歩く信長を見る。

「(……何でもいい。この人は勝ってくれた……私の為に……)」

「どうした？ ニヤついて？」

「何でもありません♪」

「？」

自分の為に頑張ってくれた事を喜びながら、帰蝶は信長の横に並び帰路についた。

Side : —

天神館の二年生教室の廊下を大股で歩く男子生徒が一人。

眉をつり上げ、不機嫌ですと言わんばかりの顔で歩く彼の名は『石田三郎』。織田信長が天神館に転入してから最初に決闘を申し込んだ男である。

彼はあの決闘から数日間気絶しており、今日久しぶりに登校したのであった。彼は今、織田信長がいる2—7の教室に向かっていた。

「許さん、絶対に許さんぞ！　　織田信長！」

あの日から石田は学校中の笑いにされていた。一度も傷つけられず、あろうことかスタミナ切れで倒れて敗北……誇り高い石田には、これ以上ない恥だった。

「次は、今度は負けん！　　必ず貴様を大将の座から引きずり下ろす！」

拳を強く握りしめ、石田は2―7の教室前に立ち、扉を開けた。

S i d e : 織田信長

カチャカチャ

「フム……こうか……いや、こうして……」

織田信長は教室で一人、珍しく真剣な表情で手を動かしていた。試行錯誤を繰り返して、休むことなく動かし続けていると……

カチャンッ

「おお、外れた。」

手に持つ『それ』を机の上に置き、満足な笑みを浮かべていた。

「中々楽しめるではないか、『知恵の輪』とやらは。なあ、帰蝶………ム？　ああ……『居らん』のだったな。」

眩きながら、信長はもう一つの知恵の輪を手を持つ。今日、織田帰蝶は学校を休んでいた。実家にいる父が怪我で入院したらしく、帰蝶は実家の名古屋に帰っていた。

「一人で学校にいるのは久しぶりだな……中学以来だ。」

カチャカチャ

知恵の輪を動かしながら、信長は久しぶりの一人の時間を過ごしていた。

バンツ！

突如教室の扉が勢いよく開けられた。教室にいた他の生徒達は皆驚愕し、入り口に顔を向ける。

「織田信長はいるか……」

そこには石田三郎が憤怒の形相で立っていた。石田は織田信長がいるのを確認する

と、信長の席に一直線に向かった。

「久しぶりだな……」

「……………」

カチャカチャ

「貴様から受けた屈辱、万倍にして返してやる！」

「……………」

カチャカチャ

「っ！　聞いているのかっ貴様!!」

「……………」

カチャカチャ……

信長は知恵の輪をとくのを止め、石田の方へ顔だけ向ける。

「……………誰だ貴様は？」

「っ！」

「今余（オレ）は知恵の輪をといっている最中だ。用があるなら後にしろ。」
カチャカチャ

それだけ告げると、信長は再び手を動かさしはじめた。

「……ふざけるな……貴様は、俺を覚えていないというのかっ……」

石田の声が低く震える。拳は血が出るほど強く握っている。

「知るか、貴様なんぞ。邪魔だ……失せろ。」

石田には目も向けず、信長は知恵の輪をといっていた。

「……ざけるな……ふざけるなっ！　俺は、俺は石田三郎！　貴様と決闘した男だ！」

青筋を浮かべ、今にも血管が破裂しそうなくらい石田の顔は真っ赤になっていた。

「ム？ ……ああ、あの小僧か。余（オレ）に何か用か？」

「もう一度！ ……もう一度俺と決闘しろ！」

バンツ！

信長の机に石田のワッペンが力強く置かれる。それを見て、信長の手が止まる。

「……ほう、余（オレ）との再戦を望むか……貴様はこの間の決闘で、実力の差が分からなかったのか？」

「確かに、俺は貴様に負けた。だがあれは、戦い方が悪かったのだ！」

「つまり……戦い方を改善したので今度は負けんと……くだらんな。」

信長は石田を蔑視する。再び手を動かさそうとした時……

「……俺は貴様に負けて悔しい。貴様に復讐したいとも本気で思っている。……だがそれ以上に、俺は貴様が気に入くわん！」

「……何……」

信長は動きを止め、石田に顔を向ける。

「天神館（ここ）は由緒正しき、伝統ある武士の学校だ！　この学校の代表なる大将に選ばれる者は、誰よりも気高い武士でなければならぬ！　だが貴様は違う……武士

どころか、人としても危うい存在だ……そんな奴が大将など、俺は認めん！」

「……ほう、面白いではないか。」

カチャンツ

信長の手から知恵の輪が落ちる。複雑に絡み合っていたそれは、バラバラにとかれていた。

「では、貴様は復讐の為ではなく……余（オレ）が大将の座にいたことが許せず戦うと……己の為でなく、武士の誇りの為に戦うと……そう言いたいのか？」

「ああ、そうだ。第六天魔王（おだのぶなが）……武士（おれ）は貴様を認めない！」

信長の口角が上がる。石田に体を向け、自分のワッペンを取り出す。

「ちようにど暇潰しがなくなったところだ……遊んでやろう、武士（こそう）。」

互いのワッペンを重ねながら、信長は『笑った』。

S i d e : 織田帰蝶

帰蝶は名古屋市内の病院に入院している義父・信秀の見舞いに来ていた。

「大丈夫ですか？　お義父さん。」

「ああ、大丈夫だよ、足を軽く骨折しただけだから。」

「本当にビックリしたんだよ。階段で足がつくんしたら転げ落ちるんだもの。」

「いや、当然だよね!?　階段で足がつくんなんかされたら、落ちて怪我して当然だよね!?!」

「信長君なら転ばなかったよ?」

「やったの!」 由紀さん、信長にしたの! 足がつくん!」

「ねえねえ、信長君何で来なかったの?」

「はあ…何でも、『父が怪我した程度で何故帰らなければならん』…とのことで。」

「……相変わらずのようだね。というか程度って、僕のこと程度って……」

「そっかあ……確かに信秀君が昔痔になってた時も、笑ってたもんね。」

「ウソおおお!! 初めて聞いたんだけど!」

「(……変わってないな、二人共。)

帰蝶はいつもと変わらない義父母を見て、安心した。入院したと聞いた時はハラハラしていた帰蝶だが、二人の様子を見ていて、杞憂だったと確認した。

「お見舞いにお花を買ってきたんです、花瓶に入れておきますね。」

「ありがとう、帰蝶ちゃん。僕に優しくしてくれるの、君だけだ…」

「むく、私もしてるよ。えい♪」

「ギヤアアアアアア!」　そこ落ちて打撲したところおつ!」

つつきあいをしている二人を見て微笑みながら、花瓶に触れようとした時……

パリンツ！

「痛っ！」

「どうしたの…ッ 帰蝶ちゃん！ 血が出てる！」

「大丈夫です…花瓶がいきなり割れて…」

「大変！ 今絆創膏貼ってあげるね！」

「ありがとうございます…！」

帰蝶は割れた花瓶を見る。触ってもいないのにいきなり割れたのだ。帰蝶は何か嫌な予感を感じた。

「(もしかして…九州で何か…)」

帰蝶は指をしたたる血をぬぐいながら、九州にいる信長のことを思い浮かべた。

2 1

Side : 鍋島正

「ああ……平和だな。」

昆布茶をすすりながら、鍋島正は館長室でくつろいでいた。今日は仕事があまりなく、午前中に終えてしまったので午後からのんびり校内を見て回ろうと彼は考えていた。

「まず花壇の花に水やって……ああそうだ、1—5の授業態度が悪いって聞いたな。後で見に行く………」

バンツ!

「かかか館長! 大変です!」

一人の教員がノックもせず大慌てで入ってきた。その事を注意しようとして鍋島は思ったが、その形相からただ事ではない事が起こったのだと判断した。

「何があつた？」

「け、決闘です！ 生徒が決闘を行うと言いだしたんです！」

それを聞いて鍋島は一気に拍子抜けした。

「何でえ、驚かしやがって。その何処が大変なんだよ。」

悪態つきながら鍋島は飲みかけの昆布茶を飲みほす。

「決闘する生徒が問題なんです！ 決闘するのは、一年の石田三郎と二年の織田信長なんです！」

ピタリッと鍋島の動きが止まった。

「どど、どうしますか館長!? 既に二人は決闘の準備を始め、生徒達は決闘を見ようとグラウンドに集まっています!」

「……教師達を全員、決闘場に集めておけ。『もしもの事』が起こったときは、力付くで決闘を中止させろ。」

「わ、分かりました!」

教員が部屋を出ていくと、鍋島は窓のブラインドを開ける。全部閉じていて気付いていなかったが、グラウンドには大勢の生徒達がいた。グラウンドに設けられた決闘場には、既に石田三郎と織田信長が向かい合っていた。

「あいつ等……また面倒な事起こしやがって……」

鍋島は決闘場にいる二人を見る。

「(石田には悪いが、正直あいつが織田に勝てるとは思えねえ。前は織田の野郎……遊んで』やがったからな……今回はどうする気かね………ん?)」

決闘場の周りを見渡して、鍋島はある事に気がついた。

「何だ？ 今日では連れの嬢ちゃん、いねえのか？」

織田信長の近くに、織田帰蝶がいなかった。ほんの些細な事だが、鍋島は嫌な予感がした。

Side：石田三郎、織田信長

生徒達の喝采が飛び交う中、二人がいる決闘場の中心は不気味に静かであった。

「前より観客が多いな……また醜態をさらす事になるやもしれんぞ？」

「ほざけ。無様な姿をさらすのは貴様だ。その不埒な顔、叩きつぶしてやる！」

「前回は披露がたまった状態でこれになったから負けたんだ！　今度は最初から全力で！」

帯刀しているレプリカの日本刀を抜刀し、信長に構える。刀に纏う電撃は以前よりも増していた。

「……それが貴様の策か……ならば余（オレ）も『コレ』を使うとするか。」

そう言うと、信長は何かを取り出した。『ソレ』を見た瞬間、石田は目を丸くした。

「な、何だソレは!?　何のつもりだ!？」

「見て分かんか?　『刀』だ。」

信長が手にしていたものは、石田が持っているものと同じレプリカの日本刀であった。

「今回は余（オレ）もコレで闘おうと思ってな。遠慮せずかかってこい。」

信長は抜刀し石田に構える。その構えを見て、石田は激昂する。一流の剣士である石田は信長が刀に関して、ド素人だと分かったからだ。

「ふざけるな…貴様、それで俺に勝つつもりか！」

「そうだが？　ほれどうした、さっさとこい。」

茶化すように刀で石田を指す。石田の我慢は限界を超えた。目の前の男は人を馬鹿にするだけでは飽きたらず、剣士を、武士を馬鹿にしたのだ。

「この、不埒者がああああああああ!!」

石田の高速の一撃が信長を襲う。『光龍覚醒』で強化された脚力がだすスピードと、電撃を帯びた刀がくり出す破壊力は一流の武道家でも防げぬものとなっていた。

キンッ!

「な!?!」

だが、石田の剣は信長に受け止められた。それも信長は片手で受け止めていた。

「ぐっ!　　ウオリヤアアアアアアアアアアアア!!」

再び石田は剣をふる。今度は強化された腕力によつて、目にも止まらぬ速さの連撃をくり出した。

キンツ!キンツ!キンツ!キンツ!キンツ!

しかし、それは一撃も当たることにはなかった。全て先程と同様、片手で防がれた。
「フンツ」

ガキインツ!

「!? うおああああ!」

信長のふるった一撃に耐えきれず、石田は吹き飛んだ。地面に激突する寸前で受身をととり、怪我はしなかったが、自身の全力に近い一撃を止められた事に石田は啞然としていた。

「どうした? 改善したのではなかったのか? 何だその様は…?」

「何っ!?」

「それとも……貴様が改善したというのは、やられ様の事か? 成程…確かに改善さ
れているな。『全力の一撃をあっさり止められ、ド素人の剣に負けている』のだから
な。」

『笑い』ながら織田信長は言った。

「ぐほっ！」

石田の剣が弾かれ、がら空きになっていた胴に信長の刀が一閃する。胃の中のものを嘔吐しながら石田は吹き飛ぶ。衝撃が強すぎたのか、受身をとることができず地面に叩きつけられた。

「ぐっ……オエッ！　　げほっ、おのれっ……ぶっ!？」

バギヤアアアツ！

いつの間に近づいたのか。立ち上がろうとしたところを、信長は思いっきり顔を蹴りあげた。海老反りになりながら、石田は鼻や口から血を撒き散らした。

「ハア、ハア……」

「どうした？　　余（オレ）を叩きつぶすのだろうか？」

「殺す気でくるなら、こつちもその気でいくが構わんな？」

いつのまにか、グラウンドに集まっていた生徒達の声が無くなっていった。決闘が始まる前まで彼等の顔は活気に満ちていたが、今彼等の顔から活気は消え失せていた。

「ハア……ハア……ハア……」

「何だ……もう終わりか？」

決闘は既に終わっていた。今行われているのは決闘ではなく、一方的な暴力であった。

石田三郎は怪我をしていない箇所が見当たらないくらい満身創痍だった。

「ハア……ハア……うがああああああああ!!」

石田は再び信長に斬りかかる。既に『光龍覚醒』は解かれていて、開始当初の勢いは無かった。

ブンツ　　ブンツ　　ブンツ

「ぐうっ！　　うぐう！　　うああああ!!」

「何処を狙っている？　　余（オレ）はここだぞ。」

石田の剣は全て避けられる。避けるたびに信長は石田を冷やかす。

「余（オレ）を叩きつぶすのだろうか？　　余（オレ）を倒し、大将の座から引きずり下ろすのだろうか？　　その様では永久に叶わんぞ？」

「フウ！　　ああああああああああああああああ!!」

ガギイイインツ！

「うあっ……」

石田の刀が砕かれる。反動で石田がのけ反ったところを、

ズドンッ！

「ぐふっ!？」

石田の腹部に信長の蹴りが入る。それも蹴り飛ばすのではなく、地面に叩きつけるように踏みつけた。

ズダアアアンッ！

「おげえ！」

衝撃で肺の中の空気が吐き出される。何度も胃の中のものを吐き続けたためか、石田は嘔吐はしなかった。

「惨めだな、小僧。」

「があ、くうっ！」

腹部を踏みつけながら信長は石田を見下ろす。起き上がろうと抵抗する石田だが、満身創痍で体がうまく動かせなかった。

「小僧……貴様は自身のことを武士（もののふ）と言ったな？」

「……？」

「そうそう、以前貴様はこうも言ったな。自分は出世街道を歩くエリートだと……フフ、勘違いにも程があるな。」

「何……？」

石田を見下ろし、信長は告げた。

「小僧……貴様はエリートなどという優れた存在ではない。ましてや武士（もののふ）ですらない。貴様は、ただの蛙（かわず）だ。」

「ただ周りより体が大きかっただけの蛙（かわず）だ。ただ周りより餌を捕るのが上手かっただけの蛙（かわず）だ。ただ周りより鳴き声がデカかっただけの蛙（かわず）だ。」

「貴様は狭い狭い薄汚い井戸の中で育った蛙（かわず）だ。目に写る苔が美しいものだとはき違えて育った蛙（かわず）だ。腐臭を放つ水を美味なるものとはき違えて育った蛙（かわず）だ。ほんの数寸しかない井戸を世界の全てとはき違えて育った蛙（かわず）だ。」

「教えてやろう、蛙（こぞう）……世の中には貴様より体格の大きい蛇が存在する。世の中には貴様より餌を捕るのが上手い蜥蜴が存在する。世の中には貴様より美しい鳴き声を放つ鈴虫が存在する。」

「貴様より優れた存在などごまんといえるんだよ……『井の中の（ちっぽけ）』な『蛙（こぞう）』。」

言い終わる頃には、石田の顔から怒りや憎悪といった感情は消え去っていた。何かを言いたそうに口を動かすが、言葉は出なかった。

「何も知らぬ蛙（こぞう）……もう一つ、教えやろう。」

ガッ

腹部を押さえつけていた足を、石田の『右肩』に移動させた。

ミシツ

乾いた木の枝が軋むような音が、石田の耳に入った。

「狩り（たたかい）に敗れた者は、生きたまま喰われようが、体を半分に千切られようが……『狩られた蛙（はいしや）』は『狩った蛇（しょうしや）』に何をされようが、決して文句は言えんのだ。」

ミシツ、ミシミシツ

音が段々大きくなる。徐々に鋭い痛みが襲ってくる。

「！ つつ！ つつつ！」

これから何が起きるのか、石田は悟った。足をどけようと動かぬ体を必死で動かし抵抗する。青痣だらけの左腕で必死に足を振りほどこうとする。

ミシミシミシミシッ!

だが足はビクともしない。万力のようにゆっくりと踏みつけられる足は、しだいに重さを増していった。

ミシミシミシミシミシミシミシッ!

音がついに観客の生徒達の耳にまで届いた。そして彼等も気づいたのだ、これから起こる惨状に。止めようとする者はいなかった。誰も動けずにいた。生徒も教師も。

皆恐れていたからだ。もしも止めに入ったら、自分も石田のようになるのではないかと。

「や、やめ! やめ……!」

「言っただろう、『狩られた蛙(はいしや)』は何も言えぬと……恨むなら、自分を恨め。『蛇(オレ)』に『汚い声(きばをむけた)』自分にな……!」

ミシミシミシミシミシミシミシミシッ!

必死の形相で抵抗する石田を、『嗤い』ながら信長は踏みつける。音が限界を向かえ、『砕け折れよう』とした瞬間……

「待ってください!!」

観客から一人の生徒が決闘場に上がり、織田信長に声をかけた。信長は足を止め、その方向へ顔を向ける。

「……………何だ、貴様は？」

「それがしは石田さんの友人、『島右近』と申す者。織田信長殿！　もはや勝負はついた、石田さんへの攻撃を止めていただきたい！」

頭を地面にこすりつけ、土下座をしながら島右近は信長に懇願した。

「……………貴様がこいつの友人だというのは分かった……………だが、何故余（オレ）がこいつへの攻撃を止めねばならん？　何故余（オレ）が貴様の言うことを聞かねばならん？」

つまらなそうな表情で信長は訊く。島は顔をあげ、すぎる様に言った。

「貴殿は……………この様なことをして、恥ずかしいと思わんのか!？」

「……………何？」

「自分より非力な相手を容赦無く痛めつけ、抵抗も出来ぬ相手に何度も何度も暴行をくわえる……………こんなもの武士の、否！　人間のすることではない!!」

「……………」

「こんな残忍な事をして、貴殿は何とも思わんのか!？　もし貴殿に人の心があるのなら、今すぐ石田さんを解放してくれ!!」

再び頭を下げ懇願する島。それを見て信長は…………

「……………確かに、こんな事は『人間』のする事ではないな。それはよく分かる、自分が非

道をしている事も理解している。」

「ならば……!」

「だが『それが』どうした？」

ヴァアギイツ!!

乾いた音が決闘場に響いた。

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああ!!」

数秒と待たず、次に石田の悲鳴が響いた。それをまるで音楽でも聞いているかの様に信長は堪能していた。

「人間（きさま）の尺で余（オレ）を測るな。余（オレ）は織田信長、『第六天』より来た『魔王』なり……非道？ 残忍？ そんなもの、魔王（オレ）には当然だ。」

そう言いはなつ信長の顔は、今日一番の『嗤み』を浮かべていた。

「！ ……外道めっ！ もはや黙っておれんっ！」

島は懐に持っていた槍を信長に構え、

「織田信長っ！ 覚悟お!!」

怒り狂った猪の様に、信長に突進していった。

「フフフ、蛙の友は蛙だな……」

突進してくる島に向かい、信長は拳を構えた。

「そこまでだ!!」

大気が揺れる程の怒声がグラウンドに響く。その声の持ち主は、観客の生徒達の間をかき分け決闘場に登った。

「……………貴様は……………」

「あ、貴方は……………! 館長!!」

そこにいたのは、天神館館長・鍋島正であった。

「双方武器を納めい。この決闘は俺の権限で中止とする。」

「! はいっ!」

「ハッ！　　余（オレ）が貴様の言うことを聞くとでも？」

槍を納めた島に対して、信長は鍋島を前にして好戦的な態度をとっていた。

「ほう……『コイツ』を前にしても同じ事が言えんのか？」

「ム？」

鍋島は『一枚の書類』を信長に見せた。

「天神館（ここ）に来た時、テメエが書いた『誓約書』だ。忘れたとは言わせねえぞ？」

織田信長が天神館に転入してきた日、鍋島正は織田信長にある誓約書を書かせた。

『生徒・織田信長は何時、いかなる場所でも館長・鍋島正の言動に従わなければならぬ。』

「テメエも了承した誓約書だ。もう一度言うぜ、この決闘は中止とする。」

「……………」

暫くの間、決闘場に沈黙が発生する。鍋島正、織田信長、両者共口を開かず無音の時間が過ぎていく。

「……………ふん……………」

先に動いたのは織田信長だった。石田を踏みつけていた足を離し、決闘場から立ち去ろうとしていた。

「……………！ 石田さん！」

次に動いたのは島右近だった。石田に駆け寄り、出血している体に応急措置を施していた。

「……………案外あっさり引き下がるじゃねえか。」

「充分『楽しめた』しな……………今回はこれで終いだ。」

側を通ろうとした信長に、鍋島は言った。

「……次はこうはいかねえぞ。今度また同じ事やろうもんなら、俺も容赦しねえ。」

「フフフ、無理はせんほうが良いぞ？ 残り少ない寿命を縮める事になる。」

「大人を舐めるなよ、若僧。テメエとはぐぐつてきた死線が違えんだよ。」

「……フフフ、フフフハハハハ！」

鍋島の言葉に信長は笑う。

「何が可笑しい？」

「フフフ、いや……確かに、余（オレ）と貴様では『ぐぐつた死線』が違うな。」

「？」

「フフフ、それより良かったのか？ 『誓約書（あれ）』を『もう使つて』。」

信長が鍋島とかわした誓約書。信長はそれに一つだけ条件を出していた。

『誓約書（あれ）』が使えるのは『一度きり』だぞ？　ここで使って良かったのか？」
 「ここで使わなくて、何時使うんだよ。あのままだとダメエ……『二人共殺していただろう』」

「さてな……想像に任せる。」

それだけ言つて織田信長は校舎に戻つていった。道中多くの生徒が彼を恐れ道を開けた。

「……たく、俺としたことが……『あんなの』を天神館（ここ）に招き入れるとはな。……石田、すまねえ……全部俺の責任だ。」

鍋島は被っている帽子を強く握つた。もつと自分のはやく織田信長（あいつ）の正体を見抜けていたら、こんな事にはならなかつた。鍋島は自分を責める。自分の判断ミスで一人の生徒の『人生』を『終わらせて』しまったのだから。

『第六天魔王』は天神館に大きな恐怖（つめあと）を刻み込んだ。

S i d e : 石田三郎

目に写るのは見知らぬ天井だった。

あの後石田三郎は救急車に運ばれ、市内の病院で緊急手術をうけた。体中包帯を巻かれていて、麻酔が残っているのか体が動けなかった。

「……………」

自分は何をしていたのだろう。石田の記憶は曖昧だった。いつの間にか気を失っていて、気づけば病院のベッドの上になっていたのだ。

「……………」

目だけ動かし、『右肩』を見る。そして思い出す。気を失う前の最後の記憶を、織田信長（あいつ）の言葉を。

「小僧……貴様はエリートなどという優れた存在ではない。ましてや武士（もののふ）ですらない。貴様は、ただの蛙（かわず）だ。」

「ただ周りより体が大きかっただけの蛙（かわず）だ。ただ周りより鳴き声がデカかっただけの蛙（かわず）だ。」
「貴様は狭い狭い薄汚い井戸の中で育った蛙（かわず）だ。目に写る苔が美しいものだとはき違えて育った蛙（かわず）だ。腐臭を放つ水を美味なるものとはき違えて育った蛙（かわず）だ。ほんの数寸しかない井戸を世界の全てとはき違えて育った蛙（かわず）だ。」

「教えてやろう、蛙（こぞう）……世の中には貴様より体格の大きい蛇が存在する。世の中には貴様より餌を捕るのが上手い蜥蜴が存在する。世の中には貴様より美しい鳴き声を放つ鈴虫が存在する。」

「貴様より優れた存在などごまんといえるんだよ……『井の中の（ちっほけ）な『蛙（こぞう）』。』」

「……………」

言い返せなかった。それまでの自分の生き方を完全否定されたのに、石田三郎は言い返せなかった。

……ツウ……………

石田の頬に『熱いもの』が流れ落ちる。拭いたくても麻酔が効いていて腕を動かせなかった。『それ』は止まることなく溢れはじめた。止めようと思っても、どうにもならなかった。

「…………くしょう…………ちく、しょう…………！」

その日、石田三郎は人生で初めて『悔し涙』を流した。

22

Side : 石田三郎

最初、何を言われたのか分からなかった。

「今……何て、言ったんですか……」

「……本当に、気の毒な事だが……」

目の前にいる小太りの医者らは心底申し訳なさそうに俺に告げた。

「私達は持てる全ての技術を使い、君を治療した……しかし、現在の医学では、君の右肩を治す事は『不可能』なんだ。」

これまでの人生、剣と離れたことは一度もなかった。幼い頃から修行にあけくれ、ここまで腕を上げてきた。

俺にとって剣は人生そのものだった。

「君の右肩は……もう二度と剣をふることは出来ないだろう。」

世界が、音をたてず崩れていった。

S i d e : —————

織田信長と石田三郎の決闘から数週間が経った。あれ以来、織田信長に声をかける者は一人もいなくなった。生徒も教師も、皆織田信長を恐れた。

休み時間

いつもは賑やかな2—7の教室は授業中のように静まっていた。皆小言で喋り、信長の周りから離れていた。

「……いい加減機嫌を直したらどうだ？」

「……………」

ため息をつきながら信長は膨れっ面をしている帰蝶に言った。ここ数週間、帰蝶はずつと不機嫌だった。原因はあの決闘、自分がいない間にまた人を傷つけた信長に、帰蝶は怒っていた。

「何度も言ったが、あの決闘はお互い怪我をするのを了承した上での決闘だったのだ。それに元々は向こうからふっかけて来た決闘……余（オレ）が責められる道理は全く無い。」

「……それでも、やり過ぎです。」

名古屋に帰る時、無理矢理にでも信長を連れて行くべきだった。そうすれば誰も傷付かなかったのに……帰蝶は自分を悔いていた。また信長に意味のない暴力をさせた事に。

「過ぎた事は忘れろ。過去を変える事など出来やしない……それにしても、天神館（こ

「この連中は予想外に期待外れだな。」

「? 何がですか?」

「てつきり小僧（やつ）の仇を討とうとする者が現れると思っていたのだが、皆無だ。」

再び信長はため息をつく。先程とは違い、信長の顔は退屈そうだった。帰蝶は少し驚いた。いつも笑みを絶やさないう彼が、倦怠感を漂わせている事に。

「天神館（ここ）に来た時は武士（もののふ）が通う場と聞いて、期待していたのだがな。」
「期待って……何を?」

「武士（もののふ）を育成する場と聞いて、この連中は皆武を重んじ、『弱きを助け強きを挫く』……そんな連中ばかりだと思っていたのだがな……それがどうだ、全員小僧（やつ）の二の舞を恐れて何もしてこん……腑抜けばかりだ。」

「……『戦国時代』じゃないんですから……今は『昔』とは違うんですよ。」

帰蝶は日常会話をするように、何気なく答えた。

「……………そうだな。『昔』とは違う……その通りだな。」

「？」

ガラガラ……

「織田信長！　　織田信長はいるか！」

「ム？」

「あれは……生徒指導部の先生ですね。」

「あ、いたいた。織田信長、今すぐ生徒指導室に來なさい。お前に話がある。」

「何だ、『あつた』のか生徒指導部。いつこうに呼ばれんから天神館（ここ）には無いのかと思つていたが……」

「……ありますよ、何処の学校にも。まあ……貴方が『今まで呼ばれなかつた』というのは珍しいですけど。」

今日の日付は5月10日。

信長と帰蝶が天神館に転入してきてから約一ヶ月が経つていた。小・中・高、全て入学『二日以内』に必ず生徒指導部に呼ばれていた信長にとって、一ヶ月近く呼ばれなかつたのは奇跡に近かつた。

「まあ十中八九、決闘（あれ）の件だろうな。」

信長は席を立ち、扉で待っていた教師について生徒指導室に向かった。

「さて、自分が何故ここに呼ばれたのか……分かるかね？」

「決闘について、だろう。それしか有るまい。」

生徒指導室には信長の他に教師が三人いた。部屋にはソファアークがテーブルを挟んで置かれてあり、信長は教師の一人と向かい合い話していた。

「先日の決闘の件だが……君を咎めるつまりは無い。『双方了承済みの決闘』という事で、館長は『石田三郎への暴行は罪には問わない』とお決めになった。しかし、我々は館長の決定に納得していない。君は石田三郎の容態を知っているかい？ 君に負わされた彼の右肩の負傷は完治が出来ず、彼は二度と剣をふる事が出来なくなったのだよ。」

ギリリ……

冷静を装っているが、内心腹が煮えくり返っているのを信長は察していた。

「……で？　貴様等は余（オレ）を呼び出してどうする気だ？　小僧（やつ）の仇討ちでもするか？」

口角をつり上げ口で三日月をつくりながら、信長は教師達に向かい『笑っていた』。

「いや、我々は君に石田三郎へ謝罪してほしいのだ。」

「……………はっ……」

織田信長の顔から『笑み』が消えた。

「我々は教師だ。君みたいに力で訴えはしないさ。一言でもいい、『すまなかつた』と……石田三郎に謝罪してほしいんだ。君が謝罪してくれば我々も今回は引き下がる。」

「……………謝罪?……………余(オレ)が…謝罪だど?……………」

「そうだ。できれば今日の放課後にでも……………」

ガツ!

「!……………つあ、かはあ……………!」

「なっ!?! き、君! 何を……………!?!」

信長は向かい合っていた教師の首をつかみ上げた。周りにいた教師達は信長を止めようとして、動きを止めた。

「貴様等……あろうことか……この魔王（オレ）に謝意をしめせと要求するか……！！」

彼等は動けなかった。『動きたくても、体が震えていうことをきかなかった』。

織田信長が憤怒の形相をしていたからである。

織田信長の形相を見て、織田信長から漏れ出す『殺気』を感じて、彼等は恐怖していた。

「……っ……っ……っ……」 ピクピク…

「………フンッ！」

ズガシヤアアアンツ！

つかみ上げていた教師を信長はおもいつきり壁へ投げ飛ばした。

「ガッ！…ゲホッ、ゴボッ……」

「だ、大丈夫ですか!？」

「き、君は何をしたか分かっているのか!？」

君は教師を……」

「黙れ……」

「「ヒッ!!」」

信長の威圧に縮みこみ、ガタガタと震える教師達を『ゴミを見るような目』で信長は見下ろしていた。

「……なにが天神館だ……なにが『武士(もののふ)を育てる学舎』だ……これほど失望させられたのは『初めて』だぞ……」

そう告げると、信長は部屋を出ていった。信長が退室した後、教師達は恐怖から解放された安堵からか気絶した。

その日、それ以降織田信長は一度も笑わなかった。

S i d e : 石田三郎

病院の個室で石田三郎は窓の景色を呆然と見ていた。

「……………」 ソツ……………」

石田は左腕で右肩を触る。

ズキツ

「……………」もう……………」出来ないのか?……………」

鋭い痛みが石田に確信させる。自分は二度と剣をふれないのだと……………」

ガラガラ……………」

病室の扉が開かれる。石田が顔を向けると、

「右近……」

「石田さん……」

そこには幼馴染みの島右近がいた。島は申し訳なさそうな顔をして石田のベッドの横に座った。

「すいません、石田さん。石田さんの右肩を治せる病院を探したのですが……」

「……右近……」

石田は思う。昔から右近は自分に良くしてくれた。今も自分の為に必死になって病院を探してくれている。

こんな自分の為に……

「右近……俺は……本物の馬鹿だな……」

「石田さん？」

俯きながら石田は島に言った。

「俺より強い奴などいくらでもいる。当たり前前の事なのに、何故気付かなかつたのだろうな……織田信長（あいつ）の言う通りだ……俺は、蛙だ。」

「石田さん……」

「少し考えれば分かる事だった。織田信長（あいつ）が俺より強い事なんて……調べればすぐ分かる事だった、なのに俺は……一人で勝手に突っ走って……ろくに情報を得ようともせず、……俺は自分で駄目にしたんだ、俺は自分で剣の道を閉ざしたんだ！」

「……………」

「決闘なんてしなければ！　こんな『ちっぽけなプライド』なんて持たなければ！

俺は……俺は……………！」

石田は自分自身が情けなかつた。枯れ果ててしまったのか涙は出なかつた。

もし石田三郎を知る者が、今の彼を見たら驚愕するだろう。常に勝気な彼の面影は何処にもなかつた。

「……それがしは石田さんを幼い頃から見てきました。」

島の言葉を石田は静かに聞いていた。

「貴方は子供の頃から自分より体の大きい相手であろうと、大人であろうと勝負をしかけていましたね。」

「……………」

「石田さん。それがしは何故貴方が織田信長と決闘したのかは知りません。ですが、一度負けたにも関わらず再度挑戦したからには、相応の理由があったのだとそれがしは思います。」

その言葉に石田は顔を上げる。

「俺が…戦った理由…………？」

「ええ。貴方は無闇に人を傷つける人ではない。余程我慢できぬ理由があったのでしょ

う。」

石田は自分に問いかける。

そういえば俺は何の為に決闘したんだ？

負けたのが悔しかったから？

恥をかかされたのが許せなかったから？

俺は何故織田信長（あいつ）と決闘しようと思ったんだ？

.....

「そうだ……俺は……」

S i d e : : —

翌日

いつもと変わらぬ通学路を、いつも通り信長と帰蝶は歩いていった。

「……………」

「あの、『顔』スゴく恐いですよ…?」

「……………だから何だ?……………」

ただ一つ、織田信長の機嫌が悪い事以外は。

昨日生徒指導室に呼ばれてから織田信長はずっと不機嫌だった。笑みは消え失せ、目は睨みだけで人を殺せそうな程鋭くなっていた。

『あの魔王・織田信長の機嫌が悪い』

その事に天神館中の生徒が恐怖していた。今も道行く生徒達は殺気を撒き散らしながら登校する信長を見て、目を合わせないよう遠ざきながら歩いていた。

「(本当にどうしたんだろう……こんな不機嫌な信長さん、初めて。)」

帰蝶は心配になった。昨日の生徒指導室で一体何があったのか信長は教えてくれなかった。

帰蝶はもう一度信長に何があったのか訊ねようとした……………

「織田信長ああ!!」

平凡な朝の通学路に木々が揺れる程の大声が響きわたった。通学路を歩いていた生徒達は全員声のする方へ顔を向けた。その中には信長と帰蝶も含まれていた。

「……………貴様は……………何か用か? 小僧?」

声の主は石田三郎だった。道行く生徒達は皆石田の格好に目を奪われた。

石田の格好は天神館の制服姿ではなく、病院の患者が着る病衣に身を包み、顔や腕・足には包帯がぐるぐる巻き付けられてあり、右肩はギプスで固定されていた。

まさしく『病院から抜け出て来た』と言わんばかりの姿で、石田は信長の前に向かい
たつた。

「……病院ならばこの先には無いぞ。どけ、通学の邪魔だ。」

どかなければ殺すともいうような雰囲気、信長は言う。石田はほんの少し怯みながらも、その場を一步も退かなかつた。

「……俺は……貴様に『壊された』俺の右腕は……もう二度と剣をふる事が出来なくなつた。剣は俺の人生そのものだった……今の俺には、もう何も無い……」

肩を震わせながら石田は語る。そして……

「……だが、それでも俺は！　　貴様が『大将の座にいる』のが許せない!!」

石田は顔を上げ覇気のコもった声で、活気の宿った目で信長に宣言した。

「織田信長！　　もう一度俺と決闘しろ！　　ただし、今すぐじゃない！　　貴様が卒

業するまでの約2年、この間に俺は強くなる！」

「俺の右腕は死んだが、まだ『左腕』が残っている！　　この腕で、俺は『新しい剣』を創
る！」

「だから俺と約束しろ！　　貴様が卒業するまでの間に、俺ともう一度決闘すると!!」

それは宣戦布告だった。ボロボロの体で、満身創痍の体で、二度も大敗した相手に石田三郎は高らかに再戦を申し込んだ。

信長は目を丸くしてそれを聞いていた。

「石田三郎……いいだろう。お前の宣戦布告、了承した。」

「時、場所、全てお前が望むようにするがいい。余（オレ）は何時でもお前の挑戦を受けよう。」

信長は口角をつり上げ、『笑いながら』答える。いつもの勝気で高慢な織田信長がそこにいた。

「……必ず貴様を超えてみせる。武士の誇りに賭けて！」

「フフフ……『楽しみ』にしているぞ。」

石田は信長の横を通り過ぎ、反対方向に歩いていった。

「フフフ…『いる』ではないか、武士（もののみ）が。」

ニヤリと口角をつり上げ、信長は帰蝶に言った。

「帰蝶……天神館（ここ）は……思っていた以上に『楽しめる』ぞ。」

まるで『遊園地に来た子供のように』、織田信長は『笑っていた』。

「(よつぽど嬉しかったのかしら…『子供みたい』にはしゃぐなんて…でも、機嫌が直つてよかった。)」

夫の知らない顔に驚きながらも、信長がいつもの様子に戻って帰蝶はホツとしていた。

S i d e : 石田三郎

織田信長に宣言布告してから暫く歩いていると、前方に見知った者達がいるのに石田は気付いた。

そこには島右近他、今年の一年生でトップ10と呼ばれている石田のクラスメイト達であった。

「石田さん！」

「右近達か……さっきの話、聞いていたか？」

「ああ、聞いてたぜ。でも本気か？ あの魔王ともう一度戦おうなんて？」

「ゲホッ……言っちゃ悪いが、勝てる見込みはほぼ0だぞ。」

「うむ、わたしもそう思う。あれはハッキリ言つて、常識を超えている。」

「しかしもう向こうは止められんぞ。最悪我慢出来なくなつて襲つてくるやもしれん。」

「……ああ、分かつてる。今の、いや『今まで』の俺じゃ勝てない事は……」

クラスメイト達の言葉を石田は素直に聞き入れた。その事にクラスメイト達は驚きを隠せなかった。いつも自分勝手に人の話なんて聞かない石田三郎が、自分達の言葉を聞き入れている事に。

「……俺は強くならなければならぬ。だが、俺一人では無理だ。『一人で突っ走つては何も出来ない。』……俺は織田信長（あいつ）から学んだ。」

石田は全員の前に立ち、頭を下げた。

「頼む！ お前達の力を貸してくれ！ 織田信長（あいつ）を倒すために、俺に協力してくれ!!」

「……………」

暫しの沈黙が続いた後、最初に口を開いたのは島右近であった。

「…それがしでよろしいのなら、喜んでこの身を貸しましょう！」

「うむ！ 『大友』も力を貸すぞ！」

「なんやなんや、えらい丸くなったなあ。ま、そういうのウチは嫌いやないよ♪」

「フツ…仕方ない。この華麗なる私の頭脳を貸してやろう。」

「何で上から目線なんだよ？ お前も少しは丸くなれよ。」

「喧しい、丸坊主。」

「お前だって丸坊主だろうが！ 安物のウィッグなんか付けやがってよ！」

「黙れ！ これしかなかったんだ、しょうがないだろう！」

「そこ！　今いい感じの雰囲気だっただろ！　　何でブチ壊すんだ!？」

「……ハハハ、それでこそお前達らしい。」

いつもと変わらぬメンバーに石田は笑った。そして再度全員の顔を見て、石田は宣言した。

「……入学して暫く経ったが、ようやく俺達は団結した。俺達で、『第六天魔王（おだのぶなが）』を倒す!!」

「『おう!!』」

後に西日本最強と呼ばれる集団、『西方十勇士』が誕生した瞬間であった。

23

2008年

6月4日

天神館

放課後

グラウンドで石田三郎他、西方十勇士のメンバーが特訓に明け暮れていた。

「鉢屋流手裏剣術！ 『無限手裏剣』！」

十勇士の一人『鉢屋壱助』が無数の手裏剣を石田に目掛けて投げる。

「くっ！ なんのおおおおおお！」

キンキンキン！

手裏剣を避けながら、かわしきれない手裏剣を『片手で構えた日本刀』で石田は弾いていた。

「俺がいるのお、忘れんなよ？ 『オイル・ボンバー』！」

石田が手裏剣に集中している隙をついて、十勇士の一人『長曾我部宗男』はオイルでヌルヌルになった体で石田にタツクルをしかけた。

「！ フンッ！」

ズシヤアッ！

長曾我部のタツクルを上半身を上手く使ってかわし、二人から距離をおき体制を整えようとしたところを、

「まだ動きが『あまい』な……『ライフル・クロウ』！」

ズドドンッ！

「グハア……！」

後方から音も無く近づいてきた十勇士の一人『大村ヨシツグ』の強力な拳打が石田の背中にはいる。石田は数メートル地面を転がり滑っていった。

「……っ、くそ、最後の一撃が……見えなかった……！」

「いや、よく対処していると思うぞ。気絶させるつもりだったんだが……」

「まさか一ヶ月ちよいでここまで『かたち』にするとはなあ……やるじゃねえか。」
「うむ。修行の成果は確実に実っている。」

攻撃を対処できなかった事に悔いる石田に、三人は励ましの言葉を送った。

石田が『打倒・織田信長』を誓ってから、退院後石田は西方十勇士のメンバーと朝夜特訓を行っていた。

織田信長に破壊された石田の右腕は、怪我は治ってもやはり再起不能であった。そこで石田は残った左腕で『片手の剣』を修得しようと考えた。

まだ怪我也癒えきっていない状態にも関わらず、石田は毎日ぶっ倒れるまで特訓をしていた。

「ハア……ハア……まだだ、この剣はまだ……『あいつ』どころか前の俺にも届いていない

……もう一回だ！　もう一回今のをやるぞ！」

何度も何度も転び泥だらけになった体を起こし、石田は三人に向かって構えた。

「……ハア、これまた『夜中に石田おぶつて帰る』パターンか？」

「だろうな。あと一回どころかあと十回はやるだろう。」

「それがし達も修行につきあうと約束した身、最後までつきあおう。」

石田の熱意に押された彼等は、再び石田に向かい合った。

S i d e : 織田信長

「フフフ……実に美しいな。」

石田達の特訓の様子を屋上から見物している者がいた。石田の右腕を壊した張本人、

織田信長であった。信長は石田達の様子を見て、嬉しそうに『笑っていた』。

「目標に向かい切磋琢磨し、希望を絶やさず仲間と共に道を歩む……今この学園において石田（やつ）程『武士（もののふ）』の名が似合う者はいまい。」

信長の石田への評価はかなり変わっていた。二度も自分に負けたにも関わらず、その闘いの中で四肢の一つを失ったにも関わらず、恐怖に屈つせず自分を倒すと面と向かって宣言してきた石田を、信長は『武士』と認識し、一目おいていた。

「……………そう思わんか？ 『女狐』？」

信長は自分の後方に向かって話した。屋上には信長以外人が見当たらなかったが、信長は後ろの屋上の入り口に向かって言った。

「……………アハハ、バレっちゃったか。」

暫くして、入り口のドアの近くから一人の女生徒が顔を出した。その生徒を信長はよく知っていた。妻の帰蝶とよく会話している生徒、『松永燕』であった。

「どうして分かったの？　　気配は完全に消せてた筈なんだけど。」

「ハツ…尻尾を木々の間からはみ出しておいてよく言う。余（オレ）に何の用だ？」

「いやいや、別に用なんてないよん♪　　たまたま屋上に君がいて、ビックリさせようかな〜って思つて隠れてたんだよん♪」

信長の質問に松永燕は笑顔であっけらかんと答えた。

「惚けるな。最近余（オレ）のまわりを嗅ぎまわっているのは貴様だろう？　　気付かれ

ていないとも思つていたか？」

「……ぜ〜くんぶお見通しつて訳か……なら隠す必要もないね…」

松永燕の顔から笑みが消えていた。

「ここ最近信長の事を調べまわっている人物がいた。信長はその人物が目の前にいる松永燕であると突き止めていた。」

松永燕が信長に近づいていく。信長と松永燕は正面に向き合い、二人の間の空気はピリピリとはりつめていた。

そして暫く無言が続いた後、松永燕は信長に向かい手を合わし……

「お願い！ 君の可愛い奥さん、私に貸してくれないかな!？」

「……………ハ?……………」

2008年

6月6日

福岡市内―録音スタジオ

休日

織田信長と帰蝶は福岡市内にある音楽スタジオを訪れていた。

「と、いうわけで…帰蝶ちゃんには私と一緒にこの『納豆ソング』を歌ってほしいんだ！」
「は、はあ……」

スタジオのロビーで二人は松永燕から詳しい話を聞いていた。

何でも松永燕は父が作った借金返済の為に、『松永納豆』なる商品を開発し売っているらしい。そして彼女は『松永納豆』がより広く世間に知れわたる為に『納豆アイドル』になり宣伝しているそうなのだ。

そして今日このスタジオで『松永納豆』を広める為の宣伝曲『I LOVE ねばねばくらいふ』という曲を録るらしいのだが、その曲を帰蝶と一緒に歌いたいと願ってきたのだ。

「一応旦那さんから許可とつてあるけど…帰蝶ちゃん、引き受けてくれるかな？」
「あ、はい。構いませんけど……（何でこの人承けたんだろう……）」

帰蝶は隣でカフェオレを飲みながら座っている信長を見て疑問に思っていた。この

人は他人のお願いを聞くような人じゃないのに……帰蝶は不思議に思った。

「じゃあ早速録音に入ろっか♪ これ楽譜なんだけど、どうかな？」

「(こ、これを歌うの!?) は、はい……すごく、個性的な歌ですね……」

渡された楽譜を見て帰蝶は内心その歌詞に驚いていた。

その後、帰蝶は燕と一緒に録音室に入った。初めてみる本格的な録音機器を帰蝶は好奇の目で見ていた。

「それじゃあ、出だしから録っていくんだけど……帰蝶ちゃんはここここね♪」
「わ、分かりました。」

機器のスイッチが入り耳につけたヘッドフォンから曲が流れる。

「ねばねばパワーで、今日も張り切っていきましよう♪ らぶねばくらいふ♪」

「い、一日一食 家族の健康を約束……」

「はい！ スト〜ップ！ 帰蝶ちゃん、もっとノリノリに歌わないと。」

「ご、ごめんなさい！ 私、こういうの初めてで……」

「いいよいいよ、最初は皆そういうもの♪　じゃあ、もう一回いこ♪」

緊張する帰蝶を励ましながら、二人の録音は進んでいった。

「いや〜！　ほんとありがとね！　こっちは大助かりだよ〜！」

「別に慈善事業で引き受けた訳ではないがな。帰蝶（あいつ）にも息抜きが必要だろうと思っただけだ。」

録音室の後ろの控え室で、信長と松永燕の父『松永久信』はガラス越しに録音室で歌っている二人を見ていた。今回のこの話をもちかけたのは何を隠そう松永久信であった。

「それにしても君の奥さん美人だね！　燕ちゃんもかなり美少女だと思っけど、君の

奥さんはまさに大和撫子って感じだね。テレビに出てる女優顔負けだよ。」

「当たり前だ、あいつは余（オレ）の女だぞ。」

松永久信の世辞を信長は余裕な笑みで返す。娘から話は聞いていたが、想像以上に織田帰蝶が美人だった事に松永久信は興奮していた。

「ねえねえ！僕考えたんだけどさ……この曲のCDのパッケージ、君の奥さんと燕ちゃんのツーショットにしようよ！　最初は有名なイラストレーターにキャラクターでも描いてもらおうと考えてたんだけどさ、そっちの方が売れると思わない!?　『二人組納豆アイドル』って売りで、どうかな!？」

松永久信は頭の中でコスチュームを着て納豆ソングを歌う帰蝶と燕を想像していた。二人共かなりビジュアルが良いので、これは売れると新たなビジネスに松永久信は計画をねっていた。

「……………そうして織田信長（オレ）と関係を築き、裏社会の連中とつながろうという魂

胆か。」

「……………な、何の事かな。僕はただ……………」

「裏の連中とつながって借金を帳消しにしようとしても企んだのか？　それとも……………貴様が開発している『平蜘蛛』とかいう機巧（からくり）の資金の調達でもするつもりだったのか？」

「！」

松永久信は驚愕した。借金の事は娘から聞いたのだろうか、自分が今開発している武器『平蜘蛛』については娘にも詳しく教えていないのに、目の前の青年がその事を知っていることに。

「裏社会をあまり舐めないほうがいいぞ。貴様等が考えている以上に、裏はあらゆる場所に根を生やしている。……………貴様等のくだらん企みを、この余（オレ）が気付いていないでも思ったか？」

信長の鋭い視線が松永久信を固まらせる。控え室が静寂に包まれる。

「一つ教えてやろう……貴様等が何をしようか余（オレ）には関係のない事だ。帰蝶を納豆アイドルとやらにするのも、機巧（からくり）資金を稼ぐのも好きにするがいい。……だが……」

『第六天魔王（オレ）』をダシに使おうとするからには、骨一つとてこの世に残らんと思え。」

尋常でない程のプレッシャーが松永久信に押しかかる。松永久信はこの時初めて織田信長が何者なのかを理解した。

今回の話をもちかけようとした時、娘の松永燕は止めたほうがいいと止めてきた。織田信長をあまく見ない方がいいと。彼はその時まで知らなかったのだ。織田信長がどういう人間かを。

そして、彼は今織田信長という人間の性質を身をもって知ったのだ。自分が利用しようと考えていた相手が何者なのかを。

「…ハ、ハハ。君、本当に燕ちゃんと同じ年なの？

僕より年上に見えるんだけど

……」

「同じ年だ……『一応』はな。」

とても娘と同じ年に見えない青年を見て、松永久信は恐怖していた。目の前の青年から、今まで会ってきた人間にはなかった圧倒的な何かを感じていた。

ふと気がつくと録音室に移すと、既に二人の録音は終了していた。

帰り…織田信長を見送った後、松永久信は全身から汗を吹き出して腰をぬかした。

「やっぱり駄目だったみたいだね。だから無理だつて言ったじゃない、おとん。」

「いくら何でも怖すぎるよ彼！　僕、殺されるかとおもったよ！」

「そんなくよくよししない。ここで終わりつてわけじゃないんだから。」

「分かつてるよ。……でも本当怖かったああああ！　チビりそうになったもん！」

情けなく泣く父を見て松永燕は呆れていた。

松永久信が今回の事を実行しようとしたきっかけは、松永燕にあった。松永燕は織田信長が一体何者なのか調べていく内に、ある噂に行きついた。

『日本の裏を牛耳る暴力団組織達をまとめ、その頂点に君臨している』。

最初は信じなかったが、織田信長と石田三郎の決闘を見て彼女はその噂が真実だと確信した。決闘中に見せた織田信長の不気味な笑みはその噂を真実だと確信させた。

織田信長が裏とつながりがある。その事を久信に話したのが今回のきっかけだった。

「(…………こつちも、駄目だったな。)」

手に持つCDを見て、松永燕は気落ちしていた。先程帰蝶と二人で録った曲が入ったCDであった。

「一緒にやりたかったな、納豆アイドル。」

録音スタジオの帰り道、信長と帰蝶は市内の大通りを歩いていった。

「よかったのか？　女狐（やつ）の話は断つて。」

「ええ、私にアイドルなんて似合いませんから。」

帰蝶の返事に信長は内心そうだろうと納得した。録音後、帰蝶は松永燕に『断りの返事』を告げていた。松永燕は最初はしぶったが、帰蝶の意思を尊重し「気が変わったらいつでも言いに来てね」と約束していた。

「燕さんみたいに明るいい性格じゃありませんから……もつと、それに相応しい人とやった方が燕さんの為にもなると思いますから。」

「……そうだな、『こんな歌』ではアイドルとやらは無理だな。」

信長はポケットから携帯電話を取り出した。すると……

『いくち、にくち一食！　なくとお、とおく！』

携帯電話から歌声が聞こえてきた。それは帰蝶のよく知る、というより先程自分が歌っていた歌声だった。

「！　な、何で……え、何でそれ持っているんですか!?!」

「ああ、貰ったのだ。しかし、これは酷いな。帰蝶……お前音痴だったのか?」

携帯電話から流れる歌声はお世辞にも上手いとは言えないものであった。

「ちち、違います！　それは一番最初に録ったものだから、慣れてなかったからそうなったんです！　というより、それ消してください！　何でよりもよって一番駄

目なのを貰ってくるんですか!?!」

「上手いのを貰ったところで面白くなかろう？　しかし、予想以上の収穫だったな。

こんなものが手に入るとは。」

その言葉を聞いて、帰蝶は謎が解けた。何故信長が今回の話を引き受けたのかが。

「まさか……『この為』に引き受けたのですか!？」

「ああ、そうだ。お前の慌てふためく姿が見たいと思つてな。正直これは予想外の収穫だった……で、何をする？」

「貸してください！ その携帯電話！ 削除しますから！」

帰蝶は信長の持つ携帯電話を奪おうと手を伸ばす。が、信長は手を高く上げ帰蝶の手が届かないようにする。

「暴れるな。……ほれ、お前が暴れたせいだ。間違つて『送信』を押してしまった。」

ニヤニヤと面白そうに信長は笑う。

「そ、送信つて誰にですか!? まさか……」

「無論、母にだ。ああ、何て事だ（棒） 間違つて名古屋の馬鹿共にも送信してしまつた（棒）」

「! ……な、何してくれるんですか!!」

その後、帰蝶の恥ずかしい歌声は名古屋中の知り合いに広まったという。

24

シャアアアア……

朝日が射し込む風呂場にシャワーの音が静かに流れる。

「ふう……」

髪の水気をきり、風呂場から一人の青年が出てきた。青年は体についた水滴をタオルで拭い、アイロンでしつかりシワ伸ばしした制服を身につける。

「後はこれを……」

青年が取り出したのはワックスだった。指先につけたワックスをドライヤーで乾かした髪に塗布する。そして、最後に青年は洗面所に置かれてあった香水を体に吹き付けた。

「準備はできた。いざ……まいるー！」

鞆を持ち、青年は玄関のドアを開く。今日、彼は戦いに出ようとしていた。

青年の名は『島右近』。天神館に通う高校一年生。

今日この日、一つの戦いが起ころうとしていた。年に一度、男の存在意義を賭けた壮絶な戦い。

その聖戦を、人は『バレンタインデー』と呼ぶ。

2008年 2月14日

『バレンタインデー』

年に一度、男達がそわそわしたり、変にカッコついたりする日である。男達はこの日、無駄に声を大きくして自分の存在をアピールしたり、女子に積極的に接近しようとする。

青年、島右近もその一人だった。普段は多少寝癖がついている髪も今日はワックスでガチガチにかためられ、うっすら生えていた髭は綺麗に剃られてあり、体からは普段絶対つけない香水の匂いがしていた。

島右近……クラスメイトや彼の友人達は彼をこう呼ぶ。

『おっさん』と……『老け顔』と……

島右近……彼女いない歴〓年齢の男。彼はモテたかった。彼女が欲しいとはいわない、しかし自分も男として価値がある事を証明したかった。そして彼はこの聖戦に参加する事にした。

「(男の価値はチョコレートなどで決まるものではない……しかし、貰いたい。一つでもいい、自分だつてチョコレートを貰う権利はある!)」

『男は顔じゃない』……心の中でかたく宣言し、彼は学校へと足を進めた。

バレンタインデーとは恋人達が愛を誓う日であり、武を学ぶ天神館もそれに違わず甘いムード一色になっていた。恋人がいる者はチョココレートでお互いの愛を確認しあい、恋人がいない者もチョココレートに想いをのせ告白したりと、今日の天神館は笑顔と甘い匂いで満たされていた。

そんな中、島右近は教室の自身の席で一人静かに疑問をいただいていた。

「(何故だ? 何故誰も近寄って来んのだ?)」

今日、島が学校に訪れてから島に近づく生徒は一人もいなかった。皆島を変なものでも見るような目で見ていた。

「(何故だ? 確かにあの雑誌に書いてある通りに行っている筈なのに……)」

島は昨日買った男性ファッション雑誌を思い返していた。そこに書いてある通りに、髪を整え香水で体を色づけしたというのに、誰も自分の側によろうとしない事に疑問をいただいていた。

「あの、龍造寺君！　これ、受け取って！」

「私のも！」

「毛利君……これ……」

「私の気持ちです！　受け取ってください！」

島がチラリと視線を移すと、そこには多くの女子生徒に囲まれている龍造寺と毛利がいた。

「こちら、順番を守ってくれよシニヨリーナ達。心配しなくても全部貰うぜ。」

「フツ……この華麗なる私に相応しい美しいラッピングだ。」

女子生徒達は二人に綺麗なラッピングが施されたチョコレートをプレゼントしていた。その光景を見て島は奥歯を噛み締める。

「(くっ！　　男は顔じゃない……だが、この待遇の差は何なのだ！)」

島は納得がいかなかった。二人共同じ男というカテゴリーの存在なのにこの差は一体何なのか？ あのと二人と自分、そこにどんな違いがあるというのか？

「おい、島。何一人で難しい顔してるんだよ。」

「ふむ…只でさえ老けている顔がさらに酷くなっているぞ。」

蟠りを抱えている島に龍造寺と毛利がチョコレートを両手いっぱい抱えて話してきた。

「……お前達か。どうやら、今日を充分満喫しているようだな。」

「まあ、これもハンサムに生まれた者の宿命ってやつさ。」

「フツ…美しい私はあまりチョコレートは好まんのだがな。」

ならばそのチョコレートを今すぐ焼却炉に捨ててこい。島は心の中で叫んだ。

「(うわあ…こいつ何張り切ってるんだろ…) つつても、今年はいつもより少ないけどな。」

「何をしたいんだ、この老け顔は…… 私もだ。まあ、殆どの女子が『あっち』に行っているからな。」

「ん？ 『あっち』とは？」

「グラウンド見てみ。」

龍造寺の指差すグラウンドに目を向けてみると……

「石田く〜ん！ 私のチョコレート、受け取って〜！」

「キヤアアア！ 石田君、こっち見て〜！」

「ちよつと押さないでよ！ 私が先に渡すんだから！」

「何よ、偉そうに！ 先に並んでたのは私よ！」

「……ええええい！」

喧しい！

俺は今特訓中だ！

話なら後にしろ！」

「キヤアアア！ 私に言ったのよ！」

「違うわ、私よ！」

「んがああああ！ 何なんだお前達はあああああ！」

グラウンドには一学年全員の女子生徒がいるのではないかというくらい、集まっていた。彼女達の視線の先には、朝の特訓をしている石田三郎の姿があった。

「ああああ！ 分かった！ 後で全部貰ってやるから、今は特訓の邪魔をしないで

くれ！」

「「キヤアアアアアアアアアアアア!!」」

「……石田さんは、相変わらずモテているようだな。」

「ああ……前からファンクラブも出来てたしな。」

「それに石田の性格がまるくなつたのも影響しているな。以前までのあいつなら、貰う

事など絶対しなかつたらうに。」

教室からグラウンドを見ていた三人は同時にため息をつく。

石田三郎はもとから女子生徒に人気があつた。その人気はさらにはね上がったのは石田が織田信長に敗れてからだつた。きつい性格はまるくなり、それまで破り捨てていた石田宛のラブレター等もきちんと呼んで返事をしていた。(返事はいつもお断りの返事である。)

それが影響してか、校内の石田の人気は凄まじいものとなつていた。

「(……昔から石田さんはチョコレートを貰つていたな。いつも隣にそれがしはいたが、貰つたためしは一度もない。一体何が違うというのだ! 顔か!? 顔なのか!?)」

グラウンドの光景を見て、島の中の蟠りは更に強くなつた。

「石田も凄いいけど、『上』も凄かつたな。」

「ああ、恐らく殆どの女子生徒が『向こう』にいったのだろう。」

「ん? 『向こう』? 『上』?」

龍造寺と毛利の会話に島が入り込んだ。

「いったい何の事だ？ 『上』とは？」

「『上』だよ、『上』にいるだろう？ チョコレート石田以上に貰ってそうな奴。」

「正直、あの量は目を疑ったがな。」

天神館 2-7

教室内で、織田信長は目の前の物体を前にに憂悶していた。

「……毎年思うのだが、『これ』ほど不毛な事はないと思わんか……」

「そうですね……」

「余（オレ）にはお前という妻（そんざい）がいる事を知っておきながら、何故渡してく

るのだ？　余（オレ）には理解出来ない。」

「そうですね……」

「……先程から何が気に喰わんのだ？」

「別に……」

「……今年こそは貰わんだろうと思っていたのだがな……」

信長は目の前の物体を見る。高く積み上げられたそれは莫大な量の箱であった。そして、全ての箱から甘いチョココレートの匂いがしていた。

「……何処のどいつだ、バレンタインデーなどというふざけたもの創ったのは……」

「チョココレートを貰った男性が言う台詞とは思えませんね。」

「……何だあれは？　それがしは幻を見ているのか？」

「気持ちには分かる。スゲーよく分かる。俺でさえあんなに貰った事ねえからな。」

「……本当に現実にあるのだな。チョココレートの貰いすぎで机にタワーが出来るとい

のは。」

2-7の教室を廊下から島、龍造寺、毛利の三人は見ていた。織田信長の机の上にはチョコレート箱で出来た高さ30cmを超える山が出来ていた。

「何故だ？ 何故あの者がチョコレートを……」

「そりゃな…性格はあれだけど、見た目はモデルとかアイドルが裸足で逃げ出すくらいレベルだしな。それにあいつのファンクラブだってあるみたいだぜ。何だっけ？」

『信長様にぶたれ隊』だったっけ？」

「『信長様に踏まれ隊』じゃなかったか？ まあ、この学校は変人が多いらしいからな。」

島右近は思う。何故あんな人として最低の位置にいるような輩がチョコレートを貰い、何故自分一つも貰えないのかと。彼のわだかまりは秒単位で強くなっていた。

「クンクン……龍造寺、お前香水変えたか？」

「いや？ お前じゃないのか、この匂い。……てことは……」

「ん？」

龍造寺と毛利の視線が島に向けられる。

「……島、お前香水つけてる？」

「え？ ……あ、あの、多分今日寝坊したから何かと間違えて……」

「お前……スツゲエ香水くせえんだげど。」

「え？」

「何つけてんだ？ 多分それ中年のオバサンがつけるやつだぞ。」

「え？」

「あと、ワックスつけてんのか？ その頭……気持ち悪いぐらいにガチガチでテカってるんだげど。」

「え？」

「それとお前……髭剃るついでに眉毛も剃ったのか？ 普段床屋でしか剃らない奴がぶ

きつちよに剃るから、ただでさえキツかった目付きがさらにキツくなってんぞ。」

「え？」

「まったく…普段オシヤレをしない奴が無理してするからそういう風になる。クラスの女子達もお前を見てドン引きしていたぞ。」

「……………え？…」

放課後、教室で一人島右近は真っ白に燃え尽きていた。彼は今日、結局一個もチョコレートを貰えなかった。

「……………いいのだ…男の価値は……………チョコレートで決まるものでは……………ない……………」

そう口では言うが、彼の顔からは活気が消え失せていた。死んだ魚の様な目で虚空を見続けるその様は例えるなら、一等賞の宝くじを持っていたのに誤って捨ててしまった

様といえはいいのだろうか。

島右近は自分の存在価値が分からなくなっていた。

「……………それがしの価値とは……いったい……………」

ガラガラ……………

島が意気消沈しているところ、教室に誰かが入ってきた。島は顔を教室の扉の方に向けて……

「おお、島！ やつと見つけた！」

「『大友』？」

そこには同じ西方十勇士の一人『大友焰』がいた。

「さつきから探していたのだぞ。皆に聞いたら「教室で死んでいる」って言うからどうしたのかと思ったぞ。」

「……………そうか、迷惑かけてすまん。……………それで、それがしに何か用か？」

「ああ、そうだ。ほら、『これ』。」

「ん？……え？」

大友は島に小さな袋を渡した。

袋の中には小さなチロルチョコがいくつか入っていた。

「友達に聞いたたら、今日は日頃お世話になってる人にもチョコレートを渡すそうなんだ。島にはいつもお世話になっているからな。急だったから購入のチョコレートだが、いつものお礼だ。」

「……………お……お……」

島は手の中にある確かな感触に感動していた。それは龍造寺や毛利、石田や織田信長が貰っていた綺麗なラッピングが施されたチョコレートではなかった。手作りのチョコレートでもなかった。

しかし、島は感じていた。小さなチロルチョコから感じる大友の感謝の気持ち。

想いのこもったチョコレートを。

おまけ

「うぷっ！ …もう、食えんぞ。」

「頑張ってください。ほら、お茶です。」

「ああ、ズズズ……ム？ この茶葉、良い茶葉だな。どうしたのだ？」

「私からのバレンタインプレゼントです。毎年チョコレートを貰ってウンザリなされたので、こういう物の方が喜ぶかと思ひまして。」

「……フツ……お前には敵わんな。」

「フフフ……さあ、頑張ってください。後125個、完食してくださいね。」

「……今なら苦瓜ですら食える気がする……」

初めて『それ』が『楽しい』と感じたのは何時だったか。

……そうだ、確か……八つの頃だった。いつものように『城下』に遊びに行つたときだ。その日偶々他国から流れてきた賊に出会い、そいつ等が余（オレ）を拐おうとした。運が悪かった……それしか言い様がない。賊達はよりにもよつて『この余（オレ）を拐おうとしたのだ。』

余（オレ）には『最強の矛』と『最硬の盾』があつた。まず賊の一人の腕を『ねじき切つた』。鮮血を撒き散らしながら悲鳴を上げる様は家畜を思わせた。その後一人、二人、三人と次々『人間だったもの』が足元に転がつた。

そのときだ……初めて『壊す』事が『楽しい』と感じたのは。いびつに『壊れた』賊達を見ていると、心が踊つた。自然と口角が上がつた。

余（オレ）は、自身の最高の愉悦を見つけたのだ。

それからだ。余（オレ）はあらゆるものを『壊し』始めた。特に余（オレ）が享受したのは、『貴族』や『領主』などの『権力を持った人間』を『壊す』事だった。奴等の高慢な面が泣き崩れる様が最高だった。ふんぞりかえって偉ぶっている奴等が土下座し、命乞いする様が滑稽だった。

そして何よりも、奴等の顔が絶望に染まる様はこの上ない至福だった。

いつしか余（オレ）は『第六天魔王』と呼ばれ、恐れられた。初めてその渾名を聞いたとき、これ程余（オレ）に似合う渾名はないと思った。名付けた奴は天才なのだろう。『魔王』……その通りだ。

命乞いする者を……恐怖で身動きとれぬ者を……微塵も躊躇なく一辺の情けもかけず、何より己の享樂の為だけに『破壊』しているのだ。余（オレ）が『魔王』でなければ、この国の住民は全員聖人と言っても過言ではない。

余（オレ）が戦の目的を『享樂』に置き換えたのは、『今川の阿呆』を殺した時からだった。当時『今川』は絶大な力を誇っていた。その力に溺れていた『今川の阿呆』はあ

ろう事か、『第六天魔王（オレ）』の領地を侵攻してきた。

……余（オレ）は見たなくなった。奴の絶望するその瞬間を。

余（オレ）はまず考えた……どうすれば奴を恐怖で震え上がらせるかを。余（オレ）は奴をギリギリまで侵攻させた。そして奴が安心しきったところを狙って強襲した。突如の強襲に奴の軍も対処できなかつた。次々と失われていく戦力を見て、奴は焦り恐怖していた。

「ままた待て！　ままた磨を殺せば、磨の同盟国の者達が黙つてはおらぬぞ!」

「……ほう……そうか……で？」

「っえ？」

「だから何だ？　それがどうした？　余（オレ）には関係ない。余（オレ）はただ……

貴様の『絶望に染まった面』を見たいだけだ。」

「!!　たまた助けつ……そうじゃ！　磨を逃がせば、そちを特別に磨の腹心にしてやるぞ！　そそそれに褒美もやろう！　金でも女でも何でも、だから磨をつ！」

「……………」

「悪くない話じゃろう!!　そちもこんな田舎の国主で終わりたくはなからう!?　そちも武士として名を残したいであらう!?」

「……………確かに、いい話だ。」

「！　そ、そうじゃろう！　なら……………」

グチャツ

「『だから』？」

「え……………」

「余（オレ）は『第六魔王』・『織田信長』…………余（オレ）が求めるのは『破壊』、『殺戮』、『地獄』だ。そして生憎と余（オレ）が今欲しているものは……………」

「……………かあ……………や、死にた……………く……………」

「ああ…………『その顔』が見たかったのだ。」

この日より『織田信長（オレ）』の名は全国に広がり、全ての人間は余（オレ）を恐れ
た。

いったい幾つの人間を『壊した』のだろう。男も女も子供も老人も身分も関係なく……余（オレ）の進む道には虫一匹いかなかった。

いつしか余（オレ）は『天下統一』に最も近い存在になっていた。

多くの武人達が憧れ追い求めた『天下の椅子』は、数えきれない程の亡骸で出来ていた。

『あいつ』が余（オレ）の前に現れたのは何時だったか。

そいつは今まで会ってきたどの武士（もののふ）よりも弱く、ちっぽけな奴だった。

あいつは弱いにも関わらず余（オレ）に突っ掛かってきた。余（オレ）は間違っていると……余（オレ）のことが許せないと……奴は面と向かって余（オレ）に言ってきた。

余（オレ）は取り合えずあいつの腕を『壊した』。今まで余（オレ）に意見してきた輩は数多くいたが、どんな輩も一度『壊せば』余（オレ）に恐怖し、口も聞けなくなつた。あいつもそうなると思っていた。あいつもその程度の存在と思っていた。

だが、あいつは再び余（オレ）の前に立ちふさがつた。四肢を『壊され』ながら、確固たる決意を目に宿し余（オレ）が間違っていると再び説いた。

あいつに興味を持ち始めたのは何時だったか。

余（オレ）はどうすればあいつが恐怖するか考えた。たとえ残った四肢を全て『壊しても』、公然の前で辱しめても、あいつは決して『おれなかつた』。

余（オレ）は考えた。あいつ自身は幾ら痛め付けたところで決して屈しない。ならばあいつ以外から、あいつの大切なものから『壊せば』あいつも絶望するのではないかと。手始めに余（オレ）はあいつの家族を皆殺しにした。あいつの領地に住む民も、あいつに仕えていた家臣達も。

余（オレ）はあいつから全てを奪った。それを聞いた時のあいつの崩れ落ちた様は、これまで見た何よりも心を踊らせた。

あいつが兵を引き連れ、余（オレ）を討とうと侵攻してきた。余（オレ）が『本能寺』で休息をとっていたところを、あいつは襲ってきた。寺に火を放ち逃げ場をなくし、屈強な武人達を余（オレ）に襲わせた。

もしこれが『普通の人間』に対してならば有効だったであろう。あいつの唯一の誤算

は、余（オレ）を見誤った事だ。

余（オレ）には力があつた。余（オレ）には生まれもつて『最強の矛』と『最硬の盾』があつた。武人達は一人残らず原形がなくなるまで、『壊した』。そしてあいつも……

「ハア……ハア……」

「残念だつたな……どうやら此処で朽ちるのは貴様のようだな。」

「ハア……まだ、終わっていない！ 私はまだ……戦える！」

「……何故だ？ 何故貴様は立ち上がる？ 今床に倒れ、意識を手放せば楽になる

というのに……何故貴様はまだ諦めない？ 何故貴様はまだ……余（オレ）に屈しな

い？」

「……諦めろだと？ ……ハハハ……確かに今諦めれば楽になるだろう。意識を手放せば苦痛から逃れられるだろう。立ち上がらなければ私はこれ以上苦しまなくてすむだろう。」

「だが……たとえ四肢が全て切り落とされようと、たとえ全身の骨を砕かれようと、たと

え…何度この身を『壊されようと』……………私は『第六天魔王（きさま）』を、断じて認めはしない！」

「罪の無い者を苦しめる悪党を野放しにしておけるか！ 武士の誇りを蹂躪し楽しむ愚者を許しておけるか！ 己の享楽の為に命を奪う『魔王』を、認めてなるものか!!」
 『第六天魔王』・『織田信長』！ 私は屈しない！ 私は諦めない！ 私は何度でも立ち上がる！」

「私は貴様を…………倒すつ!!」

「……………」

こんな奴は初めてだ…………不思議と口角がっつり上がる、不思議と胸が高鳴る。

『壊したい』…あいつを、滅茶苦茶に『壊したい』…………!!

寺の炎が強くなる。熱が体から力を奪う。

体から止めなく血が溢れ出る。何度も『壊してきた』から分かる……この出血量、『助からない』。

『負けた』？ 余（オレ）が？ 織田信長（オレ）が？ 『第六天魔王（オレ）』が

？

何故だ？ 余（オレ）には『最強の矛』が、『最硬の盾』があつたというのに……全てあいつに『砕かれた』。弱くて、ちっぽけなあいつに……

何故だ？ 何故余（オレ）が負ける？ 余（オレ）は『第六天魔王』だ……余（オレ）が武士（もののふ）なんぞに……

……ああ、そうか……そういう事か……

「……フフ……フフフ……フハハ、フハハハハハハ!!!」

何て事はない……単純な事だった、当たり前前の事だった……

「これが！　これが余（オレ）の最後か！　『第六天魔王』の最後か!!」

真紅の炎が余（オレ）の体を包み込む。不思議と痛みはなかった。炎は何時までも燃え続けた。

織田信長（オレ）という存在が消え去っても……

何故余（オレ）があいつに負けたのか……当たり前前の事だった……

余（オレ）は………

「……さん……ながさん……信長さん、朝ですよ。」

「……………ん……………『夢』……か……………」

妻の帰蝶の声で信長は目を覚ました。既に朝日は昇りきっており、窓からは通勤する人々が見えた。

「今日はやけに早く起こすのだな……眠くてしかたない。」

「もう、明日から『新学期』ですよ。いつまでもお休み気分でないでください。」

「ム？」

信長はカレンダーを見る。昨日まで菜の花が印刷されていた日付用紙は、桜の印刷されたものになっていった。

「そうか……もう此処に来て一年が経つ頃か……」

「そうですね……時間が、スゴく短く感じますね。」

帰蝶の言葉に信長は同感した。

信長と帰蝶が天神館に転入してから一年が経とうとしていた。今年で信長と帰蝶は高校三年生になる。そして……

「(石田(あいつ)との約束も、後一年をきった訳か……)」

「そういえば信長さん。」

「ム? 何だ?」

「さっき夢かっっておっしやいましたけど、どんな夢を見てたんですか?」

信長さん、ス

ゴく『嬉しそう』に寝てたんですよ。」

「……………『昔』の夢だ。懐かしい……………遠い遠い『昔』のな……………」

「?」

信長は夢をふり返る。そういえば石田はあいつに似ていたな……………信長は『かつての好敵手』と『今の遊び相手』を重ね合わせる。二人はとても似ていた。何度『壊そう』とも立ち上がり、確固たる信念を目に宿しているところなどそっくりであった。

「(石田よ……………お前は成ることが出来るかな…あいつの様に、『第六天魔王(おれ)』を倒

す存在（それ）に成ることが………」

信長は祈っていた。石田三朗が信長自身無意識に求めている『存在』になるところを。

キャラクター設定3

石田三郎

- ・『西方十勇士』のリーダーにして最強の男。
- ・プライドが高く、自らこそが至高の存在だと思っていたが……
- ・織田信長に心身ともに『破壊』され、自信と右腕（武士としての機能）を失った。
- ・自分の浅はかさを後悔し絶望しかけた時、幼馴染みの島に「何の為に戦ったのか」を問われ自分の戦う目的を再確認し、打倒・織田信長を宣言する。
- ・原作とは違い高慢ちきな性格はまるくなり、仲間思いの良い奴になった。他人に対する態度も変わり、元々あつた石田のファンクラブはかなり増えた。

— 武器 — 軽量化されたレプリカの日本刀

— 流派 — 我流

織田信長に右腕を『破壊』され、それまで培ってきた剣術が出来なくなつた。そこで石田は残つた左腕で戦う『片手の剣術』を考案した。その為、片手でも十分刀を操れる

ように軽量化されたレプリカの日本刀を使っている。

—技—

『光龍覚醒』

氣を全身に集中しパワーアップする技。髪が金髪になり、刀に電撃が纏う。威力は高いが発動までに時間がかかり隙が出来てしまうのが欠点。さらにこの技を使うと寿命が縮むらしい。

『光龍覚醒・改』

織田信長に敗れた後、石田が『光龍覚醒』を改良しあみだした技。腕や足に必要な分だけ氣を集中させ、氣を集中する時間を短縮し、氣の消費も大幅に削減した。また、全身に氣を集中させていないので寿命が縮むこともなくなった。

織田信長との決闘後、石田の戦闘スタイルはスピードに特化したものとなった。『光龍覚醒・改』の修得により、氣の扱い方も以前にくらべ上手くなり氣の総量も増えた。『壁を超えた実力者』にはまだ届いていない。後一步のところまできている。

この作品における『主人公のライバル』にあたるキャラクター。でも主人公よりこいつの方が主人公扱いってどういうこと？

島右近

・石田三郎の幼馴染みであり、『西方十勇士』の副リーダーにして全員のまとめ役。槍を武器に戦う。

- ・石田の事は子供の頃から尊敬している。
- ・顔が年齢のわりに異様に老けている。渾名は『おっさん』、『老け顔』。
- ・石田と一緒によく修行するので、『西方十勇士』の中で三番目に強い。
- ・驚くほどモテない。

原作とたいして変わらないキャラクター。ちなみにバレンタインに大友に貰ったチヨコレートが人生最初にして最後に貰ったチヨコレート。

大友焰

- ・『西方十勇士』の特攻隊長。大砲を武器に戦う。
- ・花火屋の娘で、大砲マニア。
- ・原作と違いチームが仲良しなので嬉しい。
- ・天神館で唯一、島右近にチヨコレートをあげた存在。

原作とたいして変わらないキャラクター2。ただし、原作ほど東の連中を嫌っていない。理由は石田に「どんな相手でも油断したり、卑下にはいけない」と言われたか

ら。

長曾我部宗男

- ・『西方十勇士』最強の攻撃力をほこる巨漢のオイルレスラー。
- ・豪快な性格で、故郷の四国を愛する郷土愛にあふれた男。
- ・原作と違い性格のまるくなつた石田を気に入っており、石田の修行に積極的に手伝っている。
- ・島と違いモテる。(彼女もいる。)

原作とたいして変わらないキャラクター3。実はバイじゃないかと噂されており、石田との修行でもよく体を近づけてくる。

毛利元親

『西方十勇士』きつてのナルシスト。西国一といわれるほどの弓使いで、天下五弓にもカウントされている。

・原作と違い龍造寺とそれほど仲が悪くない。口喧嘩はよくするがむしろ仲は良好。
・美しいものが大好きで、たとえ勝負に負けても「美しかったら別にいい」と思っている。が、それでも負けるのは悔しいと思っっている。

・一度織田信長に丸坊主にされている。その間学校にはウィッグをつけて登校していた。

原作とは違い、そこまで美しき至上主義じゃない。この作品では主にギャグ担当。

尼子晴

- ・『西方十勇士』最速をほこる？　かぎ爪を武器に戦う。
- ・原作と違い性格のまろくなった石田を気に入っている。
- ・シヨタ。

原作とたいして変わらないキャラクター4。たまに島が「もう男でもいいか………」と
いうような目で見ている。

鉢屋壱助

- ・『西方十勇士』の便利屋でもある忍。忍術や手裏剣を武器に戦う。
- ・生涯童貞をかかっている。
- ・原作と違い性格のまるくなつた石田を気に入っており、石田の修行に積極的に手伝っている。
- ・バレンタインにチョコレートを買っている。(大友以外にも)

原作とたいして変わらないキャラクター5。クラスの女子からチョコレートを貰い、どうすればいいか島に相談したところ睨まれた。

宇喜多秀美

- ・『西方十勇士』二人目の女子。ハンマーを武器に戦う。
- ・お金が大好きで、金次第で意見を変える。
- ・原作ほど金にがめつくなく、仲間に関する事ならたとえ何億だされても動かない。
- ・「お金を使いたくない」という理由でバレンタインにチョコレートをあげなかった。

原作とたいして変わらないキャラクター6。

大村ヨシツグ

・『西方十勇士』のサイバー担当。

・病弱と言っているが、実はかなりの実力者。強さは『西方十勇士』No. 2。

・原作と違い性格のまるくなった石田を気に入っており、石田の修行に積極的に手伝っている。

・原作では『西方十勇士』真の実力No. 1だったが、石田に抜かれた。しかしその事を気にしている様子はなく、むしろ石田が強くなった事を嬉しく思っている。

・こいつもバレンタインでチョココレートを貰っている。(大友以外にも)

原作と違って病弱設定はなくなっている。東西交流戦では実力を出して戦う。石田が一番修行をつけたのはこいつ。石田の事は弟子のように思っている。

・『西方十勇士』一のイケメン。人気ユニット・エグゾエルのメンバーで、十勇士の広告塔的な存在。

- ・暇さえあれば女を口説き、それがハンサムに生まれた自分の務めと思っている。
- ・原作と違い毛利とそれほど仲が悪くない。口喧嘩はよくするがむしろ仲は良好。
- ・一度織田信長に丸坊主にされている。その間学校に帽子をかぶって登校していた。
- ・島の天敵。

原作と違って仲間思いのところがある。この作品では主にギャグ担当。バレンタインでは島に何回か殺されそうになった。(その際毛利もターゲットになっていたが、鉢屋や長曾我部が助けてくれた)

鍋島正

・天神館の館長にして、武神・川神鉄心の弟子。

・織田信長を天神館にスカウトした人。

・後に織田信長の本性を知り警戒する。自分の判断ミスで石田の右腕を再起不能に
てしまったと悔いている。

・石田が再び織田信長に決闘を約束し、仲間とともに切磋琢磨しているのを嬉しく
思っている。

大体この人のせい。ちなみにこの人が信長と戦ったら二分で負けます。

松永燕

- ・織田信長のクラスメイトで織田帰蝶の友達。

- ・織田信長の正体を独自のルートで探り警戒している。が、その事を織田信長にバレている。

- ・織田帰蝶に納豆アイドルにならないかと誘っている。帰蝶と一緒に歌いたいという思いは本心であった。

- ・原作とは違い二年生の三学期に川神学園に転校している。

原作と設定が違っていて、『平蜘蛛』の開発援助で川神学園に転校したのではなく、父の仕事の都合で転校した設定になっている。二年生のうちに転校したという事は、東西交流戦で信長と戦うという事。(予定)

〈番外編〉

第27回天神館大体育祭

10月10日

赤黄に葉っぱが染まった季節。秋真っ盛りのこの時季。日本にはいろんな『秋』がある。

食欲の秋、読書の秋、芸術の秋、そして……

スポーツの秋。

「……というわけで、これより第27回天神館大体育祭を開催する！」

天神館館長・鍋島正の開催宣言が雲一つ無い青空に木霊する。グラウンドに集まった総勢600名を超える生徒達は喝采と拍手で返事をする。

「生徒全員もう知っていると思うが、改めて大会の説明をする！ 赤組、白組、青組、

黄組の全学年混合の4チームに別れ各種目ごとに対戦してもらおう！ 最終的に最も

成績の良かったチームを優勝とする！

なお、優勝チームには褒美として『学食

一ヶ月無料券』をチーム全員に与える!!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

生徒達は有り余る士気を鼓舞させた。

S i d e : 織田信長

「フフフ…なんとまあ、暑苦しい連中だな。」

「嬉しそうですね、信長さん。」

「嬉しいさ。余（オレ）は今高揚している。久しく面白い余興が無かったからな…フフフ

……」

「（うわあ…全然ときめかない笑顔…）」

任侠映画に出てくるヤクザの様な笑みを浮かべている信長を見て、帰蝶は弱冠顔をし
かめた。

「ヤッホー、帰蝶ちゃん！ 一緒にガンバ…つて…うわあ…スツゴい悪そうな笑顔

しているね、彼。」

「燕さん。ええ、頑張りましょう。」

「うん……ねえ、旦那さん大丈夫？」

「んでいるんじゃない……」

もしかして体育祭メチャクチャにしようとか企

「フッフ、大丈夫ですよ。あの人『お祭り』の時は大人しいですから。」

「そうなの？」

「ええ。なんでも「祭りは祭りの規則にそつてこそ楽しめる」との事で……ですから今日は大丈夫ですよ。」

S i d e : 西方十勇士

「ムウ……まさか十勇士が綺麗に別れるとは。」

「だが手加減は無用、お互い全力を尽くし競いあおう。」

「……なんでお前と一緒なんだよ……」

「それは私の台詞だ。私の足を引っ張るなよ。」

「まあ、何処のチームにも十勇士がいるんや。食券ゲットは間違いなしや。」

「そうだな……ところで……」

『さあ！　いよいよ始まりです、第27回天神館大体育祭！

実況は天神館館長の

鍋島正館長と私』

『鍋島だ。全員気合い入れて頑張れよ。』

『ハイ！　　どうやら私の名前は出す必要がないようなので省かせていただきます！

さあ！　　早速第一種目にいききたいと思います！　　最初の種目は『借り物競走』です

！　　』

実況の声とともに係員がグラウンドで準備を始めた。

『ルールの説明をします。参加する生徒は、二人一組で係員が設置した用紙に書かれた人物や物を誰よりも早くゴールまで持ってきてください。さらに、今回の借り物競走はただの借り物競走ではありません！　　途中で様々な障害物が設置されてありますので、参加する生徒はそれらを乗り越えてゴールまで来てください！』

「まさかいきなり十勇士同士で対決とはな。」

「手加減しねえぜ……毛利、龍造寺！」

「フン……結果は決まっている。この勝負は我々が勝ちを取らせてもらう。」

青組のレーンにいた二人を除いて。

「フハハハハ！ 動けまい！ これぞ華麗なる私の完璧な作戦！」

「昨日の夜に掘っておいたんだよ！ アバヨ、間抜け共！」

『これは意外な展開だあああああ！ 毛利・龍造寺ペア、他の参加生徒を落とす穴に

引っかけ独走だああああ！ しかし、この競技には様々な障害物が設置してあります

！ 二人は切り抜ける事が出来るのでしょうか!?!』

毛利と龍造寺が走るレーンの先には竹槍や鉄球等の障害物が夥しく設置されていた。

「ハッ！ 『この程度』の障害物、我々にはハードルを飛び越えることに等しい！」

「それでも西方十勇士の一員だ！ 舐めるなよおおお！」

二人は眼前に迫る障害物を次々とかわし、借り物リストがある場所までたどり着く。

「よし！ これで勝ちだ！」

「何が来ようと、俺達に借りられ無い物はないぜ！」

二人はバラバラに置かれた借り物リストの一つを手に取り、何が書いてあるか確かめる。

『織田信長（手を繋いで）』

「……………」

「……………」

「……………いけよ……」

「は？」

「お前行けよ……………譲ってやるから……………」

「いや私は……………遠慮しておく……………」

「遠慮すんなよ。お前、やりたがってたじゃん。行けよ。」

「いや私さっきの障害物の所で足首を挫いてな、お前が行け。」

「すまん、俺も障害物の所で鉄球に背骨強打されてな。お前行けよ。」

「いやいやすまん、実は私障害物の所で竹槍に刺されてな。お前が行け。」

「いや嘘つけ！　血い出てねえじゃん!!　　つうかお前竹槍なんて触れてもねえだろ
うがー！」

「それならお前も鉄球かわしていただろう!!」

「うるせえ！　先に嘘ついたのお前だろ！　　お前が行け！」

「ふぎけるな、お前が行け！　『あいつ』のどころになんぞ行きたくない！」

「え？　何？　お前ビビってんの？　　恐いの？　　漏れそうなの？」

「恐くなどない！　ただ嫌だから行きたくないだけだ！　　お前が行け！」

「ビビってんじやねえか！　俺だって行きたくねえよ！　　連れて行く代償にまた頭

丸刈りにされたらどうするんだよ!　　お前が行け！」

「ふぎけるな！　丸刈りにされたくないのは私も同じだ！　　やっと生え揃ったとい

うのに！　　お前が行け！」

「お前が行け！」

「お前が行け！」

「お前が……」

「……………」　　ピクピクっ…

その後も競技は続き、第27回天神館大体育祭は凄まじいものとなった。天神館特有の独特な競技が生徒達に襲いかかり、勇猛な生徒達はそれに向かい一心不乱に突き進む。

その様子を織田信長は……

帰蝶が作った弁当を食べながら酒を飲み、観戦していた。

「ハハハ！　　実に愉快。これ程の余興は久しぶりだ。」

「……………ねえ、帰蝶ちゃん。彼、競技出ないの？」

「さあ……………信長さん。競技には参加されないのでですか？」

「何故余（オレ）が参加せねばならん。見世物とは見て楽しむもの…それに余（オレ）が参加する程の余興ではないしな。」

「そう、ですか…（一緒に二人三脚出たかったな…）」

体育祭は順調に進んでいき、4チーム接戦の状態で最終競技に入った。

『さあ〜！ 第27回天神館大体育祭！ 残る競技も後一つとなりました！ 最

後の競技は『レース』です！ 参加生徒は競技が開始する前にクジを引いてもらいま

す。そのクジに書かれた乗り物に乗って、天神館の外周を一周してもらいます。途中、コース上には様々な障害物が設置されており、クジで引いた乗り物でレースの進行が有利になったり不利になったりします。』

『この競技は高得点が得られる競技だ。このレースに勝ったチームが優勝だな。』

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

優勝が決まる一戦に生徒達の士気は再び上昇した。

「……ほう、面白い。ゆくぞ帰蝶。」

「え？ 行くって何処に？」

信長は帰蝶の手を引つ張り、競技が行われるコースまで行った。

「よし、赤組の優勝がかかっているんだ！ 絶対勝つぞ！」

「おう！ この日の為に、ずっと練習してきて……」

「貴様等……」

「ん？ 誰……て、織田信長ああ!?!」

「ななな何の用だ!?!」

「参加権利を余（オレ）に渡すか、今此処で地に還るか、選択肢は二つだ。」

『さあさあさあさあさあ！ お待たせいたしました！ これより大体育祭最終種目

『レース』を始めたいと思います！ 参加する生徒をご紹介しましょう！ まず

青組、毛利元親・龍造寺隆正ペア！』

「次こそは華麗に勝利してみせる！」

「おい毛利、あんまりそういうの言わないほうが良い。フラグが立ちそうだな。」

『そして黄組、名も無きモブ！』

「いやちゃんを紹介しろおおお！」

「モブキャラだからって手抜きすぎだろおおお!!」

『さぁ続いては……』

「無視すんなああああ!!」

『続いて白組、石田三郎・大友焰ペア!』

「いくぞ大友! 必ずや白組に勝利をもたらす!」

「うむ! 共に頑張ろう!」

『そして赤組、モブキャラ2……おや、ちよつと待つてくださいい? これは……!』

解説のアナウンサーの言葉が途切れたことに生徒達は不思議に思った。そして赤組のコースに本来出場する筈の無い二人がやって来た。

『……選手の交代です! 赤組の出場選手が「謎の腹痛」を起こした為、欠場しました

! 　そして、変わりに出場することになったのは……天神館・大将『織田信長』だあ

ああああああ!!』

全生徒が目を向ける。そこには腕を組み余裕の笑みを浮かべた織田信長と織田帰蝶がいた。

「さてと……遊戯の時間だ。」

「(また無茶な事して……でも、一緒に競技が出来て良かった……)」

「! 織田信長あああ! 大友! 赤組には絶対負けんぞ! いや、赤組は絶

対打ち倒すぞ!」

「お、おう……(熱い、石田が燃えている……)」

「はあああああ!?! 出るの!?! あいつ出るの!?!」

「わ、私の完璧な作戦が……」

『何と何と何と何と何と! 今までの競技にも参加しなかった天神館・大将がまさかの出場です! これは予想がつかなくなりましたね、館長!』

『まったくだ。あの野郎、大人しく傍観しているかと思つていたら……』

『それでは競技を始めたいと思います! 参加する生徒の皆さんは、クジを引いてください!』

係員が参加生徒達の前に行き、それぞれにクジを引かせた。

「よし、まずは俺達だ！」

「任せたぞ龍造寺！ 何を引くかで私達の勝率は大きく変わる！」

「おう！ ……これだっ！」

バツ！

『二人乗り自転車』

「……これって、当たりかな？」

「……何とも微妙なものを引いたな……」

「次はオレ達だ！」

「これだあああああ！」

バツ！

「どうって…大友は良いと思うぞ。」

「さて、次は余（オレ）か……」

「何が出るんでしょう。私、あまり運動は得意ではありませんから楽なものが良いです。」

バツ！

『何でもいいよん』

『おおおっと！ 赤組、『何でもいいよん』を引きました！ このカードは自分で好きな乗り物を選べるレアカードです！ 赤組、いきなりリードだあああ！』

「待てええええええええええ！ 何それ!? そんなの有り!?」

「納得いかんぞ！ 何でそんなカードを入れた!?」

『いやいや私達企画側も驚いています。全部で50種類もある乗り物クジの中に一枚だけ入れたカードが引かれるなんて……もの凄い強運の持ち主だあああああ！』

「(そういえばこの人、御神籤ではいつも大吉でしたね……)」

P r r r r r P r r r r r ガチャ「余(オレ)だ。一分以内に『アレ』を持つてこい。一秒でも遅ければ、今日が命日だと思え。」

『さあ、全ての準備が整いました！ 赤組は乗り物が来しだい参加することので、先に始めたいと思います！ それでは白組、青組、準備は良いですか？』

「全力で来るがいい……毛利、龍造寺。」

「そうさせてもらうぜ。チェーンの油はさし終えた！」

「なあ、石田？ 大友本当に乗っているだけで良いのか？ 引つ張らなくて良いのか？」

「か？」

「見せてやろう。この華麗なる私のチャリテクを！」

『それでは、位置について……よい、ドンッ！』

解説のアナウンサーの掛け声で、競技が始まった。白組、青組は共にスタートし激しい競争が勃発した。

「うおおおおおおおおお！」
ガラガラガラガラガラ……！

「ちよ、石田つ、揺れる！　メチャクチャ揺れている！」

石田・大友ペアは、石田が人力車を引き大友が人力車に乗るというスタイルで走っていた。石田は氣を高め、もの凄いスピードで人力車を引いていた。同時にその振動が大友にダイレクトに襲いかかった。

「龍造寺！　もつとペダルをこげえええ！」

「やってるよ！　チクシヨウ、やっぱハズレかこれ!？」

毛利・龍造寺ペアは、二人乗り自転車の前に毛利後ろに龍造寺が乗るというスタイルで走っていた。不馴れな二人乗り自転車のせいか二人は石田・大友ペアに抜かれていた。

『おおおつと！　まずは赤組、石田・大友ペアが前に出た！　もの凄いスピードで青組とグイグイ差を広げる！』

『飛ばすのはいいけど、安全運転を心掛けろよ。』

『さあ、第一コーナーを曲がれば障害物エリアに入ります！　ここには様々な障害物

の他に、先生方の妨害もあります！　一瞬の油断が敗北に繋がる危険なエリアです

！』

障害物エリアに入り竹槍、鉄球、砲撃、教師達の遠距離妨害に両チームは苦戦を強い
られた。

「うお!?　くっ！　人力車が大きすぎて、細かい動作が出来ない！」

石田・大友ペアは人力車の大きさが災いし、細かい回避が出来ないでいた。一方毛利・
龍造寺ペアは……

「毛利！　右だ！　そこ左！」

「フン！　フン！　龍造寺、どうやら私達はアタリを引いたようだ！」

「ああ、二人乗り自転車（これ）なら狭い道も進める！　形勢逆転だぜ！」

毛利・龍造寺ペアは見事な操縦テクニクで障害を回避し、石田・大友ペアを抜いた。

「くそ！　大友、スピードを上げるぞ！　早々にこの場から離れる！」

「うむ！　……！　石田、前！」

「！」

ズドオシヤアアアア!!

『何と！　石田・大友ペア、眼前の落とし穴に気付かず落ちてしまったああああ！』

落とし穴は深さ6mほどあり、重量のある人力車を持ち上げるのは至難です！　石

田・大友ペア……事実上脱落です！』

「ぐっ……くそ、大友、大丈夫か……？」

「何とか……でもこれじゃあ……」

「……くそ、くそおおおおおおお！」

石田の咆哮が落とし穴から聞こえる。それを他所に毛利・龍造寺ペアはゴールに進

む。

「やったぞ！ 障害物エリアも抜けたし、俺達の勝ちも確定だ！」
「ああ、やっとだ…やっと私達に勝利の女神が微笑んだか！」

自分達の勝利を確信し、優雅に自転車をこぐ二人。
しかし、彼等は忘れていた。
もう『1チーム』、残っている事を。

……………ブロロロロロロ……………

「ん？ 何だ？ この『エンジン音』は？」
「後ろから…？ いったい何だ？」

二人は同時に後ろを振り返った。そこには……

ブロロロロロロロ!

流麗ながら力強いデザイン、圧倒的存在感を放つ鉄の暴れ馬。

『マスターグ シェルビー GT500』がそこにいた。

そしてその暴れ馬の手綱を握っているのは……

「待たせたな。」

赤組、織田信長と織田帰蝶が乗っていた。

『ななな、何だ『アレ』はあああああ!?! 私の目に狂いがなければ、『アレ』は「マス

タングシェルビーGT500」! それも68年型だあああああ! それに騎乗して

いるのは織田信長・織田帰蝶ペアだあああああ!』

『おいおい……何でもいいとは書いてあったが、高校生が堂々と車に乗ってんじやねえよ……』

「はあああああああ!? 何アレ!? そんなん有りいいいいいい!」

「ちよつ、龍造寺! もつとこげ! ぶつかつて来るぞ!」

「いやいやいやいやいや、無理無理無理無理無理! 今MAXだつてこれえええ

!」

「……何を頼んだのかと思つたら…日本の法律では18歳以下は車を運転してはいけないですよ?」

「案ずるな。この車体はほんの少し『浮かせてある』。地面を触れていなければ法を破る事にはなるまい。」

「……それつてジャンプして地球にいなかつたつて言うのと同じレベルじゃ……」

『ここに来て赤組が怒涛の追い上げを見せる! 近づく近づく近づく! 毛利・龍造寺ペアにドンドン迫つていきます!』

「そんな氣してたよ! 何事も無く順調に進んでオカシイと思つたよ! やつぱり

こんな結末かコンチクショオオオオオオ!!」

からな。」

二人が飛んでいった方向を見ながら帰蝶は心配し、信長は笑っていた。

『いったい誰がこんな事態を予測出来たでしょうか!?』 最終コーナーを過ぎて残っているチームは赤組、織田信長・織田帰蝶ペアだけです！ これは事実上、優勝は赤組という事になります！』

アナウンサーの放送に赤組から喝采がとぶ。

「思っていたよりつまらんだな。やはりこの程度か……」
「車を使わなかったら、それなりに楽しめたの思いますけど……」

二人は驚喜する赤組とは対称にあまり盛り上がっていないかった。特に信長は退屈そうにぼんやりとしていた。

誰もがこれまでで思っていた。誰もが赤組の勝利だと思っていた。

……………オオオオオオオオオオオオ……………

誰もが予想していなかった。誰もが『彼等』は敗退したのだと思っていた。

……………オオオオオオオオオオオオ……………

『? 何でしょう? この音は?』

ガラガラガラガラガラ……………

『! この氣は!』

ガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラ

「ム? この声は……………」

「な、何でしょう? 何か聞こえます!」

ガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラガラ
ラガラ

「……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオ!!」

全生徒が顔を向けた先には……

「織田、信長おああああああああああ!!」

石田・大友ペアがいた。

「織田信長っ！　　貴様を倒す為鍛えたこの体！　　落とし穴（あれぐらい）で負けると

思ふなあああああ!!」

「ウプッ、石田、もつと優しく、吐いちゃう、大友吐いちゃう！」

石田三郎は『光龍覚醒』を使い、信じられないスピードで信長達に迫る。

「フフハハハ！　　そうではなくては！　　そうであろうとも！　　さあ最終局面、始めるとするか！　　石田！」

石田三郎の復活に信長は喜んだ。再び顔に笑みを浮かばせ、車の速度を上げる。

『何と何と何と何とおおお！　　脱落したかと思っていた石田・大友ペアがまさかの復活！　　一気に赤組との差を縮め、横一線に並びました！』
『……いつはあ、どっちが勝つか分かんねえぞ！』

生徒達のテンションは最高潮に達していた。優勝を決める最後の勝負、並び立つ両チームの目にゴールが見えてきた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」
「フフフフハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！」
「~~~~~!!（声が出せないでいる）」

「……………ハ?…」

「「……………え?…」」

ゴール目の前の両チームの前に何かが落ちてきた。

それは『人』だった。二人いた。

二人の側にはグニャグニャに曲がれた『二人乗り自転車』があった。

『……………大・逆・転……………!! 何と先程飛ばされた毛利・龍造寺ペアがゴールを

突き破って着地してくるといふまさかの展開!! ゴールテープは毛利・龍造寺ペアに

よって切られております!! よって、優勝は青組に決定で……………す!!』

「「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」

青組から大喝采がとびかう。まさかの展開に全生徒が驚愕する。織田信長と石田三郎は眼前の毛利・龍造寺ペアを見て開いた口が塞がらない。

「……お、い……何……か、勝った、みたい……だぞ？……俺、達……」

「……不思議だ……まったく嬉しく、な……い……ガクツ」

「………同、感……だ……ガクツ」

「……フフフ、どうやら余（オレ）達の決着は此処ではないようだな。」

「………ああ、そうらしい。」

信長と石田は向かい合い、お互いを見つめる。

「……中々力をつけてきたではないか。だがまだまだ。余（オレ）を倒すには、まだまだ足りんぞ？」

「そんな事は分かっている。だが覚悟しておけ……俺は貴様を倒す。貴様を超える。絶対に……」

「フフハハハ！　　そうでなくてはな。その時を楽しみにしておるぞ。」

「ああ、楽しみにしておけ。」

二人はお互い笑いながらコースを後にした。

「やはり石田（やつ）は余（オレ）の期待した通りに成長している。フッフ…楽しみだ、そう思わんか？」
帰蝶…ム？」

「キュウ…」

「気絶しておる…まったく、『魔王の嫁』が情けない。」

「…まだ力不足か…修行を今よりもっとハードにせねば…あつ、忘れていた。すまなかつたな大友、お前の事をすっかり忘れて…」

「…も、もう…ム、リ…ドボオルぼろシャアアア!!」

こうして、第27回天神館大体育祭は幕を閉じた。

〈余談〉

織田信長…石田三郎の成長に喜ぶ。体育祭を充分満喫した。

石田三郎…織田信長にまだ届かないと思いい知らされ、以前よりハードな修行に専念す

る。

毛利元親…体育祭のMVPに選ばれるが、全然嬉しくなかったそうである。

龍造寺隆正…上と同じ。

大友焰…大勢の前で盛大にリバースした事を恥じ、翌日人生で初めて学校を休んだ。

26

2009年

5月7日

天神館

Side：鍋島正

天神館の館長室で、鍋島は電話越しにかつての師匠と話していた。久しぶりにかかってきた師からの電話は世間話をするためではなかった。

鍋島の師『川神鉄心』は武の世界において知らぬ者無しと言われる程の達人である。川神鉄心には二人の孫娘がいた。

孫娘の一人『川神百代』は齢18にして祖父を超えたとも言われる強さをほこり、『武神』の異名を持ち世界最強とまでうたわれている。

そんな川神百代が最近修行に専念しないのだと鉄心は鍋島に伝えてきた。鍋島は静かに納得した。武人が修行する目的は、己の肉体を研磨するためだけではない。自身よ

り強い猛者と戦うため、超えるために修行するのだ。

『世界最強』とうたわれる程強くなつた川神百代は自分と互角に戦える者がいない……それゆえに修行に専念しないのだ。

そこで川神鉄心は孫娘が武人として墮落しないためにも強者と戦う機会はないかと考え、かつての弟子の鍋島に相談を持ちかけた。

『……という訳じゃ。そちの生徒と『うちの生徒』で『合同試合』を設けてみぬか？』
「……前から思ってたが、アンタいつも突然無茶苦茶な事言うな……」

師匠の提案に鍋島はため息を吐きながら答えた。

川神鉄心は『武の総本山・川神院』の師範である他に、『川神学園』という学校の校長も務めている。

この川神学園、簡単に説明すればもう一つの天神館である。むしろ歴史なら川神学園のほうが上である。そして川神学園には鉄心の二人の孫娘も通っている。

鉄心の話はこうだ。「川神学園と天神館、ともに未来ある若武者を育てる学舎。今後

の彼等の成長のために、合同試合をしないか」というものだった。

鍋島はこの話にすぐにYESと返事が出来なかった。

合同試合で得するのは川神学園（むこう）だけではない。天神館（こちら）にも最近『伸び悩んでいる生徒達』がいる。その生徒達にとって合同試合はもってこいだろう。そういう点ではこの話を了承したいところではあるが、鍋島にはそれが出来ない『不安要素』があつた。

そう、『織田信長』である。

あの男がこの合同試合に喰いつかないはずが無い。それだけが鍋島の不安要素だった。

『なあに、心配せんでもこれはあくまで『試合』じゃ。お主の生徒に大事にいたるような怪我はさせんよ。』

「……………」

電話越しに笑いながら話しかけてくる師は知らない。『大事を起こす奴』が天神館（こ

ちら）側にいる事を。

普通に考えれば何も心配はいらない。川神院の師範である師と『武神』と呼ばれるその孫娘。その他にも多数の豪傑が川神学園（むこう）にはいる。

だが鍋島は不安だった。それだけの武人がいても『織田信長（あのおとこ）』を止める事が出来るのであろうか……鍋島はどうしてもそのビジョンが浮かんでこなかった。

『万が一の時は儂が全力で止める。……まあ、そんな事は起ころんしやろうがな。』
「（起こりそうなんだがな……）」

一抹の不安を抱えたまま、鍋島は鉄心の頼みを断れなかった。

2008年 5月9日

S i d e : 西方十勇士

早朝、天神館の校庭では『西方十勇士』同士による激しい修行がおこなわれていた。

「鉢屋流忍術・分身の術！」

『鉢屋壱助』が両手で印を結ぶと鉢屋の体が左右にぶれる。次の瞬間、鉢屋壱助が五人になった。五人の鉢屋はそれぞれ違う武器を持って眼前に構える相手『石田三郎』に襲いかかる。

「……フッ！」

石田は体内の氣を『足』に凝縮させ、脚力を倍増する。強化された足がくり出すスピードは忍者の末裔である鉢屋を凌ぐ程であった。石田は五人の鉢屋の攻撃を紙一重でかわし、それぞれに的確に急所へ一撃ずつ叩き込んだ。

「「ぐんぐん！」」

加速によって重さが倍増された一撃に鉢屋の意識がぐらつく。地面に倒れこんだ時には、鉢屋は一人になっていた。

「ガトリング・クロウ！」

鉢屋の猛攻をかわした石田に、間髪いれず『大村ヨシツグ』が無数の拳打をくり出す。

「タァー！」

石田は嵐のような拳打をかわし、強化された足で大村の胴体に一撃を入れる。

「いふお…?!」

大村もまた鉢屋と同じように地面に倒れこんだ。あまりにも滑らかに、そして呆気なく二人は敗れた。鉢屋耆助、大村ヨシツグの両名はけして弱くはない。武人としても一流の達人である。だがそんな二人を石田三郎はたった二撃で倒したのだ。

「スゴイ……たった二撃であの二人を……」

「石田のやつ、めつき強うなったなあ……」

修行の様子を見ていた他の十勇士は石田をたたえ。わずか一年たらずで鉢屋壱助と大村ヨシツグを倒すまでの実力を身につけたのだから。

「これで十勇士No. 1は石田で決定かあ……ついこの間まで勝てただけどなあ。」

「これも石田さんの努力のたまもの。流石としか言い様がない。」

「動きも以前より洗練され良くなったしな。無駄のない鮮やかな動き……実に美しい

……」

「お前は何で何もかも全てそこに結びつけるかねえ。」

仲間達の賞賛をあびる中、石田の心中は晴れやかなものではなかった。

「……………」

「どうした石田？ 渋い顔をして。」

「……俺は、本当に強くなったのだろうか……？」

仲間の問いかけに拳を強く握りながら石田は答える。

この一年弱、石田はまさに血へドを吐くような修行をつみ重ねてきた。それは比喩ではなく、実際に石田は何度も倒れ、酷い時は病院に運ばれ意識が数日戻らぬ時もあった。それでも休む事なく修行をし続けた石田は、ついに鉢屋と大村を倒す実力を身につけた。

だが、石田は自分に『自信』が持てなかった。

「あまり自分を過小評価するな、お前は強くなった。…それこそ、今のお前は『かつてのお前』とは比べ物にならない程な。」

「……………どう、なんだろうな……」

自信を持つことは悪いことじゃない。むしろ確固たる自信は一流なら誰しも持っているもの。自信を持つことで技に磨きがかかることもある。

だが石田はかつて自信……正確に言えば『慢心』を持っていたため、『右腕』を失った。その事がどうしても頭にあるためか、石田は自信が持てなかった。

「……『証拠』が欲しい…俺が強くなった証拠が、以前の俺より強くなった確実な証拠が……！」

石田は確かな事実が欲しかった。根拠のある誰もが納得できる確証が欲しかった。

「それなら『いいのが』あるぞ。」

いち早く復活した大村が石田に『とある情報』を教えた。何でも近く『川神学園』と『合同試合』が行われるらしい。石田は川神学園の名を聞いて興味をもった。川神学園といえばあの『武神』をはじめ、多くの名のある武人達が通っていると聞く名校であった。

「……川神と合同試合か…！　面白い！　それなら俺がどれだけ強くなったか、今の俺がどれだけ『あいつ』に通用するか分かる！　大村、その合同試合について詳しく教えてくれ！」

大村は自分が入手した情報を細かく石田に伝えた。

同日

S i d e : 織田信長

天神館3―7、最高学年の最低クラスで織田信長は妻の帰蝶と一緒に、教室の窓から見える桜の花を見ながら茶を楽しんでいた。

「フウ……落ち着きますね。」

適温で入れられた緑茶を飲みながら帰蝶は一息ついた。購買で買ってきたみたらし団子をお茶うけに、信長は咲き誇る桜を覗いていた。

「ああ……『こういう』趣向もたまには良いものだな。」

「そうでしょう、フフ……あ、お茶のおかわりいますか？」

「ん……」

帰蝶は信長の湯飲みにお茶をつぎたす。信長は窓から香ってくる桜の匂いを満喫していた。その様子を帰蝶は嬉しく思いながら自分の湯飲みに口をつけた。

「……これで『鬭争』でも起こればなお良いのだがな……」

「ぶっ!?!」

危うく盛大に吹き出しそうになり、必死で堪えるが帰蝶はむせかえった。

「ゲホッ、ゲホッ……な、突然何を言い出すんですか!?!」

「ム? いや、ただ余（オレ）はこの場で戦でも勃発せんかとぼやいたただけだが？」

「何でこんなのでかで気持ちのいい春を血生臭くしようと考えるんですか!?!」

お茶が気管に入ったのか、帰蝶は涙目になっていた。

「何故？　それは余（オレ）が『第六天魔王（オレ）』だからだ。」

当然のように信長は答えた。

「余（オレ）はこうして美しく咲き誇った花を見るのが好きだ。こうして団子を味わうのも好きだ。こうして茶をすすり心を落ち着かせるのも好きだ。」

「だがそれ以上に、余（オレ）は闘争が好きだ。刀と刀が、拳と拳が、信念と信念がぶつかる闘争を見るのが……闘争に身を投じるのがたまらなく好きなのだ。」

信長の話を知蝶は不機嫌な表情で聞いていた。

知蝶は自分の夫が『そういう人物』だと分かっている。が、分かっているにしてもそれを心の底から受け入れることは出来なかった。

「（『そういう考え』さえなければ……）……貴方が望むものかどうかは分かりませんが、近々他校との合同試合が行われるそうですよ。」

「……………何？」

帰蝶の言葉に信長は呆気にとられる。

「…珍しいではないか、お前が余（オレ）に『そのような情報』を提示するなど。」

「いづれ分かる事ですし、今私が言ってもかまわないでしょう……………それに、せっかく燕さんが教えてくれた事ですから。」

「ツバメサン？ 誰だ？」

「『松永燕』さんですよ。」

信長は額に手をあてて記憶を探る。帰蝶の友人はこの学校には片手で数えるぐらいしかない。その中で松永燕という名前は…………

「ああ…『女狐』のことか。そういうえば最近見んな、どうした？」

「どうしたって……………二年生の三学期に転校したじゃないですか。お別れ会もしたでしょう。」

「覚えとらん。」

「……貴方って記憶が良いのか悪いのかどっちなんですか……？」

「自分で言うのも何だが良いほうだと思うぞ。ただ余（オレ）は興味も無いどうでもいい記憶をいつまでも覚えていてやるほど寛容ではない。」

確かお義父さんの誕生日も忘れてたんだっけ……帰蝶は言葉にしなかったが心の中で「都合のいい頭だな」と思った。

「それで、その合同試合とやら詳しい情報は無いのか？」

「あ、そうですね。」

ハツと思いだし、帰蝶は鞆から携帯電話を取りだしメールを読む。それは友人である松永燕から送られてきたメールであった。メールには合同試合について詳しく書かれてあった。

「試合は三週間後、神奈川県の川崎市にある川神学園とするそうです。対戦方法は……」

帰蝶は信長にメールの詳細を一字一句もらさず伝えた。

対戦方法が各学年ごとに分かれ、合計2勝した側が勝利すること…

参加人数は各学年200人ずつということ…

その他もろもろ伝え終わる頃には信長の顔は嬉しそうに『笑っていた』。

「……以上が『東西交流戦』の詳細です。」

「……『東西交流戦』…か、……面白そうだ。」

神奈川県

川崎市

『川神学園』

『天神館』と同じく武をカリキュラムに取り入れた学校。全国から多くの若武者達を集
い、育てる学舎である。

S i d e : —————

川神学園の一室『だらけ部・部室』では生徒達による東西交流戦にむけて作戦会議がおこなわれていた。

「以上が天神館に関する情報です。他に必要な情報（もの）はありますか？ 『大和』君。」
「いや、十分だよ『葵』。これだけあれば最良の作戦がたてられる。」

『直江大和』は『葵冬馬』から受け取った資料に目をやり、頭の中でいくつものシユミレーシヨンを想像する。

直江大和の考えでは今回のこの東西交流戦（ごうどうしあい）、自分達二年生が勝ちさえすれば勝利できるとふんでいた。

試合の勝利条件は「合計2勝すること」、一年生は天神館（むこう）も川神学園（こちら）もそれほど戦力差はない。どちらが勝ってもおかしくない。

三年生は：『負けるはずがない』。何故なら川神学園（こちら）には『姉さん』がいるのだから。

となると、勝利の鍵は二年生になる。二年生が勝ちさえすれば合計2勝で勝てる。直江大和はそうふんだ。

「でも問題は天神館（むこう）も二年生が一筋縄ではいかない……てところか。」
 『西方十勇士』……ですか……」

直江大和と葵冬馬は眉間にしわをよせる。

『西方十勇士』……西日本最強とうたわれる天神館の精鋭達。十人で構成される彼等は全員『二年生』……川神学園が勝つには彼等に勝たなければならない。

「彼等のプロフィールを拝見しましたが……川神学園（ここ）以外にもこんな方達がいるなんて、驚きです。」

直江大和は葵冬馬の言葉に無言で同意した。『姉さん』程とは言わないが、全員が川神院の門下生を軽くあしらう程の実力者だ。二人が必勝の作戦を考えていると……

ガラガラ……

「ういーす、大和お。はかどつてかあ〜？」

「お疲れ〜。差し入れ持ってきたよ。」

部室の扉から大柄な男子生徒と小柄な男子生徒が入ってきた。二人は直江大和がよく知る人物であった。

『ガクト』、『モロ』。ありがとう、今調度俺達二年生の作戦を考えているところなんだ。」

部屋に入ってきた二人、『島津岳人』と『師岡卓也』は直江大和の幼馴染みであった。三人は小学生の頃からの関係でとても仲が良かった。

「何だよ、俺様達なら大丈夫だろ？ 『ウチの女性陣』も出るし、それにS組の『アイ

ツラ』も出るんだし。」

「そうだね。あんまり考えこまなくて良いんじゃない？ 」

二人の言葉に直江大和は心の中で少しだけ同感していた。二人がこんなにも勝ち気なものには理由がある。それは……

ガラガラ……

「ウィ〜ス……今日の『決闘』終わったぞお〜。」

「こら『弁慶』、だらしないぞ。そんな怠そうな顔をするな。」

また部屋に二人の生徒が入ってきた。先程と同じく二人とも直江大和のよく知る人物であった。違う点を言うなら、二人の性別が女性だということだ。

ガラガラ……

「ウゝ、大和……今日も『義経』達に勝てなかったあゝ。」

「クウ……自分もだ。まだまだ鍛練が足りなかった……！」

「大和お疲れ様。皆のために一生懸命頑張る大和、素敵。結婚して。」

「お友達で……噂をしたら皆集まったな。」

間髪入れず新たに三人の女生徒が入室してきた。三人も直江大和の知り合いで、同じクラスのクラスメイトであった。五人を席に案内し、皆が持ってきた差し入れを全員に配った。

彼女達こそ島津岳人達が東西交流戦（こんかいのたたかい）に余裕をもつ理由であった。

彼女達は全員、剣・弓・薙刀他の武器にたけた武人なのだ。特に最初に部屋に入って

きた二人、『源義経』と『武蔵坊弁慶』は『壁を超えた実力者』であつた。『壁を超えた実力者』とは世界でも数えるほどしかない達人の総称である。

彼女達を見て直江大和は考える。

天神館側には『壁を超えた実力者』がいるという情報はなかつた。そんなに難しく考えなくてもいいかもしれない……直江大和はそう思つた。

「（……正直、今回の対戦は川神学園（おれたち）に『分がある』よな。二年生には義経達がいるし、三年生は……）」

直江大和達が余裕をもつものには『もう一つ』理由があつた。それは……

ガラガラ……

「ヤツホ〜！ 作戦会議さしてらつて聞いて来たよん♪」

「あれ？ 義経ちゃん達もいたんだ。」

「こんなに美少女がいっぱい……いい身分だな、大和？」

新たな来訪者が三人やつてきた。例に漏れず三人とも直江大和の知人であつた。三

人の登場に部屋にいた友人達も喜ぶ。

『お姉様』く、アタシまた義経に負けたあゝ！』

『おお、よしよし。可愛い義妹だなあ。』

『あれえ？ 『清楚』まで来たんだ、珍しい。』

『帰る途中で『百代』ちゃんに捕まっちゃって…』

『おやおや、賑やかになりましたね。『松永』先輩達も席についてください。女性を立てるわけにはいきませんから。』

『そう？ じゃあお言葉に甘えて♪』

新たにやってきた知人『松永燕』、『葉桜清楚』、そして『川神百代』。彼女達こそ直江大和達が余裕をもつもう一つの理由であった。

彼女達は三人とも三年生で、三人とも『壁を超えた実力者』なのだ。

川神百代は『武神』と呼ばれる程の達人。葉桜清楚はその清楚な見た目からは想像出来ない武器さばきをほこり、松永燕は『武道四天王』の一人。

正直彼女達が負ける想像が出来なかった。それほど彼女達は圧倒的に強いのだ。

「モモ先輩、大和に何か用でもあるのか?」

「ん? ああ、そうだ。東西交流戦の作戦会議をしていると聞いてな。どうだ? 天

神館(むこう)に楽しめそうな輩はいたか?」

「ん〜…いや、『三年生』には姉さんと戦えるような奴は『いなかったよ。』」

「え〜、楽しみにしてたんだけどなあ〜。」

むすつとむくれ顔になる川神百代(ねえさん)を見て、直江大和は「それは相手が可哀想だ」と思った。世界最強とうたわれる姉さんに敵う相手などそうそういないからだ。

ふと直江大和は松永燕の方を向く。見ると松永燕はいつものような親しみのある笑みを浮かべておらず、真剣な面立ちで天神館の資料を見ていた。

「……先輩? どうしました?」

「……この資料、大和君達が調べたの?」

「え、ええ、そうですが…?」

いつもと違う様子に部屋にいる全員が松永燕の方へ注目する。

「……大和君。悪いけどこの資料（じょうほう）、『データラメ』だよ。」

「え!? な、何でそんな事分かるんですか!?!」

自分が集めた情報が偽りだと言われ直江大和と葵冬馬は驚愕する。情報収集にかけては二人は川神学園一といわれる程なのだ。

「一年生と二年生はともかく、三年生の『彼』の情報が嘘っぱちだもん。多分…『彼』は自分の情報をさらさせないよう根回ししているね。」

「な、何故そんな事を?」

葵冬馬は慌てた様子で訊ねる。松永燕はゆっくり直江大和の方へ顔を向ける。

「大和君なら分かるよね? 『情報が分かっている敵』と『分かっている敵』とでは

どちらが『怖い』か。」

「……………」

その言葉に直江大和は納得する。どんなに強敵であろうと戦い方や戦術が分かればいくらでも対策がねれる。しかし、逆に言えばどんなに弱い敵でも戦い方や戦術が分からなければ、どう戦えばいいか分からない。

戦において敵を知る事は何よりも大事な事だと直江大和は思っている。だから松永燕の言葉はよく分かった。

「……でも、俺や葵でさえ掴めない奴なんて……」

「無理はないよ。だって『彼』は『裏社会の権力者達』と繋がっているもの。情報の操作なら君達より上だよ。」

直江大和は目を広げた。『裏社会』……情報を何より大事とする直江大和はその言葉の意味する事を瞬時に理解した。

そんな奴が天神館にいる……冷静を装っているが直江大和の心中は穏やかなものではなかった。

「な、何者だよ!?! ソイツは!?!」

「そ、そんなスゴい奴が天神館にいるっていうの!?!」

島津岳人と師岡卓也は松永燕に問いかけた。

「……皆知っていると思うけど、私は川神学園（ここ）に来る前は天神館にいた。『彼』は、私が二年生の時に天神館に転校してきた。」

松永燕は部屋にいる全員に顔を向け、『彼』について語った。

「……天神館には『将選挙』っていう学校の代表となる『大将』を決める伝統行事があるんだけど、『彼』は他校から『大将』に選ばれた異例の存在だった。当然、天神館側の生徒は納得しなかったよ。その中でも当時一年生だった生徒が『彼』に決闘を挑んだんだ。」

一区切りして、松永燕は大きく深呼吸して話の続きを語った。

「……『彼』は決闘を受け入れ、全校生徒が見る中で勝利した。……対戦相手の『右腕』と『誇り』をメチャクチャに壊してね……」

「「!!」」

その言葉にその場にいた全員が息を飲む。

「それ以来『彼』を大将と認めない者は一人もいなくなつた。『彼』は『恐怖』で天神館を手中におさめたんだ。」

「……………」

「な、何だその男は!? 許せん!」

「義経も同じ気持ちだ! 武士の誇りをメチャクチャに壊すなど…許されるものではない!」

女性陣が非難をまだ見ぬ敵にかけ中、直江大和は言葉が出なかつた。そんな危険な奴の情報を一切持たない状態で戦おうとしていたなんて…全身から汗が吹き出し気持ち悪かつた。

「へえ…おもしろそうじゃないか。」

この場にいる多くが汗を流し、顔をこわばらせている中、ただ一人楽しそうに笑っている者がいた。

「なあ、燕。そいつは東西交流戦（このたたかい）に出るのか？」

『武神』・川神百代は興味津々に松永燕へ訊ねた。

「……多分出ると思うよ。こんなおもしろそうな事に『彼』が喰いつかないわけがないから。」

「そうか、じゃあそいつと戦えるってわけか。ククク…楽しみだ。」

その言葉に部屋にいる全員の緊張が少しやわらいだ。たった今とんでもない強敵がいると聞かされたにも関わらず、自分達の頼れる姉貴分は楽しそうに笑っているのだから。

「(まったく……この人には敵わない。)」

直江大和はやれやれといった面持ちで川神百代を見た。松永燕も同じだった。自分でも戦いたくない相手に、まだ見た事もない相手にこんなにも興味を抱いているなんて……

「……百代ちゃんつて、本当に戦いが好きなんだね。」

「ああ、そんな強そうな奴がいるなんて知らなかった。俄然おもしろくなってきた！
燕、そいつの名前は何て言うんだ？」

そう言えば松永燕は『彼』の名前を言っていない事に気づく。そして、この場にいる全員にその名前を教えた。

彼等はその名を生涯忘れる事は無いだろう。彼等の人生をも変える、その名を。

「彼の名前は『織田信長』。『第六魔王』の異名をもつ天神館最強の男だよ。」

（東西交流戦）

- ・川神学園、天神館の両生徒達の今後の成長のために行われる合同試合。
- ・参加生徒は各学年ごとに200名ずつ。
- ・試合方法は団体戦。試合場所は川神市内にある川神院が所有権を持つ荒野。
- ・チームから『大将』を一人選び、先に相手の『大将』を倒した方の勝ち。
- ・使用可能な武器は学校側が承認した武器、またはレプリカの武器のみ。
- ・『万が一』が起こりそうになったら、両学校の教師達は速やかに試合を中断させる。
- ・試合順番は一年生、二年生、三年生の順番。
- ・試合時間は無制限。
- ・先に二勝した学校が勝利となる。

2009年

5月30日

川神市内にある荒野

「……以上が東西交流戦の対戦ルールじゃ。」

川神学園・校長『川神鉄心』のルール説明が終え、それを皮切りに川神学園、天神館の両生徒達が喝采をあげる。

「ウムウム、元気が良いのお。では今から30分後に試合を始める、一年生は準備をしておくように。また二、三年生と出場しない生徒は『観覧席』に移動するように………では解散！」

ぞろぞろと移動する生徒達。これから始まる試合に興奮している者、緊張する者、特にこれから最初に戦う一年生達の顔は皆こわばっていた。

『東西交流戦——一年生の部』は両者一步もゆずらぬ激しい勝負となった。

最初、優越だったのは川神学園だった。天神館の猛攻は『一人の女生徒』によってくい止められた。

彼女の名は『黛由紀江』。今年川神学園に入学した『劍聖・黛大成』の娘であった。彼女は『壁を超えた実力者』であり、次々と天神館側の生徒をなぎ倒した。開始してまだ10分ぐらいいしか経っていないのに天神館の戦力は半分にまで落とされていた。勝敗が決するのは時間の問題だった。

しかし、勝負は予想外の展開で終えることになった。

優戦だった川神学園側の『大将』が何を血迷ったのか『たった一人』で特功をし、あつという間にやられ天神館が勝利した。

後に川神学園側の『大将』に何故あんな馬鹿な真似をしたのか問い詰めると、
「あの黛由紀江がこのプレミアムな私を差し置いてでしゃばるから、どっちが『大将』なのか分からせるためにしたのよ！」

と語った。彼女がどういう処罰をくらったかはご想像にお任せする。

S i d e : 川神学園

「ご、ご免なさい…負けてしまいました…」

『落ち込むことあねえぜ、『まゆつち』。負けたのはまゆつちのせいじゃねえんだから。』

「そうよ、まゆつち！　まゆつちは頑張ったじゃない！」

「ウム、敵をバツサバツサとなぎ倒しているところは、まさに侍だったぞ！」

「で、でも……」

「大丈夫だって、心配いらねえよ！　俺様達が負けるわけねえだろ？」

「おう！　一年生のカタキは俺達がとってやるぜ！」

「み、皆さん！　…うううう！」

「ほら、まゆつち。ハンカチ貸してあげるから顔拭きなよ。」

試合に敗れ、意気消沈しながら戻ってきた黛由紀江を、彼女の仲間達『風間ファミリー』は励ました。仲間達の優しい言葉に黛由紀江はポロポロと泣き出した。

「ところで大和は？」

「向こうでS組の奴等と打ち合わせしてるぜ。」

島津岳人が指を差す方向で、直江大和は主力メンバーであるS組の生徒達と作戦内容を再確認していた。

「……以上だ。皆、何か異論はあるか？」

「ありません。実に計算された良い作戦です。称賛に値します、感謝しなさい。」

「僕もないよ。」

「フハハハハハ！ 実に見事な策略だ、直江大和！」

「底辺のクズにも誉め言葉を差し上げるなんて、素敵です！ 英雄様♪」

「フン！ 山猿にしては頑張ったものじゃ。」

「……もつと優しい言葉でほめてくれよ……」

S組の生徒達の言葉に、直江大和はため息をはく。川神学園は実力主義で、成績の優劣でクラスが決まる。最高クラスであるS組の生徒達は皆プライドが高く、他のクラスの生徒を軽視しているのだ。

「フフフ、ですがS組の生徒が誰かをほめる事なんて滅多にありません。流石ですね、大和君。」

「ありがとう、葵。でも、尻に手を伸ばすのは止めてくれ。」

尻をわしづかみにせんばかりに伸ばされた葵冬馬の手を直江大和は振りほどく。

「おや、勘違いですよ。ゴミが付いていたんで、取ってあげようと、ただけです。」

「気をつけろ、直江。その内後ろじゃなくて『前』を触ろうとしてくるぜ、若は。」

「……忠告ありがとう。」

「元氣ないね、大和お。マシユマロ食べる？」

「一つ、貰おうかな。」

マシユマロを口に入れ、甘味で気持ちを整える。これから始まる試合に向けて、ラックスしないと咄嗟に冷静な判断が出来ないからだ。

「おいしい、話終わったあ？」

暫くしてから、風間ファミリーの面々と試合に出場するF組の生徒達がやってくる。

「これ、山猿達。くれぐれも此方達の邪魔だけはするでないぞ。」

「何だとお！　　ゴルア！」

「こらそこ！　　喧嘩しない！　　これから一緒に戦うチームなんだぞ。」

早速いがみ合うS組とF組の生徒達。直江大和は喧嘩を素早くしずめ、コホンツと咳をし、集まった試合に出る二年生に叫んだ。

「たく、チームメイトなんだから皆仲良くやってくれよ。俺達は勝たなくちゃいけないんだから。」

そう、一年生が負けたので次に川神学園が負けたら、勝負は終わってしまうのだ。

「俺達は今ちよつとしたピンチに立たされている。でも、俺は皆ならこのピンチを切り抜けられると信じている。……天神館に、川神学園（おれたち）の強さを思い知らせるぞっ!!」

「オオオオオオオオオオオオオッ!!」

「さて、見せてやるぜ！　俺様の大活躍をな！」

「一年のカタキ討ちだ！　いくぜ、オラー！」

「『マルさん』！　一緒に頑張ろう！」

「勿論です、『クリスお嬢様』。必ずや我等に勝利を。」

「二子殿！　私の雄姿！　とくとご覧あれ！」

「う、うん！　頑張ろうね、『英雄』君！」

「冬馬あ、僕も頑張るよ。」

「フッフ、偉いですね『雪』は。しかし、無理をしてはいけませんよ。」

「ニヨホホ！　此方達にかかれば、天神館など烏合の衆も同然なのじゃ！」

「つてオイオイ……いくら何でも舐めすぎだろ。痛い目見るぞ。」

川神学園、二年生達のボルテージはMAXになっていた。やる気満々の仲間達を見て、直江大和は喜笑する。

「ようし、いくぞ！」

「「オオオウ！！」」

Side : 天神館

「フウ……いよいよよか……」

「緊張しているのか、石田？」

「ああ、少しな……」

天神館の選手控え室では、石田三郎を中心に出場する二年生達^が輪を作っていた。

「お、おい……大丈夫かな？」

「川神学園って、強い奴^らばかりなんだろ？」

「お、俺……戦えるかな……」

西方十勇士を除く生徒達は、先程の一年生の試合を思い返していた。川神学園（むこう）の『大将』が馬鹿だったから勝てたが、もし『大将』が『あの剣聖の娘』だったら……控え室に不穏な空気が流れる。

「……ちよつとヤバい空気だな。」

「おい、お前等！　　しつかりしろ！」

「「……………」」

「オイオイ、通夜みたいになってるぞ。」

「……やれやれ、どうしたものか……」

緊張が伝染していき、生徒達は次々と不安にかられ弱音をはきはじめた。十勇士達は暗く重たくなった空気を何とかしようとした時……

パンっ！

乾いた音が控え室に木霊する。生徒達が音の発する方へ顔を向けると、石田が手を叩いていた。

「…………敵が強い事なんて分かっていた事だ。相手は『川神』、弱いわけがない……」

石田は立ち上がり、全員に顔を向け、真剣な面立ちで語った。

「……俺はお前達に「あきらめるな」とか「最後まで戦え」とかは言わない。言えるような人間でもないしな。……ただ、『これだけ』は、お前達に言っておく。」

深呼吸をして、一問をあけてから石田はこの場にいる全員に言った。

「……『悔い』は残すな。結果がどうあれ、「あの時あすれば良かった」とか「こうしていたら勝てた」とか、後々言い訳するような事だけはするな。」

「「「……………」」」

この場にいた全員が石田の言葉を真剣に聞いていた。

「勝つても負けても、今日のこの戦いを今までの人生で一番の戦いにするんだ。誰にも文句を言わせない、最高の戦いにしよう！」

「「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」

生徒達から喝采がとび交う。もうクヨクヨしている者は誰もいない。いつの間にか、生徒達から不安は消えていた。全員の目が燃えていた。

「ハハハ！ やるねえ、石田！ 流石は『大将（リーダー）』だ！」

「ああ……これ程一つに団結するのは、初めてだ。」

「ウム！ 大友も燃えてきたぞ！」

「それがしは忍ゆえ、あまり感情を表に出してはいけなのだが……気分が高揚してきた。」

「さて、今回は俺ものんびり休んでいられないな。」

「石田さん、時間です。参りましょう！」

「ああ……行こう！」

川神学園と天神館。東と西の若武者達が、今宵雌雄を決する。

対戦場である荒野の広さは東京ドーム3個分。広大な大地は先の『一年生の部』を終えて、無数の足跡によって踏み均されてある。端から端までの距離は約630m、荒野の東と西には両校の出場生徒達が開始の合図を今か今かと待ちわびている。

『ではこれより！』『東西交流戦——二年生の部』を開始する！』

荒野に設置されてあるスピーカーから川神鉄心の声が流れる。その言葉を待っていたかのように、生徒達の瞳に火が灯る。

『正々堂々、お互い日頃の鍛練の成果を發揮せい！　では……………始めっ！』

プオーンツ……………！　プオーンツ……………！

開始の合図とともにホラ貝が荒野の隅々に響き渡る。その音をかき消したのは生徒

達の咆哮だった。先頭集団の生徒達は先陣を切ろうと駆け出す。

大地が揺れる。木々がざわめく。

『東西交流戦——二年生の部』はついに開始された。

S i d e : 直江大和

「よし！ 敵陣一番乗り、もらったわあ！」

「いや、自分が一番だ！ さあ、かかってこい！ 西の侍達！」

先頭集団に混じり駆けていく『川神一子』、『クリステイアーネ・フリードリヒ』の二人を確認しながら、直江大和はトランシーバーを使って仲間達と連絡をとっていた。

「こちら『司令塔』、各配置（そっち）の様子はどうか？」

「こちら『弓隊』、動きなし。」

「こちら『遊撃隊』！　同じく敵に動きはねえ！」

「分かった……『弓隊』は引き続き『監視』を、『遊撃隊』は先頭の様子を見ながら傾合いをはかって加勢してくれ。」

「了解」と短い返事を聞きトランシーバーを切る。

「さて……上手くいってくれよ。」

直江大和は自分がたてた作戦が成功する事を祈る。彼が考案した作戦はいたってシンプルなものだった。

『敵陣に突入した先頭集団が敵を蹂躪し、弓隊がそれをサポートし、敵の出方に合わせ控えている遊撃隊が先頭集団に加勢する。』

一見何のひねりもない作戦だが、これこそ最善の策だと直江大和は考えた。直江大和は作戦を考えるにあたって、『西方十勇士』のプロフィールを入手していた。

『石田三郎』、『島右近』、『大友焰』、『長曾我部宗男』、『毛利元親』、

『尼子晴』、『鉢屋老助』、『宇喜多秀美』、『大村ヨシツグ』、『龍造寺隆正』…

全員が一流の達人であり、手強い相手である。だが、直江大和は彼等の致命的な欠陥を発見した。それは『団結力』だ。強い力をもった者にあらわれる『慢心』ともいえる『プライド』。それが難攻不落と思われた城塞にあった欠陥（ヒビ）であった。

「（ああいう連中は『この手』に弱い…敵の『大将』は川神学園（こつち）の事を舐めているはず…：それぞれ自分の持ち場で好き勝手やっているだろう。）」

入手したプロフィールで『西方十勇士』が不仲である事が分かっていた。おそらく作戦なんて何一つたててないだろう…それが直江大和の見解だった。

「さあさあ！ 私の手は誰?!」

「遠慮は無用！ かかってこい！」

前もって設置しておいたカメラから先頭集団の映像が送信されてきた。天神館の戦力が『西方十勇士』以外は低い事を考え、川神一子とクリステイアーネ・フリードリヒ

を先頭に加えたのは直江大和であった。二人の戦闘力は並の生徒相手なら何十人かかろうと倒せない程高い。直江大和の見解では天神館の先頭集団には『西方十勇士』はいないとふんでいた。いたとしても、プロフィールから考えて『大友焰』か『長曾我部宗男』あたりだろうと直江大和はふんでいた。

だが…実際は直江大和の想像など、1mmもかすつていなかった。

「では、俺が相手になろう。悔いを残さぬよう…全力で来い。」
「な!?!」

先頭の映像を見て直江大和は驚愕する。

そこにはいらないと思っていた、いるはずがないとふんでいた『石田三郎』が映っていた。先頭の二人も眼前の敵に驚いていた。

「ん？　大和は先頭（ここ）にはいないって言つてたけど……ちようどいいわ！」

『大将（石田三郎）！　此処で討たせてもらうわ！』

「二対一だが、容赦はせんぞ！」

二人が動いたのは同時だった。二手に別れ、左右から挟み込むように二人のもつ武器が石田三郎を襲う。

「……フツ！」

ヒュンツ！　　ドガツ！

「え……？」

まばたき一回にも満たない刹那、石田三郎は一瞬にして二人の後ろに回りこんでいた。

「う……そ……」

「見えな、かつ……た……」

糸が切れた人形のように川神一子とクリステイアーネ・フリードリヒは倒れた。その少し後にチンツという音が鳴る。それは石田三郎が腰に帯刀しているレプリカの日本刀を『納刀』する音だった。

「ワ、『ワン子』と『クリス』が、一撃で……!?!」

直江大和が最も驚いたのは、二人が倒された事ではなかった。『石田三郎が先頭集団にいる』事が一番の驚きだった。

「先陣は天神館（われら）が切った……! 西の猛者達よ！ 俺に続けええええええ!!」

「「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」」

「! た、『大将』が『特功』だと……!?!」

それは先の『一年生の部』で川神学園側の『大将』がやったものとは違った。石田三郎の周りには数十人の生徒達がいて、互いが仲間を助け合いながら川神学園（こちら）に攻めこんで来た。

『団結力』……欠落していると思われたそれが、そこにはあつた。

「くっ！　ちよつと予想外の事態だ……！」

直江大和はトランシーバーで仲間達に連絡する。当初の作戦は失敗した。だが、直江大和はそれで終わるような二流ではなかつた。

『京』！　先頭集団に『大将』がいる！　もし狙えそうなら射つてくれ！　『キャツプ』と『岳人』は急いで先頭に加勢してくれ！　後………
『キャツプ』と『岳人』は急いで先頭に加勢してくれ！　後………

直ぐ様適格な指示をだし、風向きを調整する。これこそが直江大和の真価である。状況に合わせた最善策を瞬時に導く。それこそが直江大和が『軍師』の二つ名をもつ由縁であつた。仲間達に連絡を終え、直江大和はモニターに映る石田三郎へ目を向ける。

「どうやら二年生の情報も誤りだったみたいだな……でも、そうだよな。そう簡単に自分の思い通りにはならないよな……」

普通なら、作戦が失敗した事に悔いて落ち込むだろう。責任を感じ、逃げ出したくなるだろう。

だが、直江大和は違った。

「……おもしれえ……！ 相手にとって不足なしだ、天神館！」

笑っていた。楽しそうに……嬉しそうに……これから始まる強敵との戦いに直江大和は興奮した。

「こちら『司令塔』。思ってたより出番が早くなりそうだ。準備してくれ。」
『了解した！』

開始からまだ三分程しか経っていない。直江大和は確信していた。この東西交流戦

(たたかい)、大接戦の長期戦になるであろうことが……………

S i d e : —————

「凄い……………まさに一騎当千……」

先頭集団が戦っている地点からおおよそ200m程離れた丘の上で、『椎名京』が率いる『弓隊』は石田三郎の猛進を見ていた。刀をふるうたび、一人二人と倒されていく。石田三郎の実力は『本物』だった。達人である川神一子とクリステイアーネ・フリードリヒを一撃で倒した事が証明であった。

「……………アレは危険……………大和のためにも、ファミリーの皆のためにも、倒さないと……………!」

椎名京は背中に背負っている筒から矢を取りだし、石田三郎に向ける。彼女の弓の腕前は凄まじい。『天下五弓』にカウントされるその腕は、200m離れた位置からでも獲物を射ぬけるほどだ。

ギリギリと弓がしなる。弦が限界まで引かれ、椎名京の鷹の目が石田三郎に照準を合わせる。

「(動いているから狙いずらいけど……ここで終わらせる……!)」

フォン……

「?」

風を切る音が耳に入る。椎名京は矢を引く手を止める。

「…!?!」

常人より発達した椎名京の『第六感』が体を動かした。

声は聞こえないが、何か言っているのは分かった。男の外見に椎名京は見覚えがあった。直接会ったことはないがその顔は知っていた。そして理解する。『あの男が射つたのだ』と……

『毛利元親』……!』

「貴様等の相手は、この華麗なる私と私が選びぬいた精鋭達務めよう。」

椎名京 VS 毛利元親

Side : —————

「おお、『大将』が先頭に立つとあ……直江の作戦、いきなり駄目になったな……」

「フンッ！　だから此方はあんな山猿の案など信用するなと言ったのじゃ！」

次々と味方を倒し、侵攻してくる天神館の先頭集団を『井上準』と『不死川心』が率いる部隊は、先頭から100m程離れた地点から見ていた。作戦が失敗に終わった直江大和を井上準は同情し、不死川心は悪態をついていた。

「しかし『大将』が先頭に立つとは……どうやら天神館もたいしたことのない輩の集まりのようじゃな。」

「どうかねえ……たった一人で特功してくるなら分かるが、天神館（むこう）は集団で来ている。それに弓隊からのサポートがねえ……弓隊（そっち）も何かあったのかもしれないねえな。」

「フツ……弓隊の隊長も所詮はF組、作戦が失敗してあたふたしておるのじゃ。」

「（……椎名の奴が遅れをとる相手……気い引き締めた方がよさそうだ……）」

「……む？　おい『ハゲ』。何か、近づいてくるぞ。」

「ああん？」

不死川心が指差す方向で土煙が舞っていた。50m先、いや40m、30m先……ど

んどん近づいてくる。距離が近づくにつれ土煙の中に人影が見えてきた。数は十数人、顔が視認できるまで近づいてきて、井上準は戦闘体勢に入る。

近づいてきたのは天神館の生徒だった。そして先頭にたつ二人、その顔に井上準は見覚えがあった。

「おうおう、どんな奴が待ち構えていると思うたら……何やエライ上品なのがおるなあ。」

「ゆだんはするなよ『宇喜多』。きものものとなりにいるタコ頭、強いぞ……!」

先頭の二人が井上準と不死川心の前にたつ。不死川心は目の前の二人をただの天神館の生徒と思っっているのだろう。だが、井上準は知っている。二人の正体を……

『西方十勇士』のメンバー、『尼子晴』と『宇喜多秀美』を知っていた。

「うゝん……見れば見る程工工着物やな。いくらするんや、それ?」

「二ヨホホ! 庶民にしては良い目をしておる。これは有名な老舗の一品で、数百万する代物じゃ。」

「数百万!」　ほう……それはそれは……尼子!

ウチはあの着物の奴とやるは!

そっちのハゲは任せたで!」

「……まったく、金がからむといつもこうだ……」

敵の一人、宇喜多秀美は目をキラキラと輝かせながら不死川心に背中に背負っているハンマーを構える。

「その着物!　ウチが相手や!　着物汚したくないんやったら、今すぐ脱いでウチに寄越しなはれ!」

「フンツ!　下品な目で此方を見るでない。だが、かかってくるというなら……此方が遊んでやろう。」

「と、いうわけだ。タコ頭、わたしがあいてだ!」

「……やれやれ……君のような可愛いお嬢ちゃんとは公園で出会いたかったもんだぜ。」

井上準　VS　尼子晴

不死川心　VS　宇喜多秀美

「見たか！　　これぞ『大友家』秘伝・『国崩し』！」

天神館側から女性の活気な声が聞こえてくる。大きな大砲を脇に抱え、短く切られた髪を揺らして仁王立ちしているのは『西方十勇士』のメンバー、『大友焰』であった。

「くそっ！　　大砲とかアリなのかよ!？」

「チクシヨウ……敵だと分かっているが、カツコイイぜ……い！」

「石田の勝利のため、天神館（われら）の勝利のため！　　ここで討たせてもらうぞ！」

脇に抱えた大砲に次弾を装填する大友焰。その隙を二人は狙っていた。

「！　　今だあ！」

「仲間のカタキだあああああつ！」

二人は大友焰目掛けて駆ける。大砲の次弾装填に時間がかかることは、何度も喰らっ

ているうちに二人は理解していた。

だが、大友焔は慌てない。何故なら敵が二人で来るのと同じく、大友焔にも『仲間』がいるからである。

「おおうと、ここから先は通行止めだぜ？」

「!!」

二人の前に2 m近い巨漢が立ちふさがる。全身オイルまみれで立つ鋼の壁は『西方十勇士』のメンバー、『長曾我部宗男』であった。

「ほう、いい男が二人もいるじゃねえか。特にそっちのガタイのいい兄ちゃん、なかなかの筋肉だ。」

「へえ、西には分かる奴がいるじゃねえか。来な！ 俺様の肉体美に酔いしれやがれっ！」

「任せたぜ、岳人！ いくぜ！ お前の相手は俺だあああああ！」

「来い！ 西の力を見せてくれる！」

風間翔一

VS

大友焰

島津岳人

VS

長曾我部宗男

Side : —

「どうやら直江大和の作戦は失敗したようですね。」

「たく、あのガキ……初っぱなから大誤算かよ。」

荒野の周りを生い茂る密林の中を『忍足あずみ』と『マルギツテ・エーベルバッハ』は駆け抜けていた。彼女達が何故密林の中にいるのか？　彼女達は直江大和のたてた作戦で『大将を奇襲する』役目をおっていた。だが作戦は失敗し、敵の『大将』は前線にいる。彼女達が密林の中にいる意味はもうなく、前線に加勢しようと彼女達は駆けて

いた。

「しかし意外だな。てつきりお前は『お嬢様』を助けに一目散に飛び出すと思っていたけど……」

「……『クリスお嬢様』と約束したのです。「今回は助けは無用。自分の事は自分で何とかする」と……貴女の方こそ、『主』から離れるなんて意外でした。」

「……あたかも同じだよ。『英雄様』が「直江の作戦に協力してやれ」って……直江の野郎、この試合が終わったら絶対ボコる。」

「……ところで『女王蜂』。今の戦況をどう思いますか？」

「あたいをその名で呼ぶな。……五分五分じゃねえか？ 天神館（むこう）はどうか知

らねえが、川神学園（こっち）には『切り札』があるし、大丈夫だと思う。だがそれは天神館（むこう）も同じだ。とんでもない『隠し玉』を潜ませているかもしれねえ……」

「貴女もそう判断しますか……」

二人は冷静に戦況を考察する。先陣はとられたが負けた訳ではない。現在両校の戦力差はほぼ同じ。川神学園側には『切り札』があるので安心できるが、二人は楽観的に考えない。軍に所属する二人は戦場において敵を軽視したり、あまく見たりは絶対にし

ない。川神学園（こちら）と同じく『切り札』を隠し持っている想定し、一刻も早く自陣に戻ろうと駆け出す。

だが、密林にいるのは二人だけではなかった。音はなかった、気配もなかった、だが戦場で培って発達した『勘』のレーダーに反応があった。

「！　　誰だ！」

忍足あずみは反応地点に大量のクナイを投擲する。弾丸のような速度で飛ぶクナイは隙間なく反応地点に襲いかかる。

キンキンキンツ！

「！」

「……どうやら貴女の『同僚』のようですね。」

投擲されたクナイが全て弾かれる。忍足あずみは自分の攻撃が防がれた事に驚きはしない。彼女が驚いたのは『クナイを弾いたモノ』であった。それは遠い昔、今ではそ

の数は減少してしまった『忍者』が扱っていた投擲武器『手裏剣』であった。

「……………素晴らしい腕前だ。貴殿もそれがしと同じ者とお見受けするが……………如何に？」

木々の物影から一人の男が現れる。全身を漆黒の衣で包み、物音をいつさいたてずに現れた人物は『西方十勇士』のメンバー、『鉢屋壱助』であった。

「……………その手裏剣の形状……………貴様、『鉢屋』だな……………」

「そういううぬは『風魔』か……………隣の御仁もかなりの腕前と判断する。」

「正しい判断ですね。敵ながら賞賛に値します。」

突如現れた忍者に二人は動揺しない。ゆっくりと自然な動作で戦闘体勢にうつり、眼前の敵に強烈な闘気をぶつける。それに答えるように、鉢屋壱助は腰にさしてある短刀を構える。

「忍が正面から戦うとは……正気か？」

「私達二人を相手に白兵戦を挑むと？　それはあまりに無謀な考えです。」

「……確かに……忍の自分を考えるなら、それがしのとるべき行動はこの場を離脱し敵の『大将』の首をとること。だが今のそれがしは忍よりも、『武人』として、『仲間』のために貴殿達と戦うのだ。……ご教授してやろう、圧倒的戦力差とはどう覆すかをな……」

忍足あずみ、マルギツテ・エーベルバッハ

V S

鉢屋壱助

S i d e

「う、う……ん……あれ、私……？」

「ん……此処は……」

地面から伝わる振動で川神一子とクリスティアーネ・フリードリヒは目を覚ます。

「私、確か……！　　そうだ、石田三郎（あいつ）は!?」

「『彼処』だ。……どうやら自分達は随分と寝ていたらしい……」

二人のいる場所から200m程離れた場所で戦闘がおこなわれていた。その中に石田三郎の姿があるのを二人はとらえた。

「く……！！　　情けない……！　　たった一撃でやられるとは……！！」

「……悔しいのは分かるよ。けど今はみんなと合流しよう。まだ試合は終わってないよ
！」

「……そうだな！　　自分達も何かの役になる筈……！！　　行こう！」

「うんっ！」

二人は足下に落ちている武器を持ち直し、遠く離れた戦地に向けて走り出す。一刻も早く仲間達のスケットにと二人は全力で走る。

「おっと、お前達を行かせるわけにはいかないな…」

「!!」

二人の前に一人の男が立ちふさがる。二人は瞬時に武器を構え、眼前の男に警戒する。二人は男をよく観察する。その顔は何処かで見たとある顔だった。記憶を辿っていく……つい、ほんの少し前に見た顔……

「……………『大村ヨシツグ』……?」

「ほう、知らない間に有名になったものだな。」

その言葉を肯定と受けとる。二人が男を大村ヨシツグと判断するまで時間がかかったのは、大村ヨシツグの外見に理由がある。

二人が試合前に見た『西方十勇士』のプロフィールでは、大村ヨシツグは病弱で十勇士のサイバー担当。他のメンバーとは違い、戦闘員ではなかった筈……………

だが眼前の大村ヨシツグは病弱な様子など微塵もなく、真つ直ぐに伸びた背は屈強な雰囲気を漂わせ、その目はまるで猛禽類のような鋭かった。

「…………大和の情報だと、大村ヨシツグは非戦闘員と聞いていたが…………」

「おや、とんだデマを教えられたようだな。そっちのサイバー担当は、随分マヌケとみえる。」

二人は情報の誤りに驚かない。既に石田三郎（大将）が先頭にいるという前例を見ているのだ。今さら戦闘員が増えた事に一々驚きはしなかった。

「…………そこをどいてもらえる…………？」

「無理な相談だ。お前達を此処にしぼりつけておくのが、俺のミッションだからな。」

「ならば、力付くで押しとおる！」

「いくわよっ！ でえやああああ！」

二人は構えた武器を大村ヨシツグ目掛けて降りおろす。

「……その無鉄砲ぶり……うちの『大将』そつくりだな。……だが、通すわけにはいかんなあ。残念だが、お前達の東西交流戦は此処で終了だ。」

川神一子、クリステイアーネ・フリードリヒ

V S

大村ヨシツグ

Side : —————

椎名京と毛利元親が撃ち合いをしている同時刻、毛利元親率いる天神館側の陣地に近づく影が一つ。

「あ、あそこだ。」

独特の甘ったるい声と間の抜けた口調で喋る一人の少女。川神学園の制服に身を包む彼女『榊原小雪』は友人である直江大和と葵冬馬の指事で単身敵陣に踏み込んでいた。

『ユキ、今入った情報で椎名さん達『弓隊』が苦戦しているそうです。助けに行ってくださいますか？』

『弓兵は接近戦に弱い。小雪はコッソリ奴等に近づいて、奇襲をかけてくれ。』

『『トーマ』と『ヤマト』のお願い……僕ちゃんとやるよ……』

二人の指事を思い返ししながら、榊原小雪は真剣な顔で眼前の丘に向かい走った。彼女は気づかれないよう遠回りしながら敵陣に近づいていく。彼女はその細い体からは想像がつかないが、そうとうな体術の使い手なのだ。直江大和が彼女に奇襲を任せたのは彼女の強さが『本物』だからである。

暫くして、天神館の生徒の姿を彼女はとらえた。歩を進める足に力をいれ、今まさに飛びかかろうとした。

「おやおやおや………こんな所に何の用だい？」

可愛い白猫ちゃん………」

「！」

不意にかけられた声に榊原小雪は足を止める。声のする方へ視線を向けると……

「……………えーと、たしか……『リニューゾージ』だっけ？」

「おや、俺の事を知っているのかい？ シニョリーナ。」

『西方十勇士』の一人、『龍造寺隆正』が薔薇を口にくわえて立っていた。龍造寺隆正の登場に榊原小雪は驚いていた。何故なら仲間から、『龍造寺隆正は東西交流戦に参加しない』と聞いていたからだ。

「さて、シニヨリーナ……君にいくつか質問がしたい。…何、簡単な事だ……『此処』に何しに来たんだい？俺とデートがしたいってんなら大歓迎なんだが、『この先』に用があるってんなら話が違ってくる……」

「……どうちがうって言うのさ……」

「決まっているだろ……？」

龍造寺隆正の顔から笑みが消える。真剣な眼差しが榊原小雪に向けられる。

「……討たせてもらうぜ……ここから先は、行かせねえ。」

「……トーマと約束したんだ……だから、通してもらおうよ……！」

龍造寺隆正に向かい、榊原小雪は走る。彼女には勝算があった。直江大和からの情報で、龍造寺隆正は非戦闘員だと聞いていた。何らかの武器を持っているかもしれない

が、自分の間合いに入れてしまえばこつちのもの。龍造寺隆正との距離を一瞬で縮め、勢いに合わせて回し蹴りを繰り出す。

バシツ！

「……！」

だが、彼女の勝算は驚愕によつて崩される。急所を狙つた蹴りを、龍造寺隆正は『素手』で受け止めていた。

「ヒュウ〜♪ 思つてた以上に良い蹴りだねえ……それに、『縞パン』とは実に俺好みだ。」

「っ！」

慌てて龍造寺隆正から距離をおき、スカートを手で押さえる。

「……きみ、戦えないんじゃないの……？」

「おいおい……何処のどいつからそんなガセネタをつかまされたんだ？」

俺は『西方

「十勇士」の一人……戦えないわけないだろう……？」

榊原小雪の質問に笑みをもって答え、龍造寺隆正は構えを見せた。その構えを榊原小雪は知っていた。

「……『八極拳』……？」

「その通り。ま、かじった程度だからそんなに自慢できる腕じゃないが……」

そうは言うが榊原小雪は警戒を強める。龍造寺隆正の実力はまだ不明だが、彼が自分の攻撃を軽々と防いだのは事実だからだ。

「……約束したんだ……ぜったいに通させてもらうよ……！」

榊原小雪は再び駆ける。大切な友人との約束を守るために。

「……アツいねえ。だけど、負けられないのはこっちも同じでね。……天神館（うちら）の大将のため、珍しく頑張るとするかね……！」

榊原小雪 VS 龍造寺隆正

Side : —————

「ハアアアアアアッ！」

ズツガアアアアンツ！

「く…一人で相手をするな！」

「ウリヤアアアア!!」

十人ぐらいかたまってやれ！」

川神学園は今、敗北の危機におちいつていた。先頭集団に混じって猛攻し続ける石田三郎に追い詰められていた。

「……フツ！ 『雷光一閃』！」

フィン！

「「オアアアアアアア……!!」」

まさに一騎当千。石田三郎の一撃は一度も外れる事なく、確実に敵を倒しふせた。

「石田さん！」

「右近か……『そっち』はどうだ？」

「こちらは何度か攻撃をくりました。ですが、今のところ負傷者はおりません。」

「そうか……よし、このまま進むぞ！ 敵の本拠地も近い！ まわしを今一度しめ

直しておけえ！」

「「オオオオオオオオオオツ!!」」

進攻中、島右近が率いる別隊と合流し、石田三郎率いる先頭集団は雄叫びを上げながら突き進む。道中何人もの川神学園生徒を倒し、ついに…

「！ あれは……！！」

石田三郎は前方に注視する。およそ200m程離れた場所に川神学園のものらしきテントが見えた。そのど真ん中、自らが大将だと言わんばかりに自己主張している者がいた。

「フハハハハハ！ よくぞ此処まで来た！ 西の猛者よ！ 我こそ此度の戦にて

大将に選ばれた者、『九鬼英雄』である！！」

「……………何処かで見たような奴だな……………」

眼前の自己主張男と、自分が倒すと心に決めた敵が何故か重なった。だが気をとられたのは一瞬だった。石田三郎はすぐに眼前の自己主張男に狙いをさだめ、剣を降り下ろそうとした。だが…

「セアアアアアアアアッ！」

「っ！」

ガギイイイッ!

突如、上空から襲いかかってきた斬撃に石田三郎の足は止められた。石田三郎はさすが斬撃を受け流し、刀を前方へ構える。そこには上空より斬撃を放つたと思われる剣士がいた。

「……」までよくやった。賞賛に値するぞ天神館。だが、貴様等の猛進は此処までよー!

「……今の剣を容易く防ぐとは、流石は大將に選ばれるだけの者だ。この『義経』、西の猛者と手合わせしたいと常々思っていた! さあ、尋常に立ち会ってもらおうか!」

「……アイツ……確か、『源義経』……だったか……?」

石田三郎は眼前の女剣士を知っていた。彼の仲間、大村ヨシツグから得た情報で彼女の事を知っていたのだ。

『武士道プラン』、歴史に名を残す偉人のクローン。彼女はその一人であった。

「……おもしろい! 歴史の英雄と戦えるとは……こんな機会は滅多にどころかまず無いだろう。」

「た、大将……」

「お前達は下がっている。アイツは……相当強い……!」

何千、何万ともいえる修行を重ねてきた石田三郎は直感で理解した。眼前の敵の実力を。その腕は間違いなく達人中の達人のもの。もしかすると、自分より強いかもしれな
い相手に石田三郎は笑いながら刀を構えた。

「平安より現世に甦った英雄よ……この『西方十勇士』が長、石田三郎が相手をつとめよう!」

「応とも! この源義経、全力で受けてたつ!」

源義経 VS 石田三郎

S i d e : —————

源義経と石田三郎が刀を交えた同時刻。もう一つの戦いがすぐ近くで起こっていた。

「又オリヤアアアアアアアア！」

「……………そくら……………」

二人の武士が互いに持つ長柄をぶつけ合う。一人は『槍』を、もう一人は『錫杖』を、武器と武器がぶつかる度に火花が散っていた。

「……………たく、私ってこんな頑張るキャラじゃないんだけどなく……………」

気だるそうな口調で喋るのは『錫杖』で戦う川神学園生徒『武蔵坊弁慶』。

「ウウム……………その細い腕でこれ程の武器さばきをするとは……………肝を抜かされた。」

対して敵に賛辞を送るのは『槍』で戦う天神館生徒『島右近』。

二人が武器を交えたきっかけは武蔵坊弁慶が天神館生徒に奇襲をしかけた事から始

まった。幸いにもすぐ近くにいた島右近によつて奇襲は失敗に終わったが、その後二人は瞬き一つ許されない猛攻を繰り広げた。

「……そもそも、『教師』が試合に参加つてどうなのよ……？」

「生憎ながら、それがし立派にそなたと『同い年』。『西方十勇士』が一番槍、『島右近』とはそれがしのことなり。覚えておくがいい、『武蔵坊弁慶』。」

「つー……へえ、私の事知つてんだ……」

「無論。天神館を力のみの集団と思わぬことだ。此方には優秀なサーバーがいるのである。な。」

自分の名を当てられて武蔵坊弁慶は顔を引き締める。いくら天神館（むこう）に優秀なサーバーがいても、まさか九鬼財閥のトップシークレットである武士道プラン（じぶんたち）の事が知られているとは思わなかつたのだ。

「（……確か『松永先輩』が「天神館には情報に異常に強い奴がいる」つて言つてたつけど……）」

武蔵坊弁慶は錫杖を島右近へと構え直す。彼女にとって自分の素性が知られているのはそんなに重要な事ではなかった。彼女が今、もつとも重要と考えているのは…

「そこどいてもらえる？ 『おっさん』 ……義経の加勢にいきたいからさ。」

「そうはいかん。石田さんの真劍勝負、何人たりとて邪魔はさせせん！」

島右近も槍を武蔵坊弁慶へと構える。「一步も通さぬ」と言わんばかりの気迫が全身から漂っていた。

「……はあく、『本気』だすのダルいけど、倒させてもらおうよ…？」

「この島右近を、そう容易くどかせられると思うなあ！」

武蔵坊弁慶

VS

島右近

30

S i d e : 天神館

雲一つ無い晴天の空。距離およそ400m離れた丘と丘の境目で、『矢の雨』が絶え間なく降り続いていた。

「椎名流弓術・『爆矢雨』！」

「咲け！ 『アマヤドリ』！」

ヒュン……………ドオオオオオオン!!

椎名京が放った矢と毛利元親が放った矢がぶつかり合い矢の雨の中に爆煙の雲ができる。二人の…いや、両校の打ち合いが始まってからおよそ10分。両校一步もひかず、戦況は均衡していた

「(クツ…『アマヤドリ』が相殺されるとは…………) 全員手を休めるな！ 一瞬でも手を止めれば、あの矢の雨が襲ってくる！」

毛利元親は後ろに並ぶ弓隊に指示をする。

「(……両校の実力はおそらく互角……この勝負、先に一手取った方が勝つ……だが、『必殺の一撃』を放つには『溜め』が必要……)」

毛利元親は冷静に状況を読み取っていた。先に一手取った方……つまり、

『どちらが先に『必殺の一撃』を放つか?』

それがこの勝負の決着方だった。弓術とは本来遠距離からの援護や暗殺他に用いられる武術であり、敵を一撃で仕留める程の威力をもたないのが欠点である。毛利元親ほどの達人にもなればできることはできるのだが、それをやるには充分な『溜め』が必要なのだ。だが…

「……くっ……これでは、『溜め』ができません……!」

飛来してくる矢を打ち落としながら毛利元親は愚痴をこぼす。絶え間なく襲ってくる矢の雨から仲間達を守るのに手一杯で、毛利元親は『溜め』の時間が得られなかった。

「……だが、それは川神学園（やつら）も同じこと！　このまま此方も攻撃し続ければ、川神学園（やつら）にも『溜め』の時間はできない！」

毛利元親はそう判断した。十勇士のメンバーである大村ヨシツグから川神学園側の参加者を事前に聞いていたので、川神学園側に『必殺の一撃』が放てるのは『椎名京』『ただ一人』だと知っていたからである。

だが、それは間違った判断だった。それが後に大きな爪としてかえってくるのを、ただ彼は知らない。

S i d e : 川神学園

「（流石は『天下五弓』……実力は『本物』）……『溜め』をつくる隙が全然無い……飛来してくる矢を精密機械のように椎名京は打ち落とすとしていく。彼女も毛利元親と

同じ考えで動いていた。しかし、彼女もまた毛利元親と同じく動けないでいた。川神学園側は正直いって椎名京一人で何とかしている。彼女が他の生徒達が対処しきれない矢を全て打ち落としていた。勝負はこのまま長期戦にもちこまれ、持久戦になると両校の生徒達は思っていた。

だが、椎名京はそうは思わなかった。毛利元親が『溜め』の時間を欲して焦っているのとは逆に、椎名京は眉一つ動かさず、焦ることなく矢を射っていた。

何故彼女はこうも余裕なのか……自分が『必殺の一撃』を放たなければ勝負はつかないというのに、何故彼女はこうも冷静でいられるのか……

「(やっぱり私じゃ撃てそうにない……)……やっぱり貴方の力が必要……『溜め』はもう終わった?……『那須与一』……」

「……まったく、俺の周りにはどうして『普通の女子』ってのがいないのかね……」

何故なら、『必殺の一撃』を放てるのは彼女だけではなかったからであった。

「俺と関わると不幸になるというのに……まったく、俺の右手に封印されてある邪気がこころも人を引き寄せるとは……術式を変えた方が得策だな……」

「……………準備はできたの？」

「ああ、『完成』したぜ……………」

椎名京の後ろで顔に手をあて、髑髏をモチーフしたシルバーアクセサリーを身に付けた男が、通常よりも大きめな弓を天神館陣地に向けて構えていた。

彼の名は『那須与一』……天神館が得ることのできなかつた情報、存在するばすの無い『二人目の弓兵（アーチャー）』だった。

「……………まったくとことん不幸だな、俺は……………いったい後何回、この手は血を求め…屍を欲するのだろうか……………」

漫画に出てくるキャラクターが喋るようなクサイ、そしてイタイ台詞を那須与一は一

人で喋りながら、構えた弓を持って前に立った。

「お前達は、生と死の境界線をさまようだろう……奥義！」

彼の手が握っている矢から強烈な気が溢れ出す。それは仲間である川神学園の生徒達も一瞬おののく程であった。

「七大地獄への誘い（ワールド・ツアー）！」

そして、那須与一の手から今、『必殺の一撃（それ）』は放たれた。

Side：天神館

「！　な、何だ……この気は……まさか!？」

前方から感じる威圧感に毛利元親は冷汗を吹き出す。400m離れた場所からも確

認できる眩い強光、そして、それが秘める破壊力に毛利元親は恐怖した。

ヒュゴオオオオオオオオオオオッン!!

「!・ 全員地面に伏せろお!」

「!は、はいいいいい!」

普段決してそのクールな態度を変えない毛利元親の焦りの怒号に生徒達は驚愕しながらも、すぐにその指示に従う。

「(間に合うか…!) 開け! 『シダレザクラ』!」

毛利元親はすぐに向かってくる脅威に向けて、氣を込めた矢を放つ。しかし…

バアギイッ!

「ぐっ! 駄目か…! 『力』が足りない…!」

弓術の威力は『溜め』で決まる。といつても、ただユツクリと矢を引くという意味ではない。引きの際に生じる弦の反発力、反動、射った後の風の抵抗他…あらゆる要素で矢の威力は落ちてしまう。達人はそれらを考慮し時間をかけて『溜め』、最高の瞬間に矢

を射るのだ。

つまり何が言いたいのかというところ……『時間をかけてしつかりと『溜め』られた矢』と『急いで『溜め』た矢』とでは威力に明確な差ができるという事だ。毛利元親の放った矢は那須与一が放った矢をおさえることさえできていなかった。

「(クツ……だが、それなら……！)……ハアアアアアアアアアア！」

ヒュン……ヒュン、ヒュン、ヒュンヒュンヒュン……！

毛利元親は再び矢を射る。先程と同じ『溜めの弱い矢』を……しかし、今度はそれを何度も繰り返した。射つてすぐ次の矢を構え放つ。それを何度も何度も繰り返した。それは全て『同じ箇所』に被弾した。

水が何度も同じ場所に落ち続け、石をえぐるように……束になった矢は太く強靱になるように……

ビキッ……

「！……よし……これで少しはおさえられた筈……後は……！」

亀裂音が耳に届くと同時に毛利元親は弓と矢を守るように抱えて地面に伏せた。そ

「驚愕する龍造寺隆正。それとは逆にいつも通りの呑気な口調で榊原小雪は立ち上る土煙を見ていた。」

「これで『終わり』だね、後はキミをたおしてトーマとの約束も終わりだよ。」

背中を向け立ち尽くす龍造寺隆正に榊原小雪は突撃する。一気に距離をつめ、一撃で気絶させる程の蹴りを放つ。真後ろからの死角をついた完璧な奇襲だった。

「……………『終わり』？」

「！」

しかし、榊原小雪の蹴りに龍造寺隆正は後ろ向きで対応した。首を狙ってきた蹴りを左手でせいし、威力をそのままカウンターにつなげる。

「っ！」

しかし、榊原小雪はそれを巧みによけ龍造寺隆正と距離をおく。二人はお互いに構え、相手の動きを探る。

「……………おいおい、シニヨリーナ……………笑えねえジョークだぜ……………『終わり』？ アイツ等が？ アイツが？」

「……………終わりだよ……………だって、キミのトモダチみくんなふつとんじやったもん。」

今だ立ち上る土煙を指差して榊原小雪は言う。

「ハハハ……………ふつ飛んだ？ ………………『それで』？」

「え……………」

榊原小雪は戸惑った。目の前にいる龍造寺隆正が浮かべる不敵な笑みに。

「なあ、シニヨリーナ……………いったい何処のどいつから天神館（おれたち）の情報（こと）聞いたのか知らないが……………『あれ』しきでやられる『タマの奴』なんて、天神館（うち）には一人もいねえよ。ましてや……………『アイツ』がこの程度で音を上げるわけねえだろ……………」

「『アイツ』？」

「ああ、俺の悪友だね。いつも人のナンパの邪魔するは、人の口説いたレディを横取りするは、変な美学をいつもするはで、もう散々な奴だね……」

「……………そんなアイツが、よく分からねえ変な美学をいっつも追求しているアイツが……………こんな『美しくねえ負け方』、するわけないんだよ……………」

S i d e : 川神学園

「やった！ 勝ったぞ！」

「流石、椎名に那須与一だ！ 圧倒的だったぜ！」

川神学園側の弓隊陣地では勝利の喝采が上がっていた。全員が武器をおき、勝利の余韻に浸っていた。

「……まだ、終わっていない……」

しかし、椎名京は他の生徒達とは違い一人険しい表情でいた。

「まだ、大和達は戦っている……加勢にいかないと……」

そう……まだ『東西交流戦』は終わっていない。椎名京は他の生徒達にかまわずこの場を離れようとした。まだ戦っている仲間達のもとへ向かうために。戦闘態勢を崩さず……

だからであろう。彼女がいち早く『それ』に気づけたのは……

「……!?!」

誰よりも『それ』にいち早く気づいた彼女はおよそ反射行動に近く、そう……例えるなら『熱したヤカンにさわってしまい、思わず手を遠ざけるように』……椎名京は『それ』に向かって矢を放った。

バキィー!

「ひっ!? 何だ!？」

「何か飛んできたぞ!？」

突如聞こえた破裂音に川神学園生徒達は喝采を止める。

「なん……だと……!？」

呟いたのは那須与一だった。彼もまた闘いは終わったものだと思い、帰ろうとしていた。

「まだ……『終わっていないかった』……!？」

椎名京が打ち落としたのは、『矢』だった。つまり…

「お、おい……また来るぞ!？」

「マジかよ!？」

矢が飛んできた先、天神館の陣地から再び矢の雨が川神学園に襲いかかってきた。

「早く構えて！　もたもたしないで！」

「は、はい……!!」

滅多に出さない椎名京の大声に川神学園の生徒達はビックリしながらすぐに弓を構えた。

「チツ……俺としたことが……右手の力をおさえすぎたか……」

「……………」

後ろでそんな事を言っている那須与一をよそに、椎名京は己を叱責していた。心の何処かで、彼女は天神館を舐めていた。とるに足らない存在だと……今、それが大きな過ちである事を悟った。

「……………これが……『西の武士』……!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

生徒達全員の熱意が、闘志が、一つになっていた。彼等はただヤケクソに攻撃しているわけではない。彼等の攻撃には『目的』があり、全員がそのために残る力を全てふりしぼっていた。

5分前、那須与一の『必殺の一撃』により天神館の生徒達はほぼ戦闘不能におちいられた。まともに動いて、かつ闘える者は十人いるかないかだった。全員が敗北を悟った。

悔しかった。情けなかった。何もできぬまま試合が終わるのがどうしても納得できなかった。けれどこの戦力ではもう闘えない。悔いを残し、試合が終わるのをただ待つだけだと全員が思った。

『一人』以外は。

「何を……弱音を吐いている……それでも、天神館の精鋭部隊か……」

そう、毛利元親である。最後まで応戦していたためか、彼が一番怪我をしていた。だが、彼の目は先程よりもアツく燃えていた。

「フフフ……私はな、正直勝ち負けなんてのはどうでもいい。華々しく勝利するのはいいが、偶然勝ったようなショボい勝利なら、盛大に散る敗北の方がましだ……」

「なあ、認められるか……こんな『負け方』。いきなり不意討ちのような一撃を喰らわせられ、己の実力も出しきれていない……こんな『負け方』……私は断じて認めん！」

ボロボロの肉体で、今にも気を失いそうな意識でありながら、毛利元親は笑っていた。その姿に天神館の生徒達は不思議と心が動かされた。毛利元親の言葉に、消えそうな彼等の闘志は再び燃え始めた。

「私は認めんぞ……こんな『結末』など……我々がとるべき『結末』は、『美しく勝利する』か『美しく敗北する』か……二つに一つ……！」

「故に！……私はまだ、闘うぞ……納得のいく『敗北』をするため、納得のいく『勝

利』をするため、微塵の後悔のない『結末』にするため……！」

いつの間にか土煙は消え失せ、それと同時に全員の上に『風』がふいた。とても爽やかな『風』が……

「いくぞ……」からが……真の『東西交流戦』だ……！」

そして、今にいたる。

再び闘志を燃えたぎらせる彼等は一切の恐怖を持たず矢を放っていた。そして、その後ろ……ほんの数m離れた場所で毛利元親は精神統一をしていた。

そう、『必殺の一撃』を放つため。

暫くして、川神学園からの反撃が始まった。戦力が大幅に削られている天神館は攻めから一転して守りに。だが、彼等は揺るがない。全ては毛利元親の『最高の一撃』を完成させるため……

「お前達……『3分』、『3分』だけ時間を稼いでくれ……私が川神学園（やつら）を倒すためには、それだけの『溜め』が必要だ。」

3分……日常ではカップ麺を作る程度の短い時間だが、戦場において『3分』というのはとてつもなく長く、重要な時間だった。最初、毛利元親からそれを聞かされた時も彼等是可以るかどうか心配だった。

だが、今……彼等是不安など微塵もいっていない。何故なら……

「どうした？　何を心配している……お前達なら楽勝だろ？　お前達は………
『この私』が選抜抜いた『精鋭部隊』だ。私はお前達の実力を『信頼』して頼んでいるのだ……これ以上に、お前達に頼む理由が必要か……？」

ある筈がなかった。『信頼している』……その言葉が彼等から不安を消し飛ばした。

「天神館を……舐めるなあああああああ!!」

S i d e : 川神学園

天神館の反撃を防ぎながら椎名京は考察していた。

「(この攻撃……まるで『後』を考えていない……)」

弓術とは非常に精神力、体力を使う武術であり、いかに体力を温存するかが闘いではキモとなる。しかし、天神館の攻撃からは体力の温存など微塵も感じ取れなかった。

「いったい……何を考えて……!!」

そして椎名京は思い出す。突然の反撃に対処するのに気をとられ忘れていたが、天神館(むこう)には『彼』がいることを……

「そうか……………毛利元親……………」

そして彼女は気づく。天神館の作戦に…

「そうはさせない……………時間かせぎしているってことは、『まだ『溜め』が終わってない』ということ……………」

椎名京の読みは正しかった。毛利元親が『溜め』に要する時間は『3分』。天神館が反撃をしてからまだ1分程しかたっていないなかった。

つまり……………この勝負の決着方は先程と変わらない。

『どちらが先に『必殺の一撃』を放つか?』

それ一つだった。

打ち合いが続く。矢と矢がぶつかり合い、雨は暴風雨になっていた。どれほどそれは続いたのだろう。時間の間隔は全員麻痺していて、1秒たったのか1分たったのか分からなかった。

そして……………さきに『溜め』が終わり、『勝利の女神』が微笑んだのは……………

「クツ……少々悔っていた……まさかこの右手に封印した邪気を開放することになるとはな……」

川神学園だった。先程よりも強い氣を纏った矢を那須与一は構える。それは当然の結果だったのかもしれない。歴史上随一の弓の達人『那須与一』のクローンである彼が要する『溜め』の時間は、毛利元親よりもはるかに短い。実際彼が要した時間はわずか一分半だった。

「我放つ雷神の一撃に慈悲はなく、汝を貫く光とならん！」

那須与一が握る矢から強い氣が溢れ出す。それと同時にいつそう眩しさを増すその矢に、思わず椎名京や他の生徒達は手を止める。

「竜神王咆哮破（ドラゴニックブレス）！」

したくない』……そう思いながら手を動かし続けた。

石田三郎（大将）が言った。毛利元親（リーダー）が言った。自分達か憧れる武士（もののふ）が言った。

『悔いを残すな』と……ここで動かなければ一生の悔いになる。だから彼等は動き続けた。弦が指に喰いこみ、肉がさけ、血が吹き出してろくな構えもできていない弓で彼等は攻撃し続けた。

「「負けるんなら……灰になるまで燃え尽きてやるぜえええええええ!!」」

彼等の矢は強烈な光の中へ吸い込まれ、まるで歯が立たなかった。それでも、確実に、それはコンマ一秒にも満たない僅かな時間であったが……彼等はそれを喰い止めていた。

「よくぞ吠えた……それでこそ、私の選んだ者達だ……」

そして、『3分（約束の時）』は訪れた。

「！ 毛利さんっ！」

「待たせたな……準備は整った。派手に吹き飛んで敗北するか、見事に逆転勝利するかのどちらかのな……」

ボロボロの体でありながら毛利元親は力強く地面に立ち、『溜め』に溜めた矢を構えていた。ギシギシと弓がしなり、氣で満たされた矢が飛来してくる矢（それ）に向けられる。

「さて、お前達……もう悔いはないか……？」

「「……………ハイ!!」」

「フツ……そうか……では、ゆくぞ！」

すみきった声の返事を聞き、毛利元親は笑った。他の生徒達も同じだった。迫り来る脅威を前にしながら、全員が穏やかに笑っていた。そして……

「……………翔べ！」

毛利元親の『必殺の一撃（それ）』は放たれた。

Side : —————

ドツガアアアアアアアアアアアンツ!!

「げ!? な、何! 何この音!」

「爆発か!」

「嘘…………アレを『受け止めた』…………!」

椎名京、川神学園生徒達、そして那須与一は驚愕した。那須与一が放った『最高の一撃』は敵陣地に着弾する前に、飛来した矢によって喰い止められたのだ。

威力だけなら那須与一が放った矢の方が上だっただろう。しかし、毛利元親が放った矢はドリルのように回転していた。えぐるように、削り取るように……

中された氣は那須与一の矢に喰いこんでゆき、そして……

切っ先に集

バアギイイイツ!!

「! 『相殺』 ……しただと…?!?」

矢と矢は互いに相手を削り合い、空中で粉々に碎け散った。その光景に那須与一は開いた口が塞がらなかった。その他の川神学園生徒達は事態に追いつけず茫然としていた。

しかし、椎名京は違った。

「……………?」

彼女は『ある異変』に気がついた。それは彼女が卓越した『観察眼』を持っていたから気づけたのだろう。

那須与一、毛利元親の両名が放った矢は空中で碎け散った。それは確かだった。だが
……

「何……………あれ……………『破片』が『空中に浮いている』……………」

砕け散った矢の破片は重力に従いパラパラと地面に落ちていった。だが、毛利元親が放った矢の破片は空中に浮いていたのだ。一つ一つが『回転』し、『氣』を纏いながら
 ……

「……………『桜』の『一番の見時』を知っているか…？　　川神学園……………」

遠く離れた天神館陣地で、毛利元親は川神学園に向けて喋っていた。

「それは…………七分咲きでも、満開でもない……………桜の最高に美しい瞬間は、『花卉が散る瞬間』だ。」

「桜は他の花と違い、散る時は一斉に散る……………だからこそ、美しい。『一斉に咲き、一斉に散る』……………他の花は持ち得ない『散るからこそその美』が、桜の美しさなのだ。……………
 そして、『この技』もそうだ。」

……シユル、シユル、シユル、シユル……

「矢は元々『砕けやすく』できている……回転加えることで威力と速度を増し、氣を纏わせることで強度を上げる。」

……シユル、シユル……シユルシユルシユルシユルシユルシユルシユルシユル……!!

「さあ………舞い散れ……『千本桜』!!」

シユルシユルシユルシユルシユルシユルシユルシユルシユルシユル……ヒュオンヒュオン
ヒュオンツ!!

砕け散った矢の破片は、まるで風に舞う桜の花弁のように、川神学園に襲いかかった。

「? 何だ……アレ?」

「破片が………! 此方に来るぞ!?!」

「!」

川神学園がそれに気づいた時は、もう遅かった。毛利元親の矢の破片による第二撃は破片で軽い分、先程よりも速い速度で襲ってきた。椎名京と那須与一は急いで対処しようとするが……

「……！ 駄目……『的』が『小さすぎる』……！」

椎名京も那須与一も間違はなく達人だった。しかし、いかに達人である二人でも『空中をもの凄い速度で飛ぶ小さな小さな矢の破片』に矢を当てるのは不可能だった。

ヒュオンヒュオンヒュオン……ズドドドドドドドドドドオン!!

「「うおおああああああああ……!!」」

そして、それは川神学園陣地に無数に降り注いだ。一つ一つが『必殺の一撃』と同じ威力を持つ破片が、無数に襲いかかったのだ。

「大……和……ゴメン、『負け』……ちや、った……」

そして、時間にしておよそ20分……『東西交流戦』の『弓兵対決』に決着がついた。

「……………最初の石田を狙った事といい、不意打ちに等しい攻撃といい、不粋な連中ではあったが……………その散り様は桜と同じく、美しかったぞ……………川神学園。ああ、それと……………覚えておくといい。『勝利の女神』は、浮気癖が強いことを……………」

そう言い残すと毛利元親は地面に倒れた。他の天神館生徒達は毛利元親を抱き上げ、静かに寝かせる。その寝顔はとてすみきった笑顔であった。

椎名京 VS 毛利元親

勝者： 毛利元親

「ヒュウ〜♪ やるじゃねえか、アイツ……」
「!」

龍造寺隆正と榊原小雪は無数に降り注ぐ矢の破片を遠くから見ていた。そして二人は確信する、『決着がついた』と……

「どうだい、シニヨリーナ? 『あれ』が天神館（おれたち）だ。ちょっと前なら君の言う通り、さっきのアレで負けていたかもしれないが………大将の性格がうつつたのか、俺達全員『諦め』が悪くてな……」

「………」
「さて、と………向こうも終わったことだし………こつちも決着つけるかい?」
「………僕に勝つつもり?」

不敵な笑みで構える龍造寺隆正を、榊原小雪は不思議なものでも見るように見る。

「……………キミじゃ僕に勝てないよ……だってキミ、『弱つちい』もん……」
 「ハハハ……イタイとこついてくねえ、シニヨリーナ。」

先程から何度か繰り広げられた攻防で、榊原小雪は龍造寺隆正の実力を見透かしていた。ハッキリいって……龍造寺隆正は榊原小雪よりも格下だった。何度か攻撃を防がれたが、『それだけ』だった。

「……………確かに、俺の八極拳は護身用程度の腕だ……君を倒すほどのものじゃない。けどな……………」

腰を低く落とし、左手を後ろに隠す構えをとり、龍造寺隆正は榊原小雪に対峙した。

「『これ』は別に一对一の『試合』じゃないんだぜ……勝つか負けるかのルールの試合じゃねえ……どっちが最後まで立っていられるかの『戦』だ……!」

「……………」

「さてと……お喋りがすぎたな……そろそろ俺達の勝負も、クライマックスといこうか!」

「！……………負けないよ……………ぜったい……………！」

二人が駆け出したのはまったくの同時だった。龍造寺隆正は依然左手を後ろに隠しながら、榊原小雪は足に氣を纏わせながら、お互いの距離をつめた。

「やああああ……………！」

榊原小雪が先に仕掛けた。今までで一番最高の威力で放った蹴りは龍造寺隆正の頭部目掛けて繰り出された。

しかし、

「くう……………ああっ！」

「！」

龍造寺隆正はそれを紙一重でかわす。それは本当にギリギリで、後ほんの数mmで間違いなく蹴りは命中していただろう。

ギリギリのところをかわした龍造寺隆正はすかさず隠していた左手を、榊原小

雪につき出す。

カチャン……………

「え?」

金属と金属が擦れあう音が耳に届いた瞬間、すつとんきような声を出した榊原小雪は
……………

「え? え、うわああああ!」

「くう……………痛つええ!」

龍造寺隆正と一緒に盛大に転んだ。

「な、なにこれ……『手錠』？」

「ハハハ……言つたろう、『これはルール有りの試合』じゃないって……」

榊原小雪の右手には手錠がはめられていた。先程の金属音は手錠をかけられた音だったのだ。そして、手錠のもう片方は龍造寺隆正の左手にはめられていた。そして二人が転んだのは、蹴りをよけた反動でこけた龍造寺隆正につられて榊原小雪も一緒に転んだのだ。

「これで、勝負は『終わり』だ。この手錠はメチャクチャ固いし、君の力じゃ壊せない。鍵で開けようにも、俺も鍵を持っていなくてね……この勝負、『引き分け(ドロ)』ってことで……どうかな？」

「……手錠(これ)……外して……」

「まあまあ、そう嫌がらずに……勝負も終わったことだし、俺と愛を育まないか？」

「いやだ、ベエくだ！」

「ハハハ……はあ、これで『二人目』だよ……フラれたのは……」

不機嫌そうに頬を膨らませる榊原小雪を見ながら、龍造寺隆正はやれやれといった表

情で笑っていた。

榊原小雪 VS 龍造寺隆正

勝者：なし 引き分け